研　究　紀　要

第　7　号

青森市野木遺跡のまとめ－竪穴住居跡について－	中嶋　友文	1～14
土偶の製作－青森県埋蔵文化財調査センター所蔵資料から－	成田　滋彦	15～28
大木系土器の受容傾向－円筒土器と大木系土器の共伴事例から－	坂本　真弓	29～39
青森県内における縄文時代前期末～中期初頭の異系統土器群について－県内出土資料の集成－	茅野　嘉雄	40～54
「最花式土器」雑感	小笠原雅行	55～60
青森県における余市式土器について	上野　茂樹	61～64

2002

青森県埋蔵文化財調査センター

青森市野木遺跡のまとめ
－竪穴住居跡について－

中　嶋　友　文

１　はじめに

青森市に所在する野木遺跡は、青森中核工業団地造成に伴い1995～98年に当センターによって調査（青森県：1998，1999，2000，青森市：2001）が実施され、古代の大規模な集落跡が検出された。なかでも９世紀後半～10世紀前半にかけての多数の竪穴住居跡とともに、膨大な遺物が出土したが、時間的余裕がないこともあって十分な考察ができないままに報告書が刊行された。そこで報告書で触れられなかった点について若干の再検討を加えることとし、今回は竪穴住居跡について分析するものである。

野　木　遺　跡（南から）

2　遺跡の概要（図１・２）

野木遺跡は、青森市南西部を流れる荒川支流の牛舘川と合子沢川に挟まれた標高約40～90mの北から南にかけてなだらかな丘陵地に立地し、北端部を沖積地である平野部に接している。遺跡の範囲は南側に広がるものの、平安時代の竪穴住居跡約300軒、土坑、溝状遺構、畠跡（畝状遺構）、道跡（階段状遺構）、水場遺構、便所跡（周りに溝と柱穴をもつ土坑）、焼成遺構（土師器の焼成が行われた土坑）など、ほぼ一つの集落の主要部を調査したといえる。出土した遺物のほとんどが竪穴住居跡と水場遺構からのもので、平安時代の土師器と須恵器を中心に、石製品、鉄製品、鉄滓、羽口などのほか500点以上の木製品が段ボール箱で約800箱分出土している。

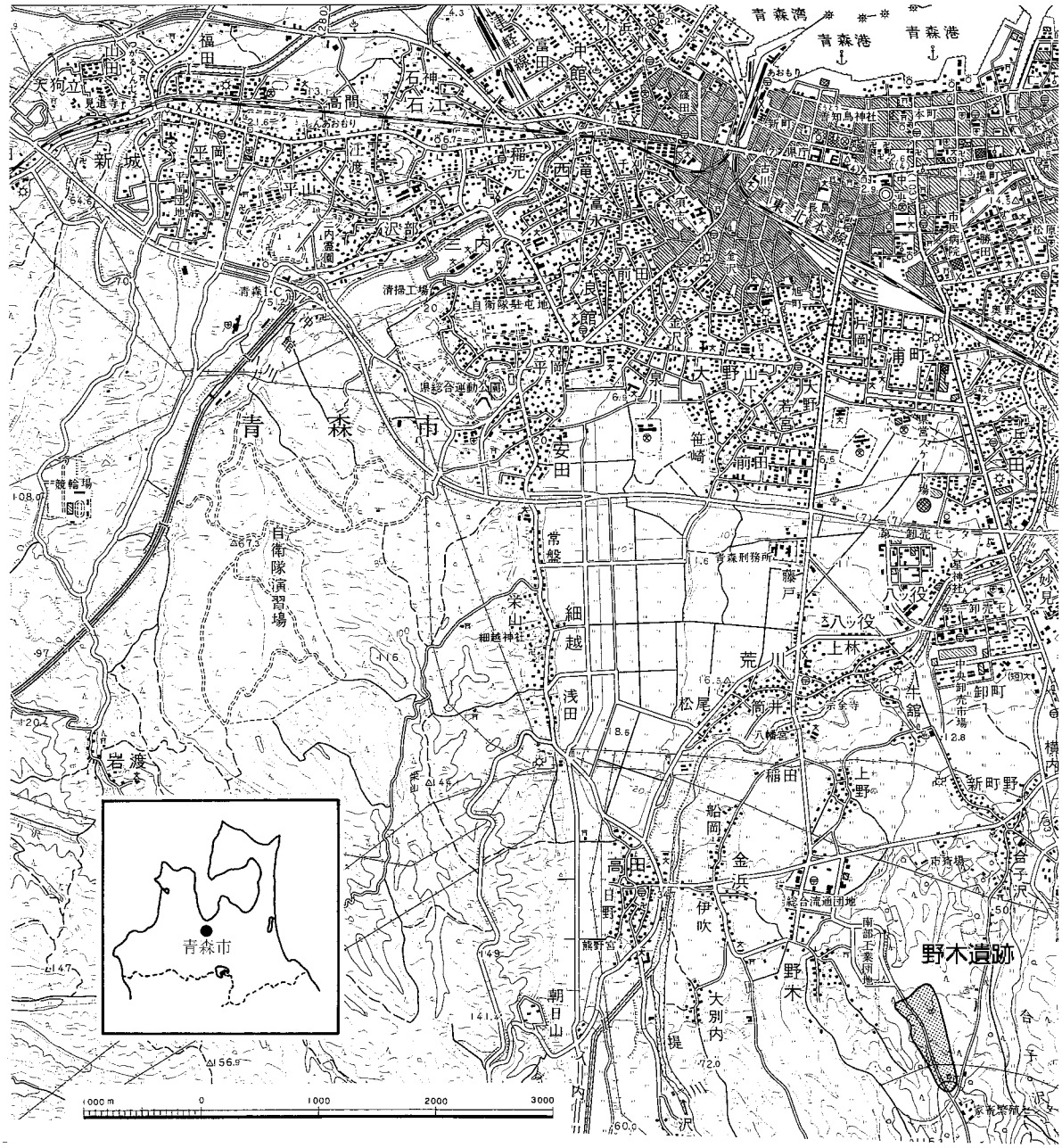


図１　遺跡位置図

図２　遺構配置図

３　竪穴住居跡について

1997年と1998年の調査（発掘調査面積約27,600㎡）により検出された平安時代の竪穴住居跡は344軒(注1)である。住居跡の平面形・規模、主軸方位、壁溝の有無、柱穴の配置、カマドの位置・煙道部の断面形、火山灰の堆積状況、付属施設について、それぞれまとめてみる。

［平面形・規模］（図３・４）

平面形は住居跡の中心部での東西及び南北の長さを計測し、それらの数値差が10%以内を方形、10%以上を長方形とした。その結果、平面形が推定できる273軒中、197軒（72%）が方形として捉えられる。他の遺構との重複や撹乱・削平のほか傾斜地により斜面下方の立ち上がりを捉えることができないものもあるが、ほぼ方形を基本とした一般的な平安時代の住居形態といえる。

規模は、東西あるいは南北の壁面の長さが最小1.8m（第323号住居跡）から最大9.8m（第702号住居跡）まで様々であるが、一辺３m前後と５～６mに集中する傾向がみられる。また、床面積(注2)を計測できた269軒の平均は19.9㎡で、１辺約4.5m前後と推定され、床面積が10㎡未満（28%）の小型住居跡が集落内の３割ほど存在すると同時に、50㎡を超える大型住居跡（４%）もみられる。

［主軸方位］（図５）

カマドの構築されている辺と直交する軸を主軸方位とした。その結果は、N-75°-E～N-90°-EとN-５°-W～N-45°-Wの方向に集中する。住居跡の大部分は平坦面を中心にして東斜面に構築されており、北東方向や西方向に軸をもつ住居跡がみられないことから、遺跡の地理的要因(注3)によって軸の方

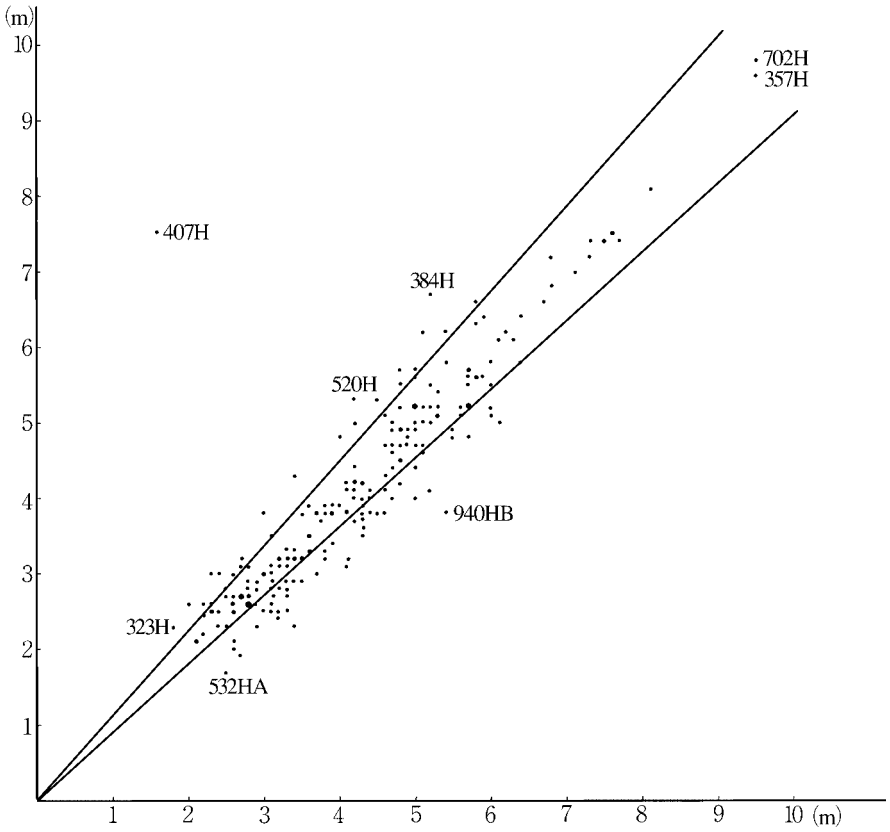


図３　住居跡の平面形

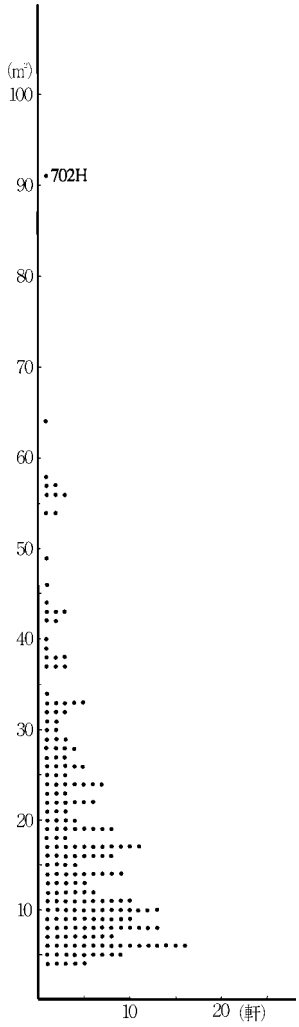


図４　住居跡の床面積

向が決定されていたことが考えられる。本遺跡の北側には、青森市教育委員会で調査した野木遺跡（青森市：2001）が隣接し、本遺跡と同様にカマドの主軸方向であるが東から南に集中する傾向がみられる。

［壁溝の有無］

壁溝が一巡あるいは部分的に確認できた住居跡は210軒で全体の64%である。斜面の上位方向に掘りこまれ、腰板を付設し、壁の崩落や土砂の流入などを防いでいたと考えられる。壁溝を持たない住居跡も何らかの防止策があったと思われるが、今回の調査等からは分からなかった。

［柱穴の配置］（図６）

住居跡内で検出されるピットの用途は柱穴、貯蔵穴などが考えられるが、その中には、用途が判断できないピットが多々みられる。残存状態が良好で柱痕を確認できるピットは極めて少ない。柱穴は壁溝とともに竪穴住居の上屋を構築するために必要な施設の痕跡であり、その配置は様々である。

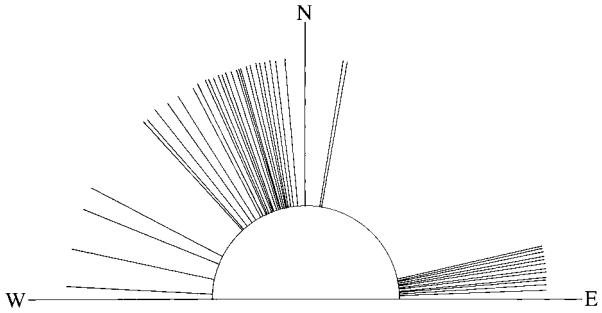


図５　主軸方位

主柱穴の検出された83軒（26%）の住居跡について、その配置の状況からＡ～Ｆ類に分類してみた。(注4)

Ａ類　主柱穴のないもの

Ｂ類　主柱穴の４本が中央部に配置されるも

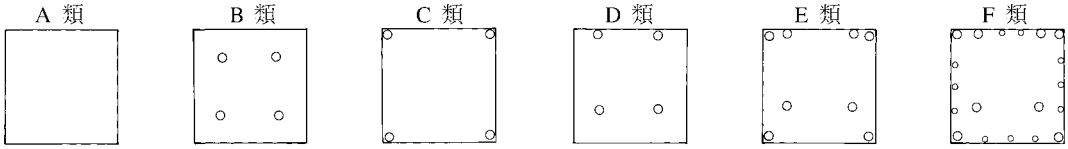


図６　住居跡の柱穴配置

の

Ｃ類　主柱穴の４本が四隅に配置されるもの（壁際に数本配置されるものも含める）

Ｄ類　４本の主柱穴のうち２本がカマド側の壁に接して配置されるもの

Ｅ類　４本の主柱穴のうち２本がカマド側の壁に接し、四隅にも柱穴が配置されるもの（Ｃ類＋Ｄ類）

Ｆ類　４本の主柱穴と四隅の柱穴のほかに各壁際にも数本、柱穴が配置されるもの

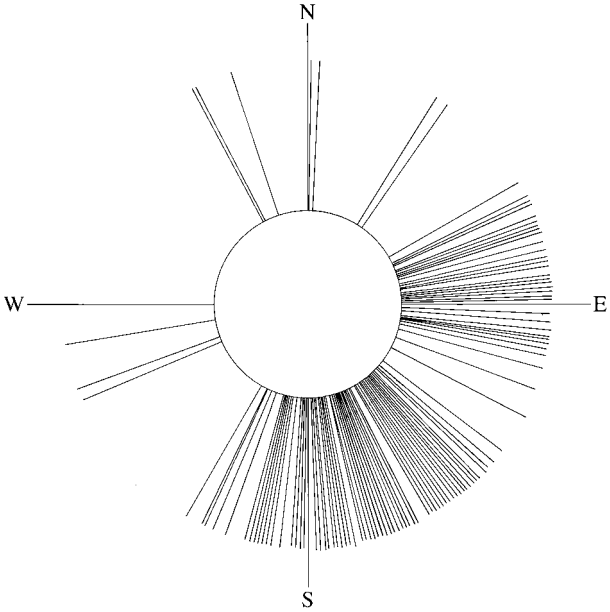


図７　カマド方位

これらの柱穴配置は重複等から時期的にみれば、Ｂ類→Ｄ類→Ｆ類の順に新しくなる。また、調査区中央部から唯一礎石をもつ竪穴住居跡（第363号住居跡）が検出された。礎石をもつ平安時代の竪穴住居跡は北海道・東北地方にはみられず、中部地方の長野県を中心にごく一部の地域に分布することから、本遺跡とそれらの地域との何らかの関連性があると思われる。

［カマドの位置・煙道部の断面形態］（図７・８）

カマドの位置については、確認できた289基のうち、南壁に構築されたものが最も多く全体の69%、次いで東壁が27%を占める。さらに、南壁に構築された185基のうち81%が西側に偏っており、これから住居跡を構築する上でカマドの位置は、主軸方位と同じように地理的要因や住居跡の構造などから、何らかの制約があったと考えられる。一般的にカマドの構築される位置を時期的にみれば、東壁から南側、中央から西寄りに移行している。

また、住居の廃絶に伴うカマドの破壊行為が、同時期の他の遺跡同様に本遺跡でもみられるため、残存するカマド煙道部の断面形態によってＡ～Ｅ類に分類してみた。(注5)

Ａ１類　煙道部が地山を刳り貫き、火床面から水平に延び、煙出部でほぼ垂直に立ち上がるもの

２類　煙道上面を粘土で覆い、火床面から水平に延び、煙出部でほぼ垂直に立ち上がるもの

Ｂ類　煙道部が地山を刳り貫き、煙出部底面にピットを持ち垂直に立ち上がるもの

Ｃ類　煙道部が長く緩やかに立ち上がるもの

Ｄ類　煙道部が短いためやや急に立ち上がるもの

住居跡やカマドの重複などから、Ｂ類→Ａ類→Ｃ類→Ｄ類の順で時期が新しくなる傾向がみられる。しかし、すべてに当てはまるわけでなく当然ではあるが一部に例外も存在している。

また、カマドの芯材や支脚には、一般的な土師器の甕や礫のほか、焼成粘土板や口径の大きい羽口(注6)を用いているのも本遺跡におけるカマド構築上の特徴といえる。

［降下火山灰の堆積状況］

遺構内の堆積土から確認された降下火山灰は、灰白色の十和田ａ火山灰と黄褐色の白頭山－苫小牧火山灰の２種類で、竪穴住居跡とそれらを囲む柵列、柱穴と考えられるピット集中区域、畠跡（畝状遺構）、便所遺構、水場遺構などから検出されている。両火山灰の降下時期は、10世紀初頭～10世紀前半(注7)と推定されている。火山灰が確認された住居跡は114軒（うち６軒は不明火山灰）で、堆積状況を考えずに十和田ａ火山灰がのみが堆積している住居跡は32軒、白頭山－苫小牧火山灰のみは63軒、両方の火山灰が13軒検出されている。少なくともこの108軒は、火山灰降下以前に廃絶された住居跡と考えられる。

［付属施設］

住居跡に付随する施設として床面にロクロピットを持つ住居跡（第319号・第324号・第347号・第478号・第486号・第702号住居跡）が検出された。調査時は３軒であったが、その後ピットの断面等を改めて見直した結果、新たに３軒のピットがロクロピットの可能性が考えられ、それらの住居跡の周辺には、方形あるいはやや長方形の焼成遺構も検出されていることからもロクロピットである可能性が高いと思われる。

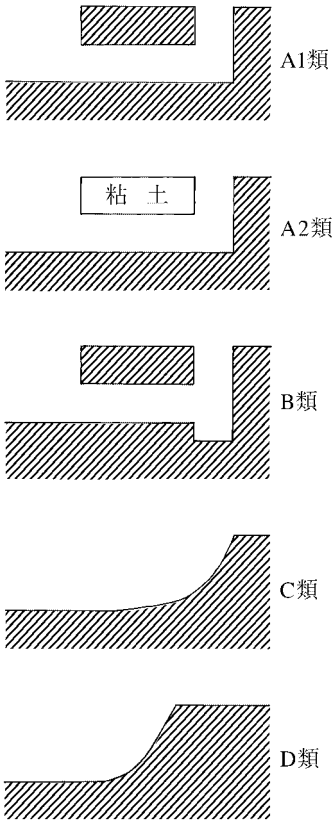


図８　カマドの断面形態

また、住居跡に伴う溝跡をもつ住居跡は11軒検出され、いずれも斜面下方に向かって溝が掘られていることから、排水施設と思われる。張出し部を持っている住居跡は７軒（第358号Ａ・第358号Ｂ・第396号Ａ・第462号・第507号Ｃ・第831号Ａ・第939号住居跡）検出されたが、その用途等については不明である。

鍛冶施設が確認できた住居跡は第422号住居跡と第708号住居跡の２軒だけであるが、ほかに第346号住居跡と第420号住居跡を含めた区域は、周辺のピットの状況から上屋を持った鍛冶遺構があったと考えられる。それらの周辺の住居跡の覆土からは、多量の椀型鉄滓や羽口などが出土しており、廃絶された住居跡の窪みを捨て場所に用いていたと思われる。

４　まとめ

野木遺跡の約300軒の住居跡が同時期に存続していたのではなく、９世紀後半～10世紀前半の幾つかの時期に分かれて存在し、遺構配置図からみても自然発生的な集落というより、ある程度の計画性をもって他の集落から移住してきたと考えられる。

今後は集落の構成、住居跡と掘立柱建物跡との主軸方向の共通性、出土した遺物なども含めて、今回触れることができなかった時期的な部分について再検討をしてみたいと思う。

また、青森市周辺には、平安時代の住居跡を多数検出した遺跡が存在し、本遺跡の近くには朝日山

遺跡、蛍沢遺跡、三内遺跡、近野遺跡などがあげられ、それらの集落との関連性を含めた比較検討も必要であると思っている。

筆者の力量不足から二年度にわたった報告書の住居跡一覧表を完成させたに終わってしまった感じがするが、あらためて他の人が調査した遺構をまとめる難しさを実感している。今後はこの反省を踏まえて、見やすい、使いやすい、分かりやすい報告書を作成することに努めたいと思っている。

最後に本稿をまとめるにあたり、成田誠治氏、福田友之氏、成田滋彦氏には種々ご教示いただき、この場を借りて感謝申し上げたい。

（注１）あくまでも報告書に記載されている軒数であって、調査担当者の解釈によって拡張や重複に違いがみられ、住居跡をＡ・Ｂに分類したものでも単純に拡張の場合もあれば、重複のものも存在している。また、カマドを持たない竪穴遺構も含まれている。

（注２）プラニメーターで３回計測した数値の平均値を表示している。

（注３）たとえば、夏のヤマセや冬の北西の季節風などを避けていたと考えられ、推測であるが夏と冬によって住居を住み替えていたのかも知れない。

（注４）柱穴が確認された83軒の住居跡以外に、主柱穴が住居の軸の中心線上に２本みられるものや中央に主柱穴の４本配置されるもので、そのうちの１本が検出されずに３本ものなどは分類に加えなかった。

（注５）地下式、半地下式も煙道底面のみ検出された場合、区別がつきにくいため、煙道部の断面形で分類を試みた。

（注６）内径が３～５㎝の羽口が多く、より多くの空気を鞴から送風していたと考えられ、鉄生産遺構と関連があると思われる。

（注７）現時点での推定降下年代は十和田ａ火山灰が915年、白頭山- 苫小牧火山灰が923～938年とする。

『引用・参考文献』

青森県教育委員会　1998『新町野遺跡・野木遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第239集
青森県教育委員会　1999『野木遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第264集
青森県教育委員会　2000『野木遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第281集
青森市教育委員会　2001『野木遺跡』青森市埋蔵文化財調査報告書第54集
青森県埋蔵文化財調査センター　1997「青森県内の平安時代の火山灰について」『センター紀要第２号』

住居番号	重複関係	規模・平面形	床面積（㎡）	主軸方位	深さ（㎝）	壁溝	pit（柱穴配置）	カマド 位置	カマド 芯材	カマド 煙道部断面	降下火山灰	備考
301		3.2×3.3　方形	9.6	N－10°－E	15	一巡	0 - A	S－7°－W　南壁西側	－	C	－	9ｃ後半
302		2.7×2.7　方形	6	N－13°－W	30	－	0 - A	S－9°－W　南壁西側	－	D	－	10ｃ後半
303		6.2×6.1　方形	36.7	N－23°－W	45	一巡	10 - D	S－23°－W　南壁西側	－	C	－	9ｃ後半　支脚－甕（砂底）
304	304＞305	6.3×6.8　方形	42.5	N－8°－W	25	一巡	31 - F	S－9°－W　南壁西側	礫	D	B-Tm (1/3)	10ｃ中葉
305	304＞305＞340	3.6×(3.6)　方形	13.1	N－7°－W	20	一巡	0 - A	S－4°－W　南壁西側	－	D		10ｃ前半　支脚－甕２個（砂底）
306		5.7×6.0　方形	32.4	N－13°－W	50	一巡	11 - D	S－14°－W　南壁西側	－	D	B-Tm (5/8)	9ｃ中葉～後半　排水溝
307		3.1×3.2　方形	8.5	N－30°－W	65	一巡	2 - A	S－30°－E　南壁西側	－	D		9ｃ中葉
308		3.8×3.8　方形	12.7	N－15°－W	50	一巡	6 - A	S－11°－E　南壁西側	－	D		9ｃ後半
309		3.2×2.7　方形	5.7	N－18°－W	40	－	3 - A	S－10°－E　南壁西側	－	C	To-a (2/5)	9ｃ中葉　排水溝
310		3.2×3.2　方形	9.2	N－10°－E	30	一巡	3 - A	S－7°－W　南壁西側	礫	D		9ｃ後半　排水溝
311		(3.1)×3.3　方形	9	N－15°－W	30	部分	2 - A	S－25°－E　南壁西側	－	不明		9ｃ後半
312		4.3×(4.5)　方形	18.1	N－17°－W	30	ほぼ一巡	2 - A	S－6°－E　南壁西側	－	B	To-a (2･3･6/9)	9ｃ前半～中葉
313A	313A＞313B	2.3×3.4　長方形	6.7	N－79°－E	40	－	8 - A	E－13°－N　東壁北側	－	不明	B-Tm (4･5/5)	10ｃ前半　支脚－甕（ヘラナデ）
313B	313A＞313B	4.7×4.6　方形	20.5	N－87°－W	30	－	1 - A	E－4°－N　東壁中央	－	B		9ｃ前半
314		不明	－	N－19°－W	30	－	5 - A	S－13°－E　南壁西側	－	不明		9ｃ後半
315		3.5×3.6　方形	11	N－68°－W	60	－	3 - A	E－20°－S　東壁南側	－	C		9ｃ前半
316	竪穴遺構	2.1×2.6　長方形	3.4	N－15°－W	50	－	0 - A	－	－	－		9ｃ後半
317		2.6×2.8　方形	6	N－15°－W	45	部分	7 - A	S－15°－E　南壁東側	－	C	To-a (1･2/6)	9ｃ中葉～後半　カマド直下にＡ１の掘り込み
318	欠番											
319		2.4×3.2　長方形	6.8	N－9°－W	40	一巡	2 - A	S－3°－E　南壁西側	－	B	To-a (1･2/8)	9ｃ中葉～後半　ロクロピット(Pit1)　焼失家屋 支脚－甕(ヘラナデ)
320		4.1×4.6　長方形	16.8	N－88°－E	50	－	3 - A	E－2°－S　東壁北側	礫	C		9ｃ前半
321		2.9×2.9　方形	7.1	N－87°－E	45	－	9 - A	E－3°－N　東壁南側	－	Ａ２		9ｃ前半　支脚－甕（砂底）
322	322＞341	4.9×4.8　方形	22.2	N－85°－E	45	一巡	14 - D	不明　東壁北側	礫	不明	B-Tm (2/8)	9ｃ前半～中葉　排水溝
323		2.3×1.8　長方形	3.5	N－84°－E	60	－	2 - A	E－8°－S　東壁中央	－	Ａ１	B-Tm (3･4/6)	9ｃ前半　支脚－坏（底部にヘラ記号「×」）
324		3.2×4.1　長方形	12.7	N－15°－W	70	部分	5 - A	S－20°－E　南壁西側	礫	C		9ｃ中葉　ロクロピット(Pit２)
325		2.3×2.5　方形	4.4	N－23°－W	35	部分	1 - A	S－27°－E　南壁東側	－	Ａ２？		9ｃ後半
326		3.8×4.3　長方形	15.5	N－26°－W	40	ほぼ一巡	8 - A	S－24°－E　南壁西側	甕	Ａ２	不明火山灰 (1･6/11)	9ｃ後半　支脚－甕（胴部）
327		6.2×6.4　方形	37.2	N－38°－W	80	ほぼ一巡	20 - E	S－38°－E　南壁西側	羽口 (10)	D	B-Tm (2･3/10)	10ｃ前半（貼床下に火床面拡張？）　支脚－甕（ナデツケ）
328		3.0×3.0　方形	7.2	N－41°－W	50	－	11 - A	S－41°－E　南壁東側	－	D	To-a (2/9)	10ｃ前半
329	329＜335	3.9×3.9　方形	13.3	N－27°－W	40	一巡	1 - A	S－20°－E　南壁西側	－	B	B-Tm (1/10)　To-a (3･4/10)	9ｃ中葉～後半　支脚－礫の上に甕（砂底）
330		3.2×3.3　方形	8.9	N－23°－W	55	－	1 - A	S－23°－E　南壁西側	羽口（４）	D	To-a (6/15)	10ｃ前半　皿類が出土　支脚－坏（内面ヘラミガキ）
331		4.8×5.7　長方形	25.4	N－19°－W	60	一巡	8 - D	S－19°－E　南壁西側	羽口（６）	D		9ｃ後半　支脚２基（砂底・ナデツケ）
332	334＞332＞418　竪穴遺構	2.7×2.7　方形	6	N－7°－W	40	一巡	0 - A	－	－	－		9ｃ前半
333A	334＞333＞418	5.7×5.7　方形	31.4	N－80°－E	60	ほぼ一巡	9 - C	E－10°－N　東壁北側	－	不明		9ｃ前半～中葉　排水溝　支脚
333B	333A＞333B	5.0×5.2　方形	25.6	N－80°－E	－	一巡	9 - C	E－10°－N　東壁南側	－	不明		9ｃ前半
334	334＞332・333＞418	4.3×4.5　方形	17.8	N－8°－W	70	一巡	7 - C	S－11°－E　南壁西側	－	Ａ１	B-Tm (5/7)	9ｃ中葉～後葉　支脚-礫？
335	335＜329	4.4×5.0　長方形	17.9	N－20°－W	65	ほぼ一巡	6 - A	S－19°－E　南壁西側	礫･羽口 (2)	Ａ２	B-Tm (1/12)　To-a (7･8/12)	9ｃ後半
336		5.9×5.9　方形	31.1	N－86°－E	65	ほぼ一巡	9 - B	E－4°－N　東壁南側	－	C		9ｃ前半～中葉　排水溝
	カマドＢ	－	－	－	－	－	－	S－1°－W　南壁西側	－	C		9ｃ前半？
337		3.0×3.7　長方形	10.5	N－62°－W	45	部分	12 - C	E－27°－S　東壁南側	－	D	B-Tm (2/6)　To-a (6/6)	9ｃ前半～中葉
338		2.6×2.9　方形	7.1	N－18°－W	40	一巡	0 - A	S－19°－E　南壁西側	羽口（２）	Ａ２		9ｃ後半　支脚－甕の上に坏が重なる
339		4.2×4.3　方形	16.3	N－19°－W	50	一巡	4 - A	S－20°－E　南壁西側	－	D		9ｃ中葉　排水溝
340	340＜305	2.7×2.7　方形	7.1	N－5°－W	15	部分	2 - A	S－4°－E　南壁中央	－	Ａ１	Pit に To-a	9ｃ中葉～後半 支脚－坏
341	322＞341＞336	3.8×4.6　長方形	15.9	N－78°－E	90	部分	15 - A	E－10°－N　東壁北側	－	D	B-Tm (4･6/9)	9ｃ中葉～後半　排水溝
342		(7.2)×7.6　方形	56.1	N－42°－W	65	－	33 - F	火床面のみ　南壁西側	－	不明	B-Tm (4/10)	10ｃ後半～中葉
343		3.3×3.6　方形	10.7	N－87°－E	20	ほぼ一巡	5 - A	E－3°－N　東壁南側	－	C		9ｃ前半
344	344＞345	3.4×3.9　長方形	11.9	N－84°－E	70	－	7 - C	S－5°－E　南壁西側	－	D		10ｃ前半
345	344＞345	4.2×4.2　方形	16.7	N－85°－E	60	一巡	7 - A	E－8°－N　東壁西側	礫	D		10ｃ初頭　排水溝
346	竪穴遺構	1.6×1.7　方形	2.2	N－1°－W	30	－	1 - A	－	－	－		9ｃ後半～10ｃ初頭　排水溝
347	347＞424	7.0×7.1　方形	47.6	N－25°－W	65	－	30 - F	S－21°－E　南壁西側	礫	C	To-a (6/8)　B-Tm (4/8)	10ｃ初頭　ロクロピット（Pit6）
	カマドＢ	－	－	－	－	－	－	不明　南壁西側	－	Ｃ？		10ｃ初頭以前
348		2.4×2.2　方形	4.5	N－78°－W	55	部分	4 - A	E－12°－S　東壁南側	－	D	To-a (1･3/8)	9ｃ前半～中葉
349		4.6×5.1　方形	23.7	N－22°－W	55	－	10 - A	不明　南壁西側	－	D	To-a (4/10)	9ｃ中葉～後半　内側に壁溝（拡張前の住居跡？）
350		2.8×2.5　方形	5.3	N－13°－W	55	－	3 - A	S－14°－E　南壁西側	－	B	To-a (1/5)	9ｃ中葉～後半
351	竪穴遺構	2.7×2.6　方形	6	N－14°－W	25	－	1 - A	－	－	－		不明

住居跡観察表１

住居番号	重複関係	規模・平面形	床面積(㎡)	主軸方位	深さ(㎝)	壁溝	pit(柱穴配置)	カマド 位置	カマド 芯材	カマド 煙道部断面	降下火山灰	備考
352		2.7×2.8　方形	5.2	N－0°－S	45	－	3 - A	不明　南壁中央	－	不明		不明
353		6.6×6.7　方形	40.4	N－79°－E	65	ほぼ一巡	11 - D	不明　東壁南側	－	不明		９c後半～10c前半　拡張あり(柱穴配置- C)
354		4.3×4.6　方形	18.7	N－78°－E	60	一巡	0 - A	E－15°－N　東壁南側	礫	A 1		９c中葉
355		不明	－	N－8°－W	15	部分	5 - C	不明　南壁西側	礫？	不明		不明
356	357＜356	2.7×3.1　方形	7.4	N－83°－E	60	部分	0 - A	E－7°－N　東壁西側	礫	D		10c前半以後
357	357＜356・358	9.6×9.5　方形	90	N－23°－W	45	部分	11 - A	－	－	－	B-Tm (3・4/13) B-Tm 層あり (5層上面)	９c後半～10c前半　B- Tmの堆積は人為的
358A	358A＞358B＞357	7.4×7.5　方形	56.5	N－80°－E	60	一巡	40 - F	E－15°－N　東壁北側	礫	A 2		10c前半　張出部(北壁1.5×2.1)
358B	358A＞358B＞357	不明	－	N－20°－W	80	ほぼ一巡	40 - F	S－15°－W　南壁西側		B		10c前半　張出部(南壁1.4×2.3)
358C	358B＞358C	3.6×4.3　長方形	－	N－20°－W	－	一巡	不明	－		－		不明
359		3.0×2.3　長方形	6.6	N－8°－W	55	－	1 - A	S－9°－E　南壁中央	－	D		９c後半～10c前半
360	360＞363	2.5×3.3　長方形	7.4	N－83°－E	55	－	4 - A	E－13°－N　東壁北側	－	A 1	B-Tm (1・2/9)	９c後半～10c前半
361		2.9×3.5　長方形	9.1	N－82°－E	60	部分	1 - A	E－6°－N　東壁南側	礫	D	不明火山灰 (4/5)	９c後半～10c前半
362A	362A＞362B　竪穴遺構	2.3×2.9　長方形	8.2	N－12°－W	30	－	2 - A	－	－	－		９c後半～10c前半　(貼床部分)
362B	竪穴遺構	不明	－	N－7°－W	20	－	0 - A	－	－	－		９c後半～10c前半
363	363＞823	8.1×8.1　方形	63.3	N－65°－E	45	一巡	38 - B？	E－24°－N　東壁南側	－	D		９c後半～10c初頭　礎石３　支脚－甕(笹葉痕)　Pit24に須恵器埋設
364	竪穴遺構	2.6×2.3　方形	5.2	N－9°－E	80	－	4 - A	－	－	－		９c後半
364	竪穴遺構	2.6×2.0　長方形	4.4	N－21°－W	40	－	0 - A	－	－	－		不明
364	欠番											
364	367＞455・456・459	7.5×7.6　方形	55.4	N－80°－E	75	一巡	37 - E	E－3°－N　東壁西側	礫	C		９c後半～10c前半　支脚－甕(砂底)
368A	368＞456	5.5×5.7　方形	31.1	N－79°－E	60	一巡	8 - D	不明　東壁北側	礫	不明		９c後半～10c前半
368B	455＞368B＞457 368A＞368B＞368C	(4.0)×5.8　長方形	24	N－85°－E	50	－	6 - A	E－0°－E　東壁西側	礫	C		９c後半～10c前半
	カマドC	－	－	－	－	－	－	不明　東壁西側	－	不明		９c後半～10c前半
369	369＞473・495	5.2×5.6　方形	26.5	N－32°－W	80	部分	6 - A	S－26°－E　南壁西側	礫？	C	To-a (1/12) B- Tm (5/12)	９c後半～10c前半　カマド左側に埋設土器(甕：砂底)
370	302畝＞471＞370	6.2×(6.5)　方形	38.5	N－22°－W	60	ほぼ一巡	6 - A	S－22°－E　南壁西側	礫	C	B-Tm (1/6)	９c後半～10c前半　床面に段差
371		3.8×3.6　方形	10.3	N－81°－E	60	－	3 - A	E－2°－S　東壁南側	－	A 2	B-Tm (4・5・8/10)	10c前半から中葉　支脚－甕(ヘラナデ)
372	372＞373・376	5.6×5.7　方形	31.3	N－78°－E	55	ほぼ一巡	不明	E－20°－N　東壁北側	礫	C		10c前半から中葉
373	372＞373＞374	4.4×5.0　長方形	20.5	N－11°－W	55	ほぼ一巡	2 - A	S－11°－E　南壁東側	礫・羽口 (3)	D	B-Tm (1・2/10)	９c中葉～後半　支脚- 壷(糸切り)甕(ナデツケ)
374	373＞374＞375	不明	－	N－81°－E	40	－	0 - A	W－9°－S　西壁北側	礫？	D		10c前半～中葉
375	374＞375	2.7×3.3　長方形	7.6	N－14°－W	45	－	1 - A	S－20°－E　南壁西側	－	A 1	B-Tm (10/10)　ほぼ床面上	９c中葉～後半　焼失家屋
376	372＞376	4.0×4.3　方形	15	N－16°－W	50	ほぼ一巡	9 - A	S－16°－E　南壁西側	礫・羽口	C		９c前半～後半
377	377＜701	6.6×5.8　長方形	35.6	N－16°－W	50	ほぼ一巡	22 - C	S－12°－E　南壁西側	－	D		10c前半
378	396＞378＞399	不明	－	N－23°－W	40	ほぼ一巡	7 - A	不明	－	－		不明
379	400＞379	不明	－	－	30	－	0 - A	不明	－	－		不明
380A	380A＞380B	3.8×4.1　方形	14	N－32°－W	35	部分	6 - A	S－32°－E　南壁西側	焼成粘土板	C		10c前半～後半
380B	380A＞380B	3.1×3.1　方形	9.5	N－32°－W	－	一巡	2 - A	S－41°－E　南壁西側	－	C		10c前半～中葉
381		3.8×4.1　方形	12.9	N－77°－E	65	－	6 - A	E－13°－N　東壁南側	－	D		10c前半～中葉
382A	348H＞382H	5.1×6.0　長方形	27.7	N－11°－E	60	ほぼ一巡	5 - A	S－13°－W　南壁西側	礫・甕	C	B-Tm (3/11)	９c後半～10c前半
382B	382A＞382B	(4.1)×4.6　長方形	19.3	N－11°－E	－	ほぼ一巡	8 - A	S－12°－W　南壁西側	－	A 1		９c中葉～後半
383		4.7×5.1　方形	23.2	N－24°－W	60	一巡	11 - C	S－25°－E　南壁西側	－	C		10c前半～中葉
384	384＞382・392	6.7×5.2　長方形	32.2	N－35°－W	65	一巡	20 - A	S－35°－E　南壁西側	－	C		10c前半～中葉　２軒の可能性
385		5.1×4.6　方形	21.7	N－3°－W	40	一巡	4 - D	S－5°－E　南壁西側	－	C		10c前半～中葉
386		7.5×7.6　方形	54.5	N－17°－W	60	部分	34 - D	S－15°－E　南壁中央	礫・羽口 (4)	C	B-Tm (1・2/11)	９c前半～後半
	カマドB	－	－	－	－	－	－	S－17°－E　南壁西側	－	C		９c前半～後半
387	欠番											
388		4.0×4.4　方形	16.3	N－33°－W	45	ほぼ一巡	10 - A	S－33°－E　南壁西側	礫・甕	C	To-a (ほぼ全層 /15)	９c後半～10c前半
389		3.5×3.6　方形	10.5	N－20°－W	55	－	3 - A	S－13°－E　南壁西側	－	D		９c後半～10c前半
390		5.1×5.3　方形	25.3	N－79°－E	50	一巡	11 - A	E－13°－N　東壁南側	礫	C		９c後半～10c前半
391		3.2×3.5　方形	10	N－10°－W	50	－	7 - A	S－14°－E　南壁西側	－	C	B-Tm (1/9)	９c後半～10c前半
	カマドB	－	－	－	－	－	－	E－20°－N　東壁南側	－	A		９c後半～10c前半
392	384＞392	3.9×3.8　方形	14.1	N－38°－W	45	－	6 - A	S－45°－E　南壁西側	－	C		10c前半
393		2.6×2.8　方形	6.1	N－40°－W	50	－	6 - A	N－27°－W　北壁東側	礫	D		10c前半
394		不明	－	N－37°－W	65	部分	3 - A	不明	－	－		９c後半～10c前半
395A	395A＞395B	不明	－	N－23°－W	55	－	0 - A	不明	－	－		10c前半～中葉
395B	395A＞395B	不明	－	N－13°－W	75	ほぼ一巡	5 - D？	不明	－	－		９c後半～10c前半

住居跡観察表２

住居番号	重複関係	規模・平面形	床面積(㎡)	主軸方位	深さ(㎝)	壁溝	pit(柱穴配置)	カマド 位置	カマド 芯材	カマド 煙道部断面	降下火山灰	備考
396A	396>378	6.0×6.2　方形	36.9	N－71°－E	45	部分	11 - A	E－18°－N　東壁南側	－	D		10c前半　張出部(南壁東壁1.6×1.3) 支脚-甕(ナデツケ)
396B	396A>396B	5.1×5.6　方形	29.5	N－71°－E	－	部分	9 - A	E－17°－N　東壁北側	－	C		9c後半～10c前半
397	欠番(424土坑)											
398A	398>475	7.2×6.8　方形	42.5	N－23°－W	40	ほぼ一巡	20 - A	S－13°－E　南壁西側	－	C		10c前半
398B	398A>398B	6.4×6.4　方形	38.2	N－23°－W	－	ほぼ一巡	13 - A	不明　南壁東側	－	不明		9c後半～10c前半
399	378・396>399>400	不明	－	N－11°－W	30	－	0 - A	不明	－	－		不明
400	399>400>379	不明	－	N－11°－W	55	ほぼ一巡？	0 - A	不明	－	－		不明
401	326>401	2.5×2.6　方形	5.9	N－28°－W	15	－	0 - A	S－25°－E　南壁西側	－	C		9c中葉　支脚(鉢と甕)　砂底(ナデ)
402	欠番											
403		3.9×(4.1)　方形	14.9	N－18°－W	35	一巡	2 - A	S－17°－E　南壁西側	礫	B		9c中葉～後半　支脚(坏)
404	407>404　405とは不明	不明	－	N－28°－W	40	－	0 - A	S－30°－E　南壁東側	－	A？		9c中葉～後半
405	407>405　404とは不明	不明	－	N－18°－W	45	－	0 - A	不明	－	－		9c中葉～後半
406		5.2×5.0　方形	23.7	N－35°－W	55	一巡	4 - D	S－35°－E　南壁西側	羽口(3)	D	To-a(3・4/6)　B-Tm(1・2/6)	10c前半　支脚－羽口
407	407>404・405 竪穴遺構	7.5×1.6　長方形	11.7	N－0°－S	30	－	20 - C？	－	－	－		不明　南側に出入口？
408		2.1×2.1　方形	3.5	N－30°－E	30	－	2 - A	S－30°－W　南壁西側	－	不明	To-a(3/5)	9c前半～中葉
409		不明	－	N－20°－W	75	ほぼ一巡？	13 - A	S－20°－W　南壁西側	羽口・礫各2	B		9c中葉～後半　支脚－坏
410		6.2×(6.7)　方形	40.5	N－18°－W		ほぼ一巡？	9 - D	S－18°－E　南壁西側	羽口・礫各2	C	B-Tm(2/7)	9c後半　支脚2基－甕(笹葉痕)・礫
411		3.0×3.2　方形	8.5	N－4°－W	80	－	0 - A	S－4°－E　南壁西側	羽口(3)	C	B-Tm(1/10)	9c後半
412	欠番											
413	413>416	3.8×3.7　方形	13.5	N－17°－W	60	一巡	2 - A	S－17°－E　南壁西側	－	D	B-Tm(4～7/12)	9c後半　支脚－羽口
414	欠番											
415		不明	－	－	25	部分	11 - A	不明	－	－		10c前半
416	413>416	不明	－	－	65	ほぼ一巡？	10 - D	不明	－	－		9c中葉～後半　2軒(拡張？)
417		3.8×4.5　長方形	16.7	N－15°－W	55	ほぼ一巡	3 - A	S－20°－E　南壁西側	羽口(1)	C	B-Tm(1/5)	9c後半
418	334H>332H・333H>418H	不明	－	－	30	－	－	不明	－	－	－	9c前半
419		3.7×4.3　長方形	15.3	N－21°－W	90	一巡	3 - A	S－21°－E　南壁西側	羽口(3)	D	B-Tm(2・3/9)	9c後半　支脚－羽口
420A	420A>420B	2.0×2.1　方形	3.4	N－25°－W	60	－	0 - A	w－30°－N　北西隅		A 1	To-a(2・4/5)	9c後半～10c前半
420B		不明	－	N－24°－W	35	－	1 - A	不明				9c後半～10c前半
421		2.5×3.0　長方形	5.7	N－23°－W	45	－	4 - A	S－23°－E　南壁西側	－	D	To-a(1/4)	9c中葉～後半
422	422<423	不明	－	N－22°－W	15	部分	0 - A	不明	－	－	To-a(1/2)	9c後半　鍛冶遺構
423A	422<423	4.8×4.9　方形	23.2	N－17°－W	50	ほぼ一巡	7 - D	S－10°－E　南壁西側	羽口？	C	B-Tm(1・3/10)	10c初頭
423B	423A>423B>423C	4.8×4.9　方形	23.2	N－17°－W	50	－	25 - D	S－10°－E　南壁西側	－	A 2		9c後半～10c初頭
	カマドC	－	－	－	－	－	－	S－12°－E　南壁東側	－	B		9c後半
424	347>424	4.4×4.2　方形	18.3	N－24°－W	－	－	0 - A	S－23°－W　南壁西側	－	B		9c後半
451	451>452	4.2×4.3　方形	16.9	N－18°－W	40	部分	9 - A	S－20°－E　南壁西側	－	C		10c前半
452	451>452>482	4.4×4.7　方形	19.8	N－82°－E	65	ほぼ一巡？	8 - A	E－9°－N　東壁北側	－	不明		9c後半～10c前半　支脚－礫
453	453>454	2.7×2.5　方形	6	N－22°－W	50	ほぼ一巡	9 - C	S－22°－E　南壁西側	－	D		9c後半
454	453>454　竪穴遺構	3.0×2.4　長方形	6.5	N－10°－W	50	－	1 - A	－	－	－		9c後半以前
455A	455B>455A<367	4.6×4.7　方形	21.2	N－17°－W	40	ほぼ一巡	6 - D	S－10°－E　南壁中央	－	A 1		9c後半～10c前半
455B	カマドB	－	－	－	－	－	－	S－13°－E　南壁西側	－	C		〃
456	456<367・368・459	不明	－	－	45	－	－	不明	－	－		10c前半
457	368>457	不明	－	－	35	－	－	不明	－	－		10c前半
458	欠番											
459	459<367	不明	－	－	40	－	－	不明　南壁	礫	D？		9c後半～10c前半
460	460>461	4.8×5.5　長方形	23.3	N－74°－E	50	ほぼ一巡	6 - A	E－0°－W　東壁南側	－	C		9c後半～10c前半　支脚－甕(砂底)
461	460>461	(5.1)×(5.1)　方形	22.9	N－21°－W	55	ほぼ一巡？	3 - D？	S－22°－E　南壁西側	－	C	To-a(1/4)	9c後半～10c前半
462	462>463	4.7×4.9　方形	24.5	N－73°－E	35	ほぼ一巡	5 - A	E－17°－N　東壁北側	礫	D？		9c後半～10c前半　張出部(北壁1.6×1.6)
463	462>463	不明	－	－	－	－	－	－	－	－		9c後半～10c前半以前
464～470	欠番											
471A	2畝>471>370	7.2×7.3　方形	48.8	N－69°－E	70	部分	0 - A	E－21°－N　東壁北側	礫？	D		9c後半～10c前半
471B	471A>471B	6.7×5.6　長方形	39.1	N－70°－E	－	部分	9 - A	N－15°－N　東壁南側	－	C		9c後半
472	欠番											
473	369>473>495	5.4×5.3　方形	27.4	N－17°－W	100	部分	9 - A	S－17°－E　南壁西側	羽口(2)・礫	D	To-a(7/8)	9c後半　支脚2基-甕(砂底1、笹葉痕1)
474	欠番											
475	398>475	不明	－	－	50	部分	3 - A	不明	－	－		不明

住居跡観察表３

住居番号	重複関係	規模・平面形	床面積(㎡)	主軸方位	深さ(㎝)	壁溝	pit(柱穴配置)	カマド 位置	カマド 芯材	カマド 煙道部断面	降下火山灰	備考
476	477>476>478	6.2×6.2 方形	37.5	N－83°－W	55	ほぼ一巡	8-D？	E－10°－S 東壁北側	－	C	B-Tm (1・3・4・6・8・9/10)	９ｃ後半～10ｃ前半
477	477>476	不明	－	N－32°－W	60	ほぼ一巡？	4-A	S－32°－E 南壁西側	礫	A１		10ｃ前半～中葉　煙道部に羽口
478	476>478	3.7×3.9 方形	13	N－73°－W	30	ほぼ一巡	2-A	E－15°－S 東壁南側	－	D	To-a (１～５・７/８)	９ｃ中葉～後半　ロクロピット (Pit2)
479	479<485	(3.1)×3.3 方形	8.4	N－52°－E	60	－	0-A	E－30°－N 東壁南側	－	C		９ｃ後半～10ｃ前半
480	480>490	3.8×4.0 方形	13.8	N－90°－E	70	－	3-A	E－10°－N 東壁北側	礫	C		９ｃ後半～10ｃ前半　排水溝
481	487<481<493	不明	－	－	20	－	4-A	不明	－	－		10ｃ初頭
482	482<452・492・494	(3.1)×3.0 方形	8.2	N－36°－W	20	部分	4-A	S－38°－E 南壁西側	－	A２		９ｃ中葉～後半　支脚－甕(笹葉痕)
483		不明	－	－	35	－	3-A	不明	－	－	B-Tm (1/4) To-a (2/4)	９ｃ中葉～後半
484A	484>486	5.7×5.9 方形	31.5	N－49°－W	50	ほぼ一巡	7-A	E－42°－S 東壁南側	羽口・焼板	A１		９ｃ後半～10ｃ前半　煙道部に羽口
	カマドB	－	－	－	－	－	－	E－43°－S 東壁北側	－	A１		９ｃ後半～10ｃ前半
485	485>479	3.8×3.5 方形	11.1	N－65°－W	70	部分	6-C	E－25°－N 東壁北側	－	D		10ｃ前半　支脚－坏(回転糸切り)
486	484>486	4.9×5.5 方形	27	N－45°－W	60	一巡	9-D	E－42°－S 東壁南側	－	C	To-a (1・3・7・9/14)	９ｃ中葉～後半　ロクロピット (Pit7)
487A	487<481	5.6×5.8 方形	30.5	N－40°－W	80	部分	3-A	S－45°－E 南壁西側	－	D		10ｃ前半　カマド脇に出入口
	カマドB	－	－	－	－	－	－	S－36°－E 南壁西側	－	C		10ｃ初頭～前半
	カマドC	－	－	－	－	－	－	S－36°－E 南壁西側	－	B		10ｃ初頭
488		2.6×2.8 方形	6.8	N－18°－W	40	一巡	1-A	S－18°－E 南壁西側	－	A１		９ｃ中葉～後半
489		3.2×3.5 方形	10.2	N－2°－W	40	－	3-A	不明	－	－		10ｃ前半
490	490<480	(4.2)×4.3 方形	16.1	N－1°－E	60	ほぼ一巡	2-A	S－0°－N 南壁西側	－	D		９ｃ後半
491		6.7×(6.7) 方形	45.1	N－8°－W	80	部分	7-A	S－8°－E 南壁西側	礫	D？		10ｃ前半
492	482<492	3.7×4.0 方形	12.1	N－29°－W	40	部分	1-A	S－24°－E 南壁西側	－	A？		９ｃ後半～10ｃ前半
493	竪穴遺構	3.0×2.3 長方形	5	N－40°－W	55	－	3-A	－	－	－		不明
494	482<494	3.1×(3.2) 方形	8.5	N－0°－S	20	－	1-A	不明	－	－		不明
495	495<369・473	3.2×3.4 方形	10.2	N－31°－W	20	部分	3-A	S－30°－E 南壁西側	－	不明		９ｃ前半～中葉
496		2.9×3.4 長方形	8.6	N－3°－E	40	－	1-A	N－3°－E 北壁西側	礫	C		不明
497		2.5×2.3 方形	4.5	N－70°－W	50	－	1-A	E－20°－N 東壁北側	－	A１		不明
498・499	欠番											
500		不明	－	－	45	－	－	不明	－	－	－	10ｃ前後
501		3.2×3.8 長方形	11.7	N－31°－W	30	一巡	2-A	S－25°－E 南壁西側	羽口	A１	B-Tm (1/8)	10ｃ初頭
502	512<502	不明	－	N－19°－W	50	ほぼ一巡？	18-A	S－30°－E 南壁西側	－	D		10ｃ前半
503		3.0×2.6 長方形	6.8	N－84°－E	30	－	2-A	E－11°－N 東壁北側	礫	B	B-Tm (1～3/3)	10ｃ初頭
504A	504<505	5.0×6.1 長方形	29.2	N－7°－W	20	一巡	5-B	S－2°－E 南壁中央	羽口？	C	To-a (1・5/6)	10ｃ初頭　支脚２基－坏
504B	504A>504B	4.2×4.8 長方形	18.5	N－7°－W	30	－	7-A	S－7°－E 南壁西側	－	C		９ｃ後半　支脚－坏
505A	504<505	5.6×5.8 方形	31.1	N－10°－W	45	一巡	7-D	S－12°－E 南壁西側	礫	A１	B-Tm (1・2/6)	10ｃ初頭
505B	505A>505B	4.1×4.1 方形	15.9	N－10°－W	－	一巡	1-A	不明	－	－		内周溝のみ検出
506	515<506	4.6×5.1 方形	22.8	N－12°－W	35	一巡	9-A	S－0°－N 南壁東側	－	C	B-Tm (1/10)	10ｃ初頭
	カマドB	－	－	－	－	－	2－	S－11°－E 南壁西側	－	A１		－
507A	507>527	7.0×7.9 長方形	53	N－89°－W	55	一巡	15-D	E－5°－N 東壁南側	－	D	B-Tm (7/8)	10ｃ初頭　支脚－坏
507B	507A>507B>507C	6.1×6.3 方形	37.7	N－89°－W	－	一巡	17-A	不明	－	－		10ｃ初頭
507C	507A>507B>507C	4.9×5.0 方形	24.5	N－89°－W	－	一巡	15-B	E－5°－N 東壁南側	－	C		９ｃ後半　張出部(南壁0.7×2.4)
508		4.1×4.2 方形	15.7	N－34°－W	55	一巡	9-A	S－34°－E 南壁西側	礫	C	B-Tm (2/8)	10ｃ初頭
509	509>510・511・526	5.1×5.6 方形	28	N－88°－E	65	一巡	3-A	E－6°－S 東壁北側	－	A１	B-Tm (4/5)	10ｃ初頭　多量の炭化種子・中央部に段差
510	509>510	2.5×2.6 方形	5.9	N－7°－W	20	ほぼ一巡	2-A	不明	－	－		９ｃ後半
511	509>511	不明	－	N－15°－W	35	－	1-A	不明	－	－		９ｃ後半
512	502>512	5.8×6.4 方形	－	N－88°－E	35	－	1-A	E－4°－N 東壁北側	－	C？		10ｃ初頭
513		不明	－	N－13°－W	55	部分	2-A	不明	－	－		９ｃ後半　一部段差
514	欠番											
515	506>515	不明	－	N－16°－E	35	部分	2-A	N－18°－W 北壁西側	－	A１		９ｃ後半
516	502>516	1.9×2.7 長方形	4.4	N－24°－W	30	部分	2－	S－30°－E 南壁東側	－	B？		10ｃ初頭　支脚－坏
517A	517A>517B>517C	5.5×6.0 方形	30.7	N－18°－W	50	部分	9-E	S－25°－E 南壁西側	羽口(2)	C	To-a (4・5/8)　B-Tm (2/8)	９ｃ後半
517B	517A>517B>517C	不明	－	－	－	部分	12-D	S－25°－E 南壁西側	－	A１		９ｃ後半～10ｃ初頭
517C	517A>517B>517C	不明	－	－	－	部分	12-D	S－16°－E 南壁西側	－	A？		10ｃ初頭
518	518<520	不明	－	N－22°－W	45	－	1-A	不明	－	－		９ｃ後半
519A	501畝>519	5.2×5.7 方形	28.8	N－24°－W	45	ほぼ一巡	18-D	S－19°－E 南壁西側	－	A２		10ｃ初頭　支脚－坏
519B	519A>519B	不明	－	－	－	ほぼ一巡	11-A	不明	－	－		９ｃ後半～10ｃ初頭　内周溝のみ
520	520>518・535	5.3×4.2 長方形	21.4	N－2°－W	65	ほぼ一巡	21-C	S－3°－E 南壁西側	－	C	B-Tm (2・4/11)	10ｃ初頭

住居跡観察表４

住居番号	重複関係	規模・平面形	床面積（㎡）	主軸方位	深さ（㎝）	壁溝	pit（柱穴配置）	カマド 位置	カマド 芯材	カマド 煙道部断面	降下火山灰	備考
521		2.2×2.2　方形	4.1	N－24°－W	30	－	2-A	S－16°－E　南壁中央		B	To-a (1/2)	9c後半　カマドのソデは、地山を掘り込む
522		2.6×3.1　長方形	7.7	N－68°－W	45	ほぼ一巡	10-A	E－37°－S　東壁南側	－	B	To-a (1～3/10)　B-Tm (5・9/10)	10c初頭
523		2.5×3.1　長方形	6.8	N－74°－E	35	一巡	0-A	W－23°－S　西壁北側	－	D		9c後半
524		2.5×3.2　長方形	7.6	N－9°－W	30	－	6-A	S－19°－E　南壁東側	－	D		10c初頭　支脚－礫
525	欠番											
526	509＞526	不明	－	N－12°－W	20	部分	0-A	S－19°－E　南壁西側	－	C		9c後半
527	507＞527	不明	－	N－27°－W	15	－	0-A	S－21°－E　南壁西側	羽口 (2)	A		9c後半
528	欠番											
529		2.1×2.1　方形	3.1	N－33°－E	40	－	0-A	N－32°－E　北壁中央	－	A1	To-a (6・7/8)	9c後半　支脚－坏
530	530＞532B	3.8×4.3　長方形	15.5	N－11°－W	80	部分	7-A	S－19°－E　南壁西側	－	D	B-Tm (2・4～9/11)	10c初頭
531		3.1×4.1　長方形	11.8	N－27°－W	60	ほぼ一巡	3-A	S－27°－E　南壁西側	－	B	B-Tm (1/7)	10c初頭
532A	532B＜532A　竪穴遺構？	1.7×2.5　長方形	3.6	N－14°－E	45	－	3-A	－	－	－		10c初頭
532B	530＞532B＜532A	不明	－	N－8°－W	30	－	1-A	不明	－	－		9c後半
533	533＞534	7.4×7.3　方形	53.5	N－85°－E	50	一巡	26-E	不明　東壁南側	－	不明		10c初頭
534	533＞534	3.8×3.7　方形	13	N－24°－W	50	ほぼ一巡	2-A	S－21°－E　南壁西側	羽口 (3)	A1	To-a (6/10)	9c後半　支脚－礫の上に坏
535	520＞535	不明	－	N－31°－W	35	－	0-A	不明	－	－		9c後半
536		2.8×3.1　長方形	8.1	N－23°－W	30	－	3-A	不明	－	－	To-a (1・6/6)	9c後半
537～600	欠番											
601		6.6×6.7　方形	42.7	N－4°－W	50	ほぼ一巡	9-D	S－9°－E　南壁西側	礫	C		9c後半
	カマドB	－	－	－	－	－	－	S－0°－S　南壁東側	－	不明		9c後半
602		(3.5)×3.6　方形	10.7	N－8°－W	40	－	8-C	E－11°－S　東壁南側	－	C		10c前半
603		3.7×3.6　方形	10.9	N－1°－W	60	－	10-A	S－6°－E　南壁東側	－	A1		9c中葉～後半
604		4.7×4.7　方形	21.1	N－77°－E	45	ほぼ一巡	8-A	E－14°－N　東壁北側	－	A1		10c前半
605		4.7×4.9　方形	22.5	N－72°－E	75	ほぼ一巡	8-A	E－32°－N　東壁南側	礫	C		10c前半
606	606＞607	4.6×4.8　方形	21.6	N－78°－E	55	ほぼ一巡	6－A	E－9°－N　東壁北側	－	A1	B-Tm (9／12)	9c後半
607	606＞607	6.5×6.5　方形	40.8	N－7°－W	20	一巡	8－A	S－6°－N　南壁東側	－	C		9c後半
608	608＞613	4.5×4.4　方形	16.6	N－5°－W	90	ほぼ一巡	11－A	S－2°－E　南壁西側	－	C		9c後半
609	609＞610・612	5.6×5.9　方形	30	N－10°－W	60	一巡	3－A	E－6°－N　東壁北側	－	D	B-Tm (6／24)　To-a (17／24)	10c前半　支脚－甕
	カマドB	－	－	－	－	－	－	E－12°－N　東壁南側	－	C		10c前半
610	609＞610	3.1×3.5　長方形	9.2	N－13°－W	40	部分	2－C	S－12°－E　南壁西側	礫	A1		9c中葉～後半　支脚－椀形鉄滓
611		4.8×5.2　方形	23.5	N－17°－W	70	部分	9-A	S－29°－E　南壁西側	－	D		9c後半
612	609＞612	不明	－	－	35	－	2-A	不明	－	－		9c後半
613	608＞613	不明	－	N－3°－E	－	－	2-A	S－4°－E　南壁東側	－	C		9c中葉～後半
	カマドB	－	－	－	－	－	－	S－5°－E　南壁東側	－	A		9c中葉～後半
614		2.6×2.8　方形	6	N－17°－W	50	－	0－A	S-19°－E　南壁東側	－	A1	B-Tm (1／5)	10c初頭　支脚－礫
615		(3.6)×3.7　方形	13.5	N－19°－W	40	部分	14－C	S－16°－E　南壁東側		C		9c後半
616		不明	－	N－45°－W	40	部分	2-A	不明	－	－		10c初頭
617		2.3×2.4　方形	4.3	N－54°－W	10	－	0-A	S－47°－E　南壁西側	－	A		10c初頭　支脚－椀形鉄滓
618		4.9×4.9　方形	23.2	N－86°－E	55	－	5-A	E－7°－N　東壁北側	－	C？		10c前半　木の皮状の炭化物（敷物？）
619～623	欠番											
624		5.8×6.0　方形	33.2	N－14°－W	50	－	35-F	S－15°－W　南壁西側	－	D	B-Tm (4上／12)	10c初頭
625	欠番											
626		2.9×3.3　長方形	8.5	N－0°－S	55	－	5-C	N－1°－E　北壁西側	－	D	B-Tm（確認面）	10c前半　支脚－甕（笹葉痕）
627～700	欠番											
701	701＞377	5.5×5.2　方形	28.6	N－20°－W	40	一巡	22-C	S－16°－E　南壁西側	礫・羽口？	C		10c中葉　支脚－礫？　カマド東側に段差
702	703＞702＞704	9.8×9.5　方形	90.3	N－10°－W	45	ほぼ一巡	7-D	不明　南壁？	－	－		10c前半　ロクロピット (Pit2)
703	703＞702＞704	5.5×4.8　長方形	25.9	N－2°－W	55	－	6-A	S－4°－E　南壁西側	－	D		10c中葉
704A	703＞702＞704	(9.6)×8.8　長方形	83.2	N－3°－W	50	－	10-D	E－0°-E　東壁北壁	礫	D		10c初頭
704B	704A＞704B	(6.5)×(6.7)　方形	43.3	N－3°－E	－	ほぼ一巡	9-D	不明	－	－		9c後半
705		(4.9)×5.2　方形	24.1	N－32°－W	75	部分	9-D	S－39°－E　南壁西側	－	D	B-Tm (1.3／8)　To-a (3.4／8)	10c初頭
706		不明	－	N－13°－W	30	－	2-A	S－11°－W　南壁西側？	羽口	A1	B-Tm (1.2.3／6)	10c初頭　支脚－羽口
	カマドB	－	－	－	－	－	－	S－12°－W　南壁東側	－	A1		9c後半
707		5.0×4.7　方形	23.6	N－5°－E	60	ほぼ一巡	4-D	S－3°－W　南壁西側	－	D	B-Tm (1.2.3／5)	10c初頭　排水溝
708	竪穴遺構	2.5×2.4　方形	5.3	N－2°－E	20	－	3-A	－	－	－		10c初頭　鍛冶遺構

住居跡観察表５

住居番号	重複関係	規模・平面形	床面積（㎡）	主軸方位	深さ（㎝）	壁溝	pit（柱穴配置）	カマド 位置	カマド 芯材	カマド 煙道部断面	降下火山灰	備考
709		4.5×4.8　方形	19.8	N－２°－W	60	ほぼ一巡	4-D	S－３°－W　南壁西側	礫	A１	B-Tm（4／7）	10c 初頭
710		4.2×4.2　方形	16.1	N－10°－W	60	部分	3-A	S－10°－W　南壁東側	－	D	B-Tm（1／7）	10c 初頭
711		不明	－	N－19°－W	5	－	2-A	不明　北壁	－	－		９c 後半～10c 前半
712		2.8×2.9　方形	7.6	N－50°－W	25	－	2-A	S－48°－E　南壁西側	－	A１		10c 初頭
713		4.0×4.3　方形	15.7	N－25°－W	30	部分	3-A	S－31°－E　南壁西側	－	A？		９c 後半　排水溝　支脚－甕
	カマドB	－	－	－	－	－	－	S－31°－E　南壁西側	－	A？		９c 後半？
714		4.2×4.8　長方形	18.7	N－36°－W	55	ほぼ一巡	4-A	S－34°－E　南壁東側	－	D	B-Tm（1／8）　To-a　（5／8）	10c 初頭
	カマドB	－	－	－	－	－	－	S－32°－E　南壁西側	－	D		10c 初頭以前（９c 後半？）
715		2.5×2.3　方形	4.9	N－65°－E	15	－	0-A	N－35°－E　北壁中央	羽口	不明	B-Tm（1／1）	10c 初頭
716		4.9×4.8　方形	20.5	N－45°－W	50	ほぼ一巡	4-A	S－45°－E　南壁西側	礫	B？	To-a（3.4.5.10／10）	９c 後半　支脚－羽口
717		2.9×2.8　方形	7	N－42°－W	50	－	3-A	S－45°－E　南壁中央	－	B？	To-a（1.2.3.5.6.7／10）	９c 後半
718		4.0×4.2　方形	15.4	N－21°－W	50	ほぼ一巡	3-A	S－15°－E　南壁西側	羽口	C	B-Tm（1／7）	10c 初頭
719	719＞720	3.3×3.8　長方形	10.4	N－10°－W	65	部分	3-A	S－16°－E　南壁東側	－	C	B-Tm（1／5）	10c 初頭　支脚－羽口
720	719＞720	3.3×3.6　方形	10.7	N－32°－W	30	ほぼ一巡	1-A	S－30°－E　南壁西側	－	C		９c 後半
721		5.6×6.0　方形	32.4	N－22°－W	50	部分	26-F	S－25°－E　南壁西側	羽口	C	B-Tm（1／5）	10c 初頭
722		2.6×2.2　長方形	5.4	N－37°－W	50	－	0-A	S－25°－W　南西隅	－	A１		10c 初頭
723	723＞724	3.2×3.2　方形	9.3	N－18°－W	35	ほぼ一巡	1-A	不明　南壁東側	－	－	To-a（2／2）	９c 後半
724	723＞724	3.7×4.8　長方形	17.4	N－18°－W	30	ほぼ一巡	1-A	S－18°－E　南壁西側	－	B	To-a（1／2）	９c 後半　支脚－礫
725		2.6×2.6　方形	5.9	N－３°－E	45	ほぼ一巡	0-A	S－２°－W　南壁西側	－	D	B-Tm(1.2／7)	10c 初頭　支脚－甕（ナデツケ）
726		不明	－	N－44°－W	40	－	1-A	S－43°－E　南壁西側	－	D		９c 後半
727	727＞713・715・717・718	3.1×2.8　長方形	9.4	N－34°－W	40	－	1-A	不明　南壁中央	－	－	B-Tm（1.2／4）	10c 初頭
728A	728A＞728B	不明	－	N－７°－W	90	ほぼ一巡	11-D	S－15°－E　南壁西側	礫・羽口	C	B-Tm（2／8）	11c 初頭　支脚－甕（笹葉痕）
728B	728A＞728B	5.2×5.1　方形	26.1	N－９°－W	－	ほぼ一巡	6-D	不明	－	－		９c 後半
729A	729A＞729B	不明	－	N－14°－W	90	ほぼ一巡	9-D	S－９°－E　南壁西側	羽口	D	B-Tm（2／10）	10c 初頭
729B	729A＞729B	2.0×2.1　方形	3.8	N－73°－E	20	－	3-A	W－20°－S　西壁中央	－	A？		９c 後半
730	730＜731	不明	－	N－41°－E	55	部分	1-A	不明	－	－		９c 後半
731	731＞730	不明	－	N－63°－E	50	－	1-A	E－19°－N　東壁南側	－	D		10c 初頭
732～734	欠番											
735		不明	－	N－８°－W	35	－	2-A	S－８°－E　南壁西側	－	D		10c 前半
801	801＜812	5.0×5.0　方形	25.2	N－４°－W	10	部分	17-C	S－３°－E　南壁西側	－	D		９c 後半～10c 初頭
802	802＞803＞805	2.9×3.1　方形	7.1	N－12°－W	35	部分	6-C	E－10°－N　東壁北側	－	D？	不明火山灰（B-Tm）(1.2／4)	10c 中葉　支脚－甕（ナデツケ）
803	802＞803＞805	3.1×3.3　方形	9.1	N－３°－E	40	－	5-C	E－７°－S　東壁北側	－	A１	不明火山灰（B-Tm）(1.2／4)	10c 前半
804A	804A＞804B	6.2×6.7　方形	40.5	N－27°－W	20	部分	20-F	S－25°－E　南壁西側	礫	C		10c 前半
804B	804A＞804B	不明	－	－	－	部分	11-A	S－25°－E　南壁？	－	A１		(10c 初頭？)
805	802＞803＞805	4.7×4.8　方形	20.8	N－13°－W	35	－	4-C	E－12°－S　東壁南側	－	A１		９c 後半～10c 初頭
806		2.8×2.8　方形	7.2	N－17°－W	25	部分	5-A	S－３°－E　南壁西側	－	C	B-Tm（1／2）	10c 初頭
807・808	欠番											
809		2.6×2.6　方形	6.2	N－26°－W	10	ほぼ一巡	3-A	N－28°－W　北壁西側	－	不明		10c 前半
810・811	欠番											
812A	814＞812＞801.813	6.8×6.8　方形	43.8	N－９°－W	45	ほぼ一巡	3-D	不明　南壁中央	－	不明		９c 後半
812B	812A＞812B＞813	5.7×5.8　方形	33.9	N－10°－W	－	ほぼ一巡	14-D？	不明　東壁南側	－	－		９c 中葉
813	812A＞812B＞813	3.1×2.6　長方形	8	N－８°－W	10	部分	2-A	不明	－	－		９c 前半
814	815＞814＞812	5.2×5.2　方形	25.1	N－30°－W	40	部分	5-D	S－27°－E　南壁西側	羽口・礫	D	To-a（1／4）	９c 後半～10c 初頭
815A	815＞814	7.4×7.7　方形	55.3	N－11°－W	50	ほぼ一巡	14-C	S－16°－E　南壁西側	－	C		10c 初頭
815B	815A＞815B	5.2×6.0　長方形	31.3	N－11°－W	－	ほぼ一巡	11-C	不明	－	－		９c 後半
816	欠番											
817		3.5×4.3　長方形	14.5	N－０°－S	25	部分	16-A	S－０°－N　南壁西側	－	A？		９c 後半　支脚－甕（木葉痕）
818～821	欠番											
822		5.2×5.0　方形	23.3	N－32°－W	65	ほぼ一巡	17-A	S－30°－E　南壁西側	羽口	D	To-a（2／6）	９c 後半　支脚－ロクロ広口鉢（回転糸切り）
823	363＞823	不明	－	－	35	部分	2-A	不明	－	－		９c 後半
824	欠番											
825A	825A＞825B	5.2×5.0　方形	23.5	N－32°－W	20	一巡	3-A	不明	－	－	To-a（4.5.6／13）	10c 初頭
825B	825A＞825B	3.8×(4.0)　方形？	16.4	N－40°－W	－	部分	1-A	不明　南壁東側	－	不明		９c 後半
826		4.1×5.2　長方形	20.7	N－13°－W	65	一巡	4-A	E－15°－N　東壁南側	－	不明	不明火山灰(1／9)	９c 後半～10c 初頭

住居跡観察表６

住居番号	重複関係	規模・平面形	床面積（㎡）	主軸方位	深さ（㎝）	壁溝	pit（柱穴配置）	カマド 位置	カマド 芯材	カマド 煙道部断面	降下火山灰	備考
827～829	欠番											
830		3.7×4.2　長方形	13.2	N－22°－W	80	部分	6-A	S－20°－E　南壁西側	－	D	B-Tm (4／5)	10c 初頭
831A	831A＞831B＞831C	5.0×5.1　方形	26.9	N－14°－W	45	一巡	10-C	S－20°－E　南壁東側	礫？	D		10c 前半　張出部（西壁1.5×1.5）
831B	831A＞831B＞831C	4.7×4.7　方形	19.6	N－14°－W	60	一巡	6-C	不明	－	－		10c 初頭
831C	831A＞831B＞831C	4.0×4.2　方形	16.2	N－13°－W	85	一巡	13-C	S－18°－E　南壁西側	－	D		9c 後半
832	832A＞832B	3.3×3.3　方形	10.5	N－35°－W	60	ほぼ一巡	10-A	S－35°－E　南壁東側	鍋・甕	A？	不明火山灰(1.2／3)	9c 後半
	カマドB	－	－	－	－	－	－	S－32°－E　南壁西側	－	A？		9c 後半以前
901		2.7×2.8　方形？	5.2	N－10°－W	75	－	2－A	E－11°－N　東壁南側	－	A1	B-Tm (6.16／21) To-a (14.15／21)	9c 後半～10c 初頭
902	902＞913	4.0×4.7　長方形	16.7	N－23°－W	30	－	8－A	S－20°－E　南壁西側	羽口（？）	D	B-Tm (1／5)	9c 後半
903	903＞904	不明	－	－	50	部分	12－A	不明	－	－		9c 後半～10c 初頭
904	903＞904	4.0×5.0　長方形	20	N－3°-E	40	部分	13-C	S－4°－W　南壁西側	－	C		9c 後半～10c 初頭
905		4.9×4.7　方形	22	N－35°－W	30	部分	5－A	S－21°－E　南壁西側	－	D	B-Tm (1／16)	9c 後半
906		3.9×4.3　方形	16.6	N－49°－W	40	ほぼ一巡	4-A	S－44°－E　南壁西側	－	D		9c 後半
907		4.1×4.4　方形	17.6	N－31°－W	40	一巡	12-A	S－31°－E　南壁西側	－	D		9c 後半
908		3.2×3.4　方形	9.9	N－38°－W	40	－	3-A	S－42°－E　南壁西側	羽口（2）	A1		9c 後半
909		3.4×3.3　方形	10.5	N－42°－W	25	－	2-A	S－37°－E　南壁西側	－	A1		9c 後半
910		3.3×3.4　方形	10	N－35°－W	40	－	5-A	S－40°－E　南壁西側	甕	A1		9c 後半
911		2.8×3.3　長方形	8.7	N－22°－W	45	部分	3-A	S－16°－E　南壁西側	－	D	To-a (3.5／11)	9c 後半　支脚－羽口
912A	912A＞912B	4.2×4.8　長方形	18.2	N－24°－W	35	ほぼ一巡	4-A	S－22°－E　南壁西側	羽口（2）	D		9c 後半
912B	912A＞912B	3.0×3.0　方形	8.1	N－24°－W	－	部分	0-A	S－22°－E　南壁西側	－	A1		9c 中葉～後半
913	913＞902	不明	－	－	20	－	2-A	不明	－	－		10c 前半
914		不明	－	N－8°－W	30	－	4-A	S－5°－E　南壁西側	－	A1		9c 後半
915	915＞916	不明	－	－	60	－	3-A	E－4°－S　西壁北側	－	A1		10c 前半
916	915＞916	不明	－	－	－	部分	5-A	不明	－	－		10c 前半
917		3.1×3.2　方形	9.3	N－1°－W	55	一巡	3-A	E－4°－S　東壁南側	－	C		10c 前半
918		2.9×3.3　長方形	9.4	N－16°－W	30	ほぼ一巡	3-A	S－16°－E　南壁東側	－	D		9c 後半
919		5.7×5.7　方形	31.3	N－36°－W	40	－	29-F	S－36°－E　南壁東側	－	D		9c 後半～10c 初頭
920	936・937＞920	不明	－	－	20	－	2-A	不明	－	－		10c 初頭
921	欠番											
922	922A＞922B	3.5×3.1　長方形	10	N－18°－W	60	－	1-A	S－25°－E　南壁東側	－	B		9c 後半
	カマドB	－	－	－	－	－	－	S－16°－E　南壁西側	－	A1		9c 中葉
923	923＞938	3.8×3.9　方形	12.7	N－26°－W	40	ほぼ一巡	1-A	S－24°－E　南壁西側	－	C	B-Tm (1.5／10)	9c 後半～10c 初頭　支脚－甕
924	925＞924＞927	5.2×5.3　方形	25.5	N－56°－W	30	部分	1-A	E－40°－S　東壁南側	－	D		10c 初頭
925	925＞924	3.8×4.4　長方形	14.4	N－3°－E	50	－	1-A	S－2°－E　南壁西側	－	C		10c 前半
926	926＞927	4.2×4.1　方形	16.1	N－1°－W	40	一巡	2-A	E－2°－N　東壁北側	礫（3）	C		10c 前半
	カマドB	－	－	－	－	－	－	S－13°－W　南壁西側	－	C		10c 前半
927	924・926＞927	5.4×5.7　方形	25.3	N－28°－W	40	ほぼ一巡	1-A	S－26°－W　南壁西側	－	C	B-Tm (2／4)	9c 後半
928		7.4×7.5　方形	55.5	N－20°－W	25	部分	12-C	S－21°－E　南壁西側	－	B		9c 後半
929	竪穴遺構	2.8×3.2　長方形	7.9	N－40°－W	30	－	2-A	－	－	－		9c 後半
930		2.6×2.3　長方形	5.2	N－34°－W	30	－	1-A	S－36°－E　南壁中央	－	不明	To-a (2／10)	9c 後半
931	931＞932	2.3×2.9　長方形	6.1	N－1°－E	60	－	0-A	S－3°－W　南壁西側	－	D		10c 初頭
932	931＞932	4.7×5.0　方形	19.2	N－37°－W	50	部分	5-A	S－36°－E　南壁西側	羽口	C		9c 後半
933		4.5×4.8　方形	18.8	N－10°－W	40	ほぼ一巡	9-A	E－1°－N　東壁北側	－	D		10c 前半
934	欠番											
935	935？936	(5.8)×5.6　方形	32.2	N－5°－E	40	部分	5-A	S－5°－E　南壁西側	－	C		10c 前半
936	935？936＞920	(4.0)×4.0　方形	13.6	N－8°－E	90	－	2-A	不明　東壁南側	－	不明		10c 初頭
937	937＞920	6.1×6.1　方形	36.5	N－2°－W	45	部分	23-C	E－10°－N　東壁南側	礫？	不明		10c 前半　支脚・坏
938	923＞938	3.8×3.0　長方形	9.5	N－28°－W	35	－	3-A	S－31°－E　南壁西側	－	C		10c 初頭
939	939＞940	4.8×4.0　長方形	18.6	N－7°－E	50	ほぼ一巡	12-A	E－9°－S　東壁南側	－	C		10c 前半　張出部（西壁1.5×1.2）
940A	941＞940＞939	5.8×5.4　方形	26.6	N－6°－W	70	部分	－	不明	－	－		10c 前半
940B	940A＞940B	3.8×5.4　長方形	18.8	N－6°－W	40	部分	5-C？	E－6°－S　東壁南側	－	C		10c 初頭
941	940＞941	不明	－	N－20°－W	20	部分	1-A	E－26°－N　東壁中央	－	不明	B-Tm (1／5)	9c 後半

住居跡観察表７

土　偶　の　製　作

－青森県埋蔵文化財調査センター収蔵資料から－

成　田　滋　彦

１　はじめに

土偶の研究は、プロポーション及び文様に研究の視点が向けられがちで、製作という視点からは、あまり注目されてこなかったのではないかと思われる。

最近、「土偶とその情報」研究会が編集した土偶の集大成というべき『土偶の研究の地平（１）～（４）』（八重樫1997・1998・1999・2000）の論文集の中でも、土偶の製作面にふれた論考は少なく、多くの研究者の論考が筆者も含めて、表面的な観察が中心であり、土偶の基本ともいうべき土偶の製作がおざなりにされている点は、反省すべきである。

今回の論考も1992年の浜野美代子氏が土偶の製作面という視点からとりあげた「土偶の破損」（浜野1992）の論文に多いに啓発され、本地域の土偶を製作という面から取りあげた一因となった次第である。

本論で取り上げる土偶の対象時期としては、土偶製作研究の第一ステップとして、縄文時代中・後期に限定し、「十字型土偶」・「目立たない土偶」と呼称されている板状土偶に焦点を絞って分析したいと思う。

なお、今回使用した資料は、縄文時代中期で鰺ヶ沢町の餅ノ沢遺跡（太田原・野村2000）[注1]・青森市の三内沢部遺跡（市川他1977）・野辺地町の槻ノ木遺跡（白鳥1995）・八戸市の笹ノ沢（３）遺跡（小田川・水谷・新山2001）、縄文時代中期・後期で青森市の三内丸山（６）遺跡（畠山2000、坂本・成田2001）、縄文時代後期で青森市の近野遺跡（山道他1976、三浦他1977、秦他1997）から出土した県内６遺跡の資料である。

６遺跡を選択した理由は、青森県埋蔵文化財調査センターが発掘し、現在、遺物が収蔵されているため、土偶の観察及び分析が容易であるという点からである。

また、三内丸山（６）遺跡については、現在も報告書を作成中であり、今回用いた資料は、2001年３月までに刊行された報告書に記載されている土偶のみを使用して検討しているため、今後の資料の整理によって、土偶の分析内容が変化することもありえるという事をおことわりしておく。

なお、図４～７の土偶は報告書から転載し、図３の土偶は筆者が土偶を取り直したものである。また、断面図に関しては、筆者が実見し図に修正を加えたものである。

スクリーントーンは、標高100m

1　餅ノ沢遺跡　2　三内沢部遺跡　3　三内丸山(6)遺跡
4　近野遺跡　5　槻ノ木遺跡　6　笹ノ沢(3)遺跡

図１　遺跡位置図

２　遺跡概要（図１）

今回、取り扱った６遺跡について、遺跡の概要と土偶の出土状態について、遺跡ごとに記載する。

Ａ　**野辺地町　槻ノ木遺跡**（二本柳1981、畠山1983、白

鳥1995）

本遺跡は、野辺地町字槻ノ木に所在し、野辺地湾に注ぐ近沢川の河口から１㎞上流の標高約40mの段丘上に立地している。

昭和55年に野辺地町教育委員会が調査を実施し（二本柳1981）、翌年、一般農道の整備事業の実施に伴い県教育委員会が調査を実施した（畠山1983）。平成５年には、近沢川砂防ダム建設事業に伴い、県教育委員会が調査を実施した（白鳥1995）。

このように、数次にわたる発掘調査の結果、縄文時代中期（円筒上層ａ～大木10式併行期）の集落が判明し、その規模から上北地域の拠点的な集落と考えられる。

土偶は、遺構内１個･遺構外13個の計14個の出土であり、遺構内は大木10式併行期のフラスコ状ピット内からの出土である。

土偶の時期は、縄文時代中期の円筒上層式期と大木10式併行期、縄文時代後期の十腰内Ⅰ式期の三時期に分類ができる。

Ｂ　**鯵ヶ沢町　餅ノ沢遺跡**（太田原・野村2000）

本遺跡は鯵ヶ沢町に所在し、岩木山東麓の鳴沢川と長前川にはさまれた標高約50mの台地上に立地している。

昭和59年に新谷雄蔵氏が調査し、石棺墓が確認された。その後、県営中山間地域整備の道路工事に伴い、平成９・10年に県教育委員会が調査を実施した。

調査の結果、住居跡７軒・石囲炉25基・配石遺構10基・石棺墓４基・埋設土器５基・土坑39基・遺物包含層１箇所・捨て場２箇所を検出し、縄文時代前期後半から後期初頭にかけての時期であり、西海岸地域の拠点的な集落と考えられる。

土偶は100個が出土し、土坑内から１個･遺構外から99個が出土した。遺構外は第１号捨て場からの出土が多く、特殊な出土及び施設の痕跡はみられない。

土偶の時期は、縄文時代中期末葉の大木10式併行期が主体であり、土偶が少ないといわれた時期に大量に出土しているので、土偶の内容を知るうえで貴重な資料である。

Ｃ　**青森市　近野遺跡**（山道他1976、三浦他1977、秦他1997）

本遺跡は、青森市安田字近野に所在し、青森市の市街地の南西約４㎞で、標高約18mの台地上に立地している。なお、同台地の北側に特別史跡三内丸山遺跡が位置している。

遺跡は、県総合運動公園の整備事業に伴い、昭和48～51年・平成７年に県教育委員会が調査を実施した。

調査の結果、縄文時代中期中葉～末葉及び縄文時代後期の十腰内Ⅰ式の集落を検出した。土偶は、109個出土し､土偶の時期は縄文時代後期の十腰内Ⅰ式が主体である。十腰内Ⅰ式において三桁の数を越える土偶は、他の遺跡ではみられないことである。土偶の出土は、遺構外から出土しており、特殊な出土例はみられない。

Ｄ　**青森市　三内沢部遺跡**（市川・古市・大湯1978）

遺跡は、青森市大字三内字沢部に所在し、標高約13～20mの沖館川の河岸段丘上に位置している。

昭和51年、県教育委員会が東北縦貫自動車道の建設に先立ち、調査を実施した。発掘調査面積は14,000㎡で、住居跡39軒・土坑101基・埋設土器３基等を検出した。その時期は、縄文時代中期中葉

の円筒上層ｃ式期から後葉の最花式に至る時期で、住居跡は２～３軒を一単位とした集落構造であると分析している。

なお、遺跡から南東0.5㎞に特別史跡三内丸山遺跡が位置しており、同一時期における周辺集落のあり方が検討される遺跡である。

土偶は10個出土し、そのうち３個は、第１・22・35号竪穴住居跡の覆土から出土している。第１・35号住居跡は焼失家屋であり、その時期は両住居跡ともに縄文時代中期の円筒上層ｅ式期である。

Ｅ　**青森市　三内丸山（６）遺跡**（秦・三林1999、畠山・相馬・坂本2000、坂本・成田2001）

青森市の三内字丸山に所在する。沖館川に注ぐ小谷地内で、谷川の緩斜面で帯状に立地し、標高約40mである。

北西側の約1.5㎞に特別史跡三内丸山遺跡が位置している。

遺跡は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴い、平成９年～11年の３ケ年にわたって調査を実施した。

調査の結果、縄文時代中期・後期の集落を検出し、住居跡が台地の斜面状に構築しており、全体の集落構造は、フラスコ状ピット・住居跡・土坑が規則的な配置であり、あたかも層序を呈するがごとくであり、サンドイッチ構造の非環状集落[注2]である。

また、クマ形土製品を含めた土・石製品の出土が多い点などがあげられる遺跡である。なお、縄文時代中期の時期では、三内沢部遺跡と同様に特別史跡三内丸山遺跡との関連が注目される。

土偶は35個出土し、遺構内から17個・遺構外から18個が出土した。遺構は住居跡・フラスコ状ピット・土坑である。

土偶の時期は、縄文時代中期（円筒上層ｄ式が主体）、縄文時代後期（十腰内Ｉ式）に大別される。

Ｆ　八戸市　笹ノ沢（３）遺跡（小田川・水谷・新山2001）

遺跡は八戸市に所在し、馬淵川に合流する浅水川と五戸川にはさまれた標高約60～70mの段丘上に位置している。

平成10・11年度に東北縦貫自動車道八戸線の建設に先立ち、青森県教育委員会が調査を実施した。

調査の結果、縄文時代中期初頭の円筒上層ａ式のほぼ単一集落跡である。遺構は住居跡・土坑・溝状土坑・埋設土器・焼土遺構・捨て場を検出し、フラスコ状ピットを中心として住居跡が配置しており、全体の構造はサンドイッチ構造を呈する非環状集落である。

土偶は20個出土し、その内訳は住居跡４個・土坑６個・捨て場２個である。ＳＫ172から出土した土偶は、土偶が墓に副葬された可能性が高いと思われる。

時期は、円筒上層ａ式であり、円筒上層期の遺跡で、時期が明確にわかる遺跡も貴重である。

３　土偶の製作（図２）

Ａ　粘土板

土偶の体部の製作には、一つの粘土塊を手づくねして調整して、整形しているものと、二枚以上の粘土を重ねて整形しているものとに大別できる。

Ａ類　単独タイプ（一枚の粘土板を使用）

一枚の粘土を用いた手づくねタイプで、体部・腕部を一枚の粘土板で製作する。

Ｂ類　重ね型タイプ（二枚以上の粘土板を使用）

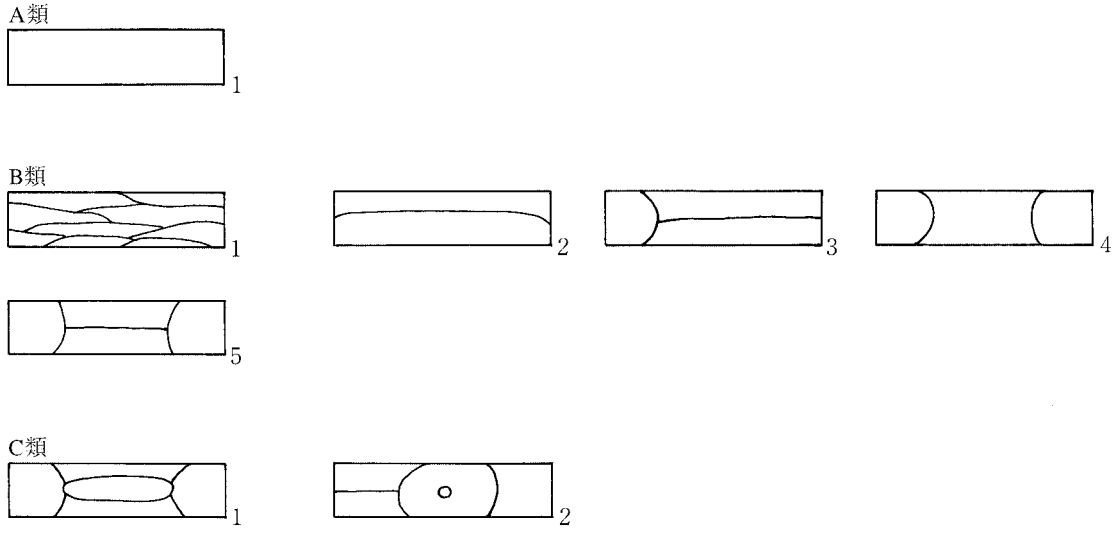


図２　粘土板模式図

二枚以上の粘土を重ねていくもので、薄い粘土板を重ねていくものと、厚さの違うものを重ねていくものがみられる。

B類－１　薄い粘土板を重ねていくものである。
（図５－１）

B類－２　上下に粘土板を重ねていくものである。
（図５－２～５）

B類－３　上下に粘土を重ねた後で、脇に粘土を重ねるものである。
（図５－６～９）

B類－４　粘土板の両脇に粘土を重ねていくものである。
（図５－10）

B類－５　上下に粘土を重ねた後で、両脇に粘土を重ねるものである。
（図５－11～14）

粘土板は、上下に重ねていく重ね餅タイプと、左右に重ねていくタイプが存在する。なお、最終的に化粧粘土を用いる例もみられる。

C類　中心型タイプ

中央部に核となる粘土塊を用いて、更に重ねていくタイプであり、B類の重ね型タイプと基本的には類似している。

C類－１　核となる粘土を中心として、上下及び左右に粘土を重ねていくものである。
（図５－15）

C類－２　中心部に竹等の芯を用いて粘土の核をつくり重ねていくものである。
（図５－16）

土偶の製作にあたっては、多くの土偶は、一枚の粘土板を使用するA類の単独タイプ例は少なく、二枚以上の粘土板を使用するB類の重ね型タイプ・C類中心型タイプ例が主体を占める。なお、首部・

腕部・体部とパーツ毎に分かれて製作し、体部と同様に重ね型タイプで製作している。

Ｂ　ソケット

ソケットが確認された部位は、首部・体部・腕部・脚部の部位である。ソケットは首部及び体部の部位が多く、腕部・脚部は十字型土偶ではなく、立脚型土偶の部位にソケット状構造が確認できる。

ソケットは、接合するにあたって、どちらかの断面を凸及び凹にして、接合するものである。各部位の特徴を下記にまとめる。

Ａ首部

Ａ１　首部に５㎝の凹みを有する。
（図６－１）

Ｂ体部

Ｂ１　体部に２～３㎝の凹みを有する。
（図５－11・図６－２～６）

Ｂ２　体部に５㎝の凹みを有する。
（図６－７）

Ｃ腕部

Ｃ１　腕部に２～３㎝の凹みを有する。
（図６－８・９）

Ｃ２　腕部に５㎝の凹みを有する。
（図６－10）

Ｄ脚部

Ｄ　脚部に５㎝の凹みを有する。
（図５－２）

ソケットは、Ｂ１の体部に２～３㎝の凹みを有するタイプが多く占める。各遺跡をみると餅ノ沢遺跡では、首部と体部にソケットがあり、三内丸山（６）遺跡では、体部と腕部に、近野遺跡では体部・腕部・脚部にソケットがみられる。

Ｃ　芯を用いた製作

土偶の体部には、芯を用い、その芯を中心として粘土を重ねていくものである。前述のＡ粘土板で分類した。Ｃ類－２の芯を有するものである。図４は首部から端部にかけて、0. 75㎝の芯が存在する。また、図６－11は、体部の端部に幅0.4㎝・長さ２㎝の短い芯がみられる。

なお、図６－12は端部の所が斜位であるが、芯かどうかは定かでない。

この芯については、新谷和徳氏（新谷1998）は、竹のような素材が用いられていたという。これらの芯を用いる技法は、縄文時代中期に多くみられ、その使用は限られた技法と考えられる。

Ｄ　焼成・混入物

餅ノ沢遺跡においては、にぶい橙色（Hue 5YR6/3）で全体に白色がかった色調と、橙色（Hue 5YR6/6）

全体に朱色の色調を呈し、その色調は土器の色調と類似している。

焼成は、土偶の中でも一般に焼成の良好なものが主体を占めるが、土偶自体が板状で土器と違い表面積が小さく、焼成の際に温度が一定するため、焼成が良好なものが多いと考えられる。

しかし、笹ノ沢（３）遺跡においては、撚糸圧痕を施文する土偶は橙色（Hue 5YR6/6）焼成は不良、沈線施文の土偶はにぶい橙色（Hue 7.5YR7/4）で焼成が良好であり、撚糸圧痕より薄手のつくりである。文様施文の差で焼成に差がみられる。

また、図３－５のように、土偶の焼成時に表裏面に指頭状の大きさの剥落のみられるもの（はじき[注3]）であり、土偶の焼成がすべて良好なものでなかった例である。

混入物は、槻ノ木遺跡で図６－13は繊維を含み、図５－12は細粒の赤色土を含み、図５－14は長石を含んでおり、その混入物は土器の混入物と同じである事が指摘できる[注4]。なお、鈴木克彦氏（鈴木1985）は、混入物の繊維混入に関しては『…中期の土偶には繊維を含まない例がノーマルであるが、僅かに繊維を混入する例もある…』として、繊維混入は土偶では、一般的な混入物ではないとしている。

Ｅ　貫通孔

腕部の脇の下に貫通孔がみられる。このような貫通孔は近野遺跡に代表される縄文時代後期（十腰内Ｉ式）では一般に多く用いられる技法である。

なお、中期では円筒上層ａ式の笹ノ沢（３）遺跡（図６－15）は、体部に貫通孔のみられるものであり、中期中葉では頭部の後ろ側に４個の貫通孔、中期末葉に頭部の貫通孔（クロスさせて貫通）が、大木10式併行期に多くみられる。土偶を単に吊り下げるものか、貫通孔の用途を含めて検討すべきである。

Ｆ　塗布される土偶

塗布される土偶は、三内丸山（６）遺跡の図６－16の土偶で確認できる。赤色顔料を用いて、表裏面に塗布し、表面は臍部から上部に塗布し、裏面には端部に塗布している。近野遺跡では、図６－17が顔面に、図６－18が体部に塗布している。

餅ノ沢遺跡の図６－19は、体部の裏面に黒漆（？[注5]）を塗布している。顔料を分析していないため、顔料は不明であるが、焼成後に何らかの顔料を塗布している事は、あきらかである。

しかし、土偶の顔料の塗布は一般的な技法ではなく、遺跡内の数点の事例から判断すれば、特異な状況下におかれた土偶が塗布されたと考えるべきである。

Ｇ　打痕跡のみられるもの

打痕跡とは、土偶の一部分を打痕することによって、土偶の表面が剥落することである。図６－20・図７－１は体部の端部に打痕跡、図５－10・図７－２は、体部の上半部に打痕跡、図７－３・４は腕部に打痕跡がみられる。図の矢印方向から何らかの衝撃を受けて生じたと考えられる。

この打痕跡が廃棄時にうけた打痕なのか、意識的にうけた打痕なのか今後の検討と思われる。

Ｈ　焼成のみられるもの

図７－17は、土偶の製作後に再び焼成されたものであり、確認されたのは三内丸山（６）遺跡の１

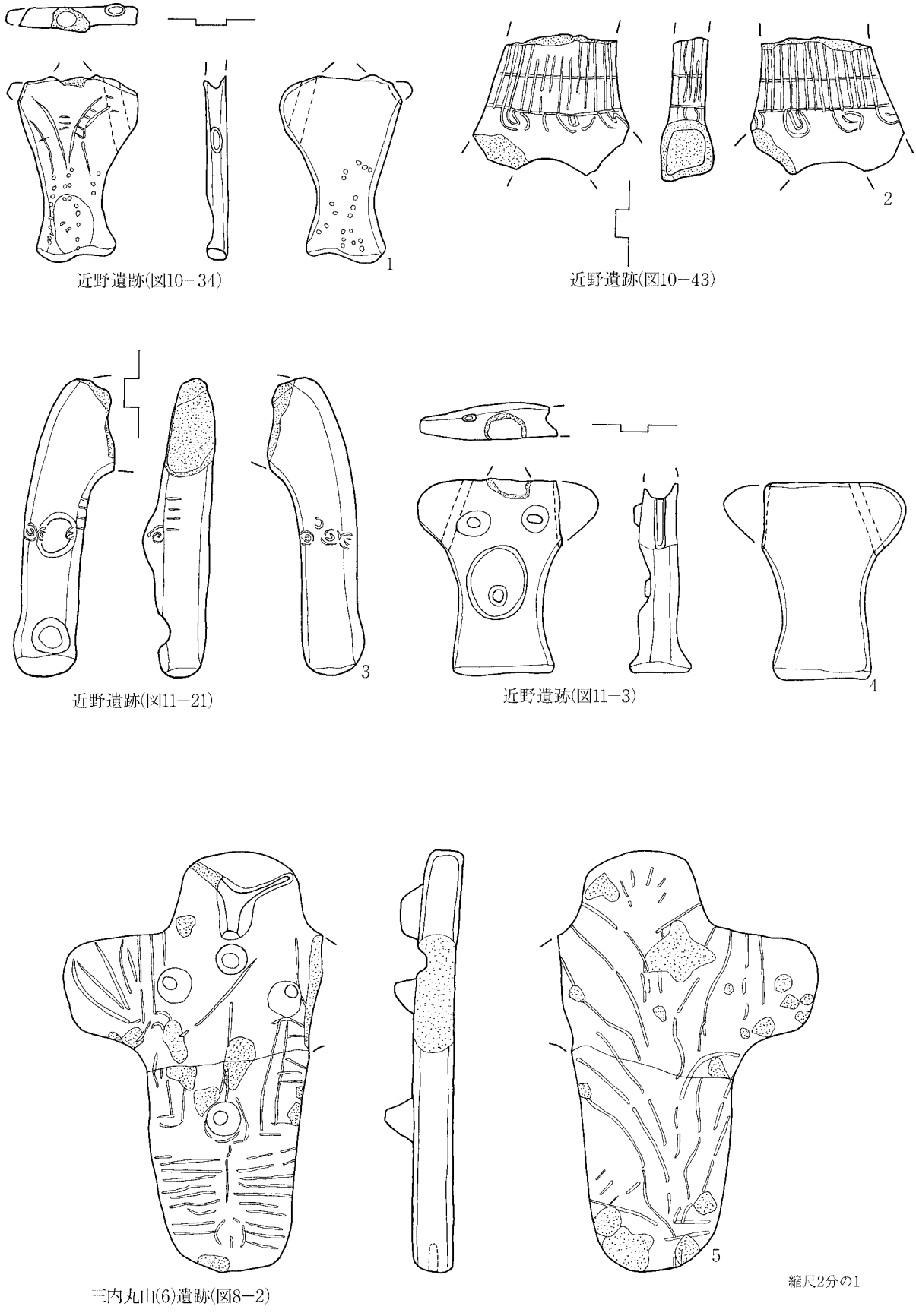


図３　ソケット及びはじきの土偶

例のみである。

土偶は、焼失家屋から出土したものではなく、意識的に二次焼成を受けたと考えられる。

5　おわりに

A　土偶の製作

土偶の製作にあたっては、鈴木克彦氏（鈴木1980）が中期の土偶の場合として、『…板状土偶の製作状の特徴は、板状にした粘土を２枚重ね合わせたと思われるもの（27）、上下につなぎ重ねたと思われるもの（32）があることである。30にも接合痕らしい丸味をおびた部分が割れ口にもみえる…[(注6)]』として、土偶の製作面を記載し、分割製作の予測をしている。この土偶の製作状態の観察は評価されるべきであろう。

一方、小野正文氏（小野1984ｂ）が『…部分塊はソケット式にはめ込むもの、木芯を用いて接合するものとがある。こうした部分塊を接合して土偶を製作する方法を「分割塊製作法」と呼ぶことにする…』として、「分割塊製作法」と呼称し、木芯を用いた木芯接合法とソケット接合法（小野1984ａ）に分類している。

この分割塊製作法にあっては、浜野美代子氏（浜野1990）が、中実土偶の製作を『…中実土偶は、いくつかの粘土塊を段階的に接合しながら製作されたものであろう…』と分割して製作することを指摘している。

筆者も、一枚の粘土板を用いた小形の手づくね土偶以外は、小野・浜野氏の分割して土偶を製作していく事に関し、同様に腕部・体部・脚部・頭部と各パーツ毎に分割して製作すると考えている。

しかし、ソケット状構造は分割しやすいための技法ともいわれているが、筆者はソケット状構造は体部と各部位のパーツをつなげ、壊れにくく固定するための構造ではないかと考えたい[(注7)]。粘土板は重ねるタイプのＢ・Ｃ類のタイプが主体を占めるが、この事は土偶を重ねる事によって、土偶本体を強化する狙いがあり、前述したソケットとともに、壊れにくい土偶製作の技法があったと考える。

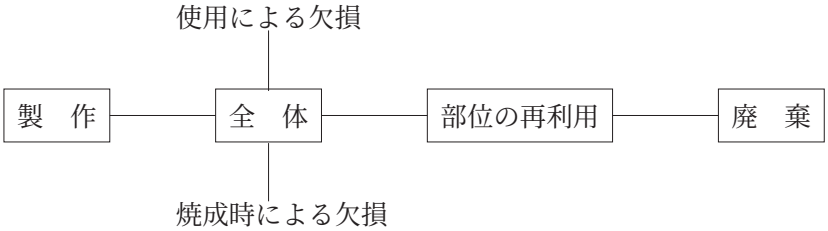
また、土器を製作する輪積み技法（粘土面と粘土面を重ねる）と共通するものをもっており土偶と土器の製作に共通性が伺えるものである。

B　再利用される土偶

餅ノ沢遺跡出土の土偶は、図５－29が首部と両腕部の欠損部分を全体に磨っており、図６－49は胴部下半部の欠損部を磨っている。

この土偶の使用例から考えられることは、土偶は全体のプロポーションが重要ではなく、一部位の残存部位で利用できたと考えられる。

つまり、土偶の一連の過程は、下記の表でまとめた。



欠損・部位の破壊行為

欠損は、使用時による欠損と焼成時による欠損が考えられるが、その際に欠損部位の破壊行為が生じ、その後に部位の再利用が行われるのではないだろうか、この事は、餅ノ沢遺跡における土偶の接合例の少なさ（１例のみでグリッド内での接合）及びアスファルト使用例のみられない点などである。

土偶の使用にあたっては、全体の形のプロポーションが必要であったのではなく、土偶の一部位が必要であったのであり、その部位を用いて使用したと、筆者は餅ノ沢遺跡出土例から考えるものである。

C　アスファルトの付着

アスファルトの付着は、三内丸山（６）遺跡の図７－９で脚部にみられ、近野遺跡では、首部に図７－10～13に４個確認できた。両遺跡の出土土偶は、すべて縄文時代後期の十腰内Ⅰ式であり、縄文

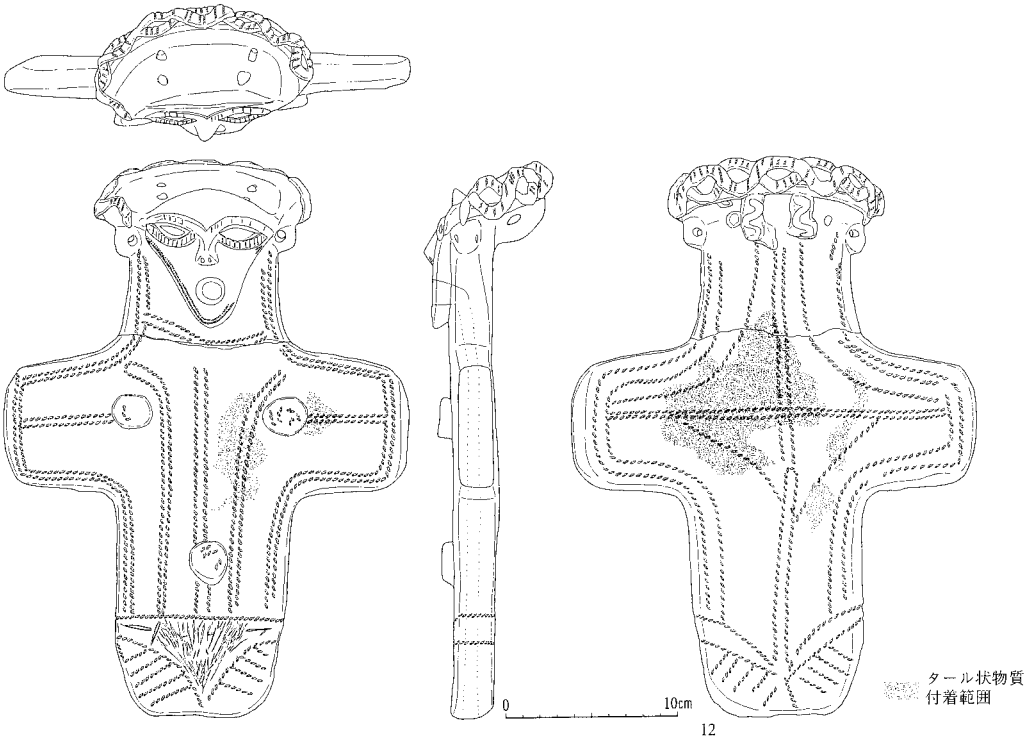


図４　三内丸山遺跡の土偶

ソケット
1
2
3
三内丸山(6)遺跡
餅ノ沢遺跡
餅ノ沢遺跡
4
5
6
7
笹ノ沢(3)遺跡
笹ノ沢(3)遺跡
三内丸山(6)遺跡
打痕
8
9
10
近野遺跡
近野遺跡
三内丸山(6)遺跡
ソケット
11
12
13
餅ノ沢遺跡
槻ノ木遺跡
近野遺跡
15
近野遺跡
14
16
槻ノ木遺跡
三内沢部遺跡
縮尺4分の1

図５　土偶(1)

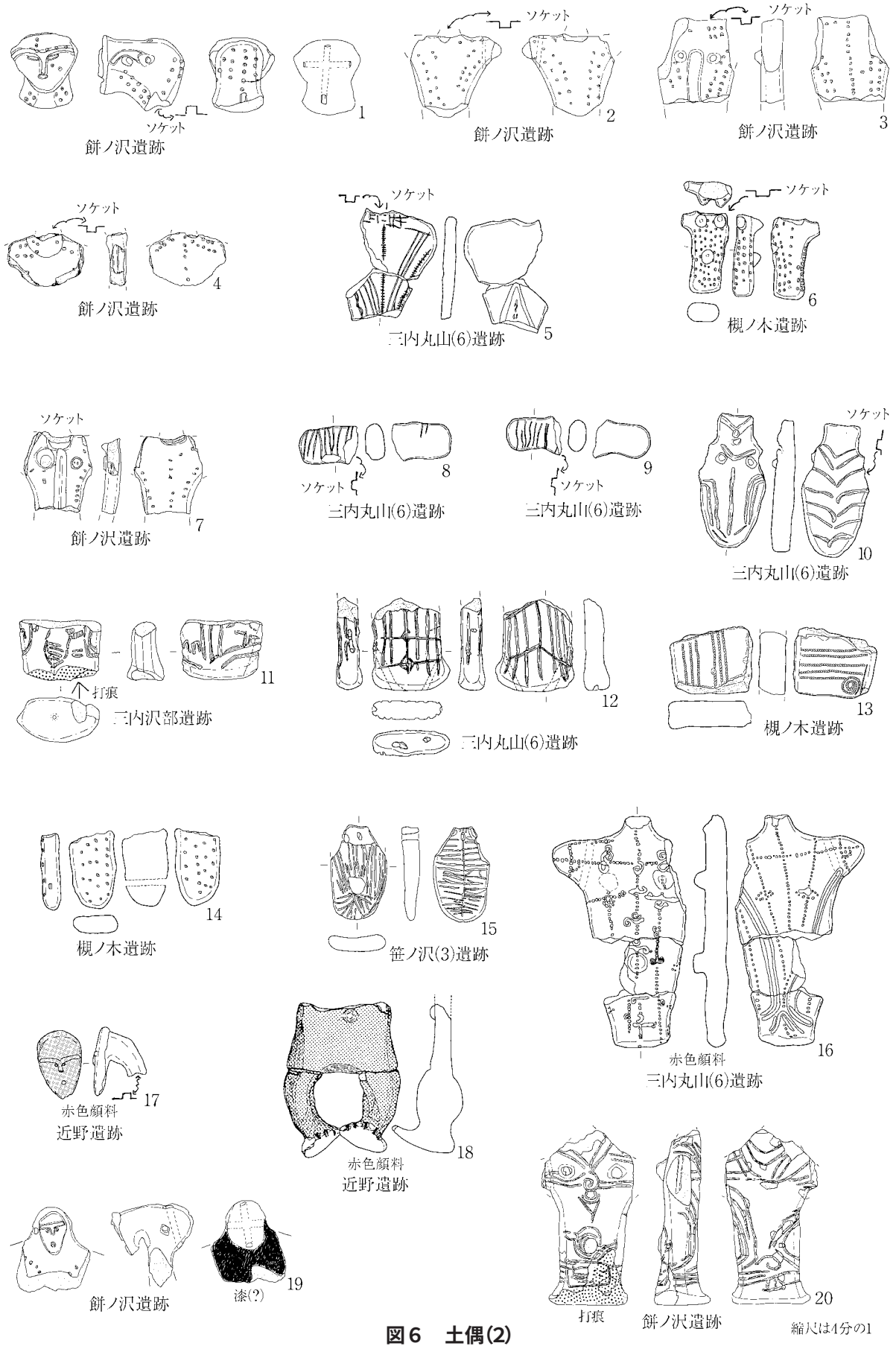

ソケット
1
餅ノ沢遺跡
2
餅ノ沢遺跡
3
餅ノ沢遺跡
4
餅ノ沢遺跡
5
三内丸山(6)遺跡
6
槻ノ木遺跡
7
餅ノ沢遺跡
8
三内丸山(6)遺跡
9
三内丸山(6)遺跡
10
三内丸山(6)遺跡
打痕
11
三内沢部遺跡
12
三内丸山(6)遺跡
13
槻ノ木遺跡
14
槻ノ木遺跡
15
笹ノ沢(3)遺跡
赤色顔料
16
三内丸山(6)遺跡
赤色顔料
17
近野遺跡
18
赤色顔料
近野遺跡
19
漆(?)
餅ノ沢遺跡
打痕
20
餅ノ沢遺跡
縮尺は4分の1

図６　土偶(2)

打痕
1
三内沢部遺跡
打痕
2
近野遺跡
打痕
3
三内丸山(6)遺跡
打痕
4
餅ノ沢遺跡
5
三内丸山(6)遺跡
6
打痕
近野遺跡
磨
磨
7
餅ノ沢遺跡
磨
8
餅ノ沢遺跡
アスファルト
9
三内丸山(6)遺跡
アスファルト
10
近野遺跡
アスファルト
11
近野遺跡
アスファルト
12
近野遺跡
アスファルト
13
近野遺跡
14
三内丸山(6)遺跡
15
三内丸山(6)遺跡
16
三内丸山(6)遺跡
焼成時の剥落
17
三内丸山(6)遺跡
18
餅ノ沢遺跡
19
笹ノ沢(3)遺跡
20
餅ノ沢遺跡
縮尺は4分の1

図７　土偶(3)

時代中期にはみられない。

また、三内丸山（６）遺跡では23個の内１個、近野遺跡では109個出土の内４個と、全体の土偶に於けるアスファルトの使用比率は高くなく、使用頻度が高くない点が指摘できる。なお、近野遺跡では首部に集中しており、首部を接合しなければならないという強い意識構造が存在していたとも考えられる。

縄文時代後期の立石遺跡（小野1979）では、全体の土偶の15%でアスファルトの付着が確認されており、使用頻度に違いが見られる。なお、立石遺跡でも首部に付着が12例確認されており、首部に対する接着が多い点に共通性がみられる点である。

なお、浜野氏（浜野1992）が立石遺跡の補修で用いられたアスファルトの使用について、『…頸部の破損率は高く、アスファルト付着箇所の40%を占めている…』と、アスファルト使用箇所が限定されるという点の記載は、当時の使用者が全体の形状ではなく、一部分の部位が必要であり、重要であったことを裏付けるものであると思われる。

今回は、土偶の制作面の記載が中心であって、土偶を意識的に壊す事を、前提にして製作したのかについては、筆者の考えは否定的であり、土偶は壊されるべくして製作したものではないと考える。

しかし、筆者が以前記載した（成田1999）土偶に関して、立脚土偶Ｂ類型は分割されると記載したが、これは、分割されるために土偶を製作されるのではなく、分割を意識した行為があり、その分割に一定の共通のパターンが存在することを述べたかったのである。なお、土偶の破壊行為の有無については、新たに稿をおこしたいと思う。

注

注（１）　餅ノ沢遺跡の報告書では、筆者が土偶を担当する予定であったが、筆者の突然の入院で、報告書を担当していた太田原潤・野村信生の両職員に多大なる迷惑をおかけした。本文を借りて両氏におわびするとともに、報告書で記載できなかった餅ノ沢遺跡の土偶を他方面から分析し、随時、発表していきたいと思っている。

注（２）　サンドイッチ構造とは、遺構群が土層の層序をなすように配置され、全体の構成からサンドイッチにているため、筆者が命名した集落構造である。

注（３）「はじき」とは、粘土面の温度及び粘土面の乾燥が一定していない時に剥落が生じる事であり、土器にもみられる現象である。

注（４）　土偶の断面観察によって、土器の製作と同一であると指摘したが、小林達雄氏（小林1996）は、土偶の粘土について『…土偶用の粘土が土器一般用と区別されていたとすれば、それは、 土偶の性質の重要部分の一つとして注目すべきである…』として、土器と土偶は、粘土及び焼成も相異する事を考えられると提言している。筆者が同一としたのは視覚的な観察で判断しており、今後は胎土分析等を用いて検討することも重要であると思われる。

注（５）　黒色の付着物については、分析をしていないために明確でないが、特別史跡三内丸山遺跡出土の大形土偶（図４）にもみられる。平成８年の報告では、実測図に「タール状物質」と記載している（小笠原1996）が、平成12年の報告（小笠原2000）では、タール状物資について一切触れておらず、図からも削除されている。筆者の土偶の実見では、黒色の付着物が付着していると確認しており、どうして前回の図を修正したのか、不思議である。

注（６）　上下につなぎ重ねた技法に関しては、筆者の用いた今回の資料では確認できなかった。類例の少ない技法と考えられる。

注（７）　上北考古談話会で、土偶の製作実験を平成12年８月に実施した。その際、ソケット技法を用いて土偶を製作したところ、ソケット技法は粘土と粘土の接合を強化する意味ではないかと確信した。今後、実験を重ねていくつもりである。

引用・参考文献

新谷和徳（1998）「唐草文土偶とその周辺」『土偶研究の地平』２　　勉誠出版社
太田原　潤・野村信生（2000）「餅ノ沢遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告』　第278集　青森県教育委員会
小笠原雅行（1996）「三内丸山遺跡Ⅵ」　　『青森県埋蔵文化財調査報告書』第205集　　青森県教育委員会
小笠原雅行（2000）「三内丸山遺跡ⅩⅥ」　『青森県埋蔵文化財調査報告書』第283集　　青森県教育委員会
小田川哲彦・水谷真由美・新山珠美（2001）「笹ノ沢（２）・（３）遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書』第305集　青森県教育委員会
小野正文（1984ａ）「土偶の分割塊製作法資料研究（１）」『丘陵』11号
小野正文（1984ｂ）「土偶の製作法について」『甲斐路』50
小野美代子（1979）「立石遺跡」『大迫町埋蔵文化財調査報告書』第３集　大迫町教育委員会
市川金丸・古市豊司・大湯卓二（1978）「三内沢部遺跡発掘調査報告書」『青森県埋蔵文化財調査報告書』　第41集　青森県教育委員会
小林達雄（1996）『縄文人の世界』朝日新聞社
坂本真弓・成田滋彦（2001）「三内丸山（６）遺跡Ⅲ」『青森県埋蔵文化財調査報告』第307集　　青森県教育委員会
白鳥文雄（1995）「槻ノ木（１）遺跡」　『青森県埋蔵文化財調査報告書』第169集　　青森県教育委員会
鈴木克彦（1980）「土偶の研究序説」『調査研究年報』第６号　　青森県立郷土館
鈴木克彦（1985）「土偶の研究（Ⅱ）－円筒土器文化に伴う土偶－」『菊地啓次郎学兄還暦記念会』
成田滋彦（1999）「目立たない土偶」『土偶研究の地平』３　　土偶とその情報研究会
二本柳正一・瀬川滋・田中寿明（1981）「馬門槻ノ木遺跡発掘調査報告書」　『野辺地町文化財調査報告書』第１集　野辺地町教育委員会
畠山昇・相馬新吉・工藤由美子・坂本真弓（2000）「三内丸山（６）遺跡Ⅱ」　『青森県埋蔵文化財調査報告書』　第279集　　青森県教育委員会
畠山昇（1983）「槻ノ木遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書』第77集　　青森県教育委員会
秦光次郎・木村真明（1997）「近野遺跡Ⅳ」　『青森県埋蔵文化財調査報告書』第216集　　青森県教育委員会
浜野美代子（1990）「縄文土偶の基礎研究」『古代』90号　　早稲田大学考古学会
浜野美代子（1992）「土偶の破損」『研究紀要』　第９号　　埼玉県文化財事業団
山道紀郎・三浦圭介・成田滋彦（1976）「近野遺跡(Ⅱ)」『青森県埋蔵文化財調査報告書』第22集　青森県教育委員会
三浦圭介・杉山武・成田滋彦（1977）「近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）」　『青森県埋蔵文化財調査報告書』第33集　青森県教育委員会
八重樫純樹（1997）「土偶とその情報」『研究論集』（１）　土偶とその情報研究会
八重樫純樹（1998）「土偶とその情報」『研究論集』（２）　土偶とその情報研究会
八重樫純樹（1999）「土偶とその情報」『研究論集』（３）　土偶とその情報研究会
八重樫純樹（2000）「土偶とその情報」『研究論集』（４）　土偶とその情報研究会

大木系土器の受容傾向
－円筒土器と大木系土器の共伴事例から－

坂本真弓

１　はじめに

円筒上層ｅ式が円筒土器の範疇に含まれることは多くの先学者が認識し、指摘していることである（村越1974、三宅1989）。しかし、これとは異なる見解もあり、円筒土器本来の伝統が崩れた「円筒上層ｅ式以降」を大木系土器とし、「円筒土器の概念」について論じているものもある（鈴木1982･1998･1999）。確かに、大木式土器の特徴は、円筒上層ｄ式とｅ式の型式設定の際にも反映され、沈線文の導入という「施文手法の変化」が両型式の境界となって表れている。このことを踏まえ、大木式土器と円筒土器の関わりについて見るために、県内の大木系土器と円筒土器で共伴関係が明確に分かっている事例を取り上げ、「大木系土器要素」と「円筒土器の伝統的手法」の傾向を探る。

２　共伴関係事例の抽出

青森県内の大木系土器（大木７ｂ・８ａ式併行期）の土器が出土している遺構を抽出し、次のような条件をつけて共伴事例を選別した。

①共伴する円筒土器は、器形や文様構成がある程度復元されているもの。②「覆土」「堆積土」のものは出土地点と出土レベルが不明なものは使用せず、同一層位のもの・床直・床面出土のものを使用する。③いわゆる「接触土器」のような円筒土器と大木系土器とを比較できないものは除く。④同一層位のものでも文様の入っていないものは除く。以上のような条件を加えて抽出された共伴事例は７例確認された。

冨ノ沢（２）遺跡（六ヶ所村）　**第６号住居跡**　（図１－１～３）

報告書には復元図３点、破片図９点の計12点が掲載されている。出土層位別にみると、床面３点、床直１点、１層１点、フク土５点である。復元図３点はほぼ完形の個体が押し潰されたような状況で、住居南西壁前の床面付近から出土しており、住居跡は出土遺物から円筒上層ｄ式期の住居として報告されている。

松ヶ崎遺跡（八戸市）　**第19号住居跡**　（図１－４～10）

報告書では復元図21点、破片図８点の計29点が掲載されている。出土層位別にみると１層７点、２層９点、３層10点、床２点、ピット１点である。住居跡内の堆積状況は人為堆積と考えられ、遺物は「住居廃絶後に投棄されたような状態で…出土した。」とあり、住居内の埋め戻しが行われたと考えられる。ただ、埋め戻しの頻度を確認するのは困難なため、遺物は層位ごとに取り扱うこととした。住居跡は出土遺物から円筒上層ｄ式期以前と報告されている。大木系土器の出土した層は２層と床面であり、この２つの層内の遺物を図示している。

三内丸山（６）遺跡（青森市）　**第60号住居跡**　（図１－11～14）

土器は1385点出土し、このうち復元図10点、破片図13点の計23点を掲載している。掲載されている図を出土層位別にみると、ピット２から４点、床面１点、１層４点、２層１点、３層３点、４層１点、

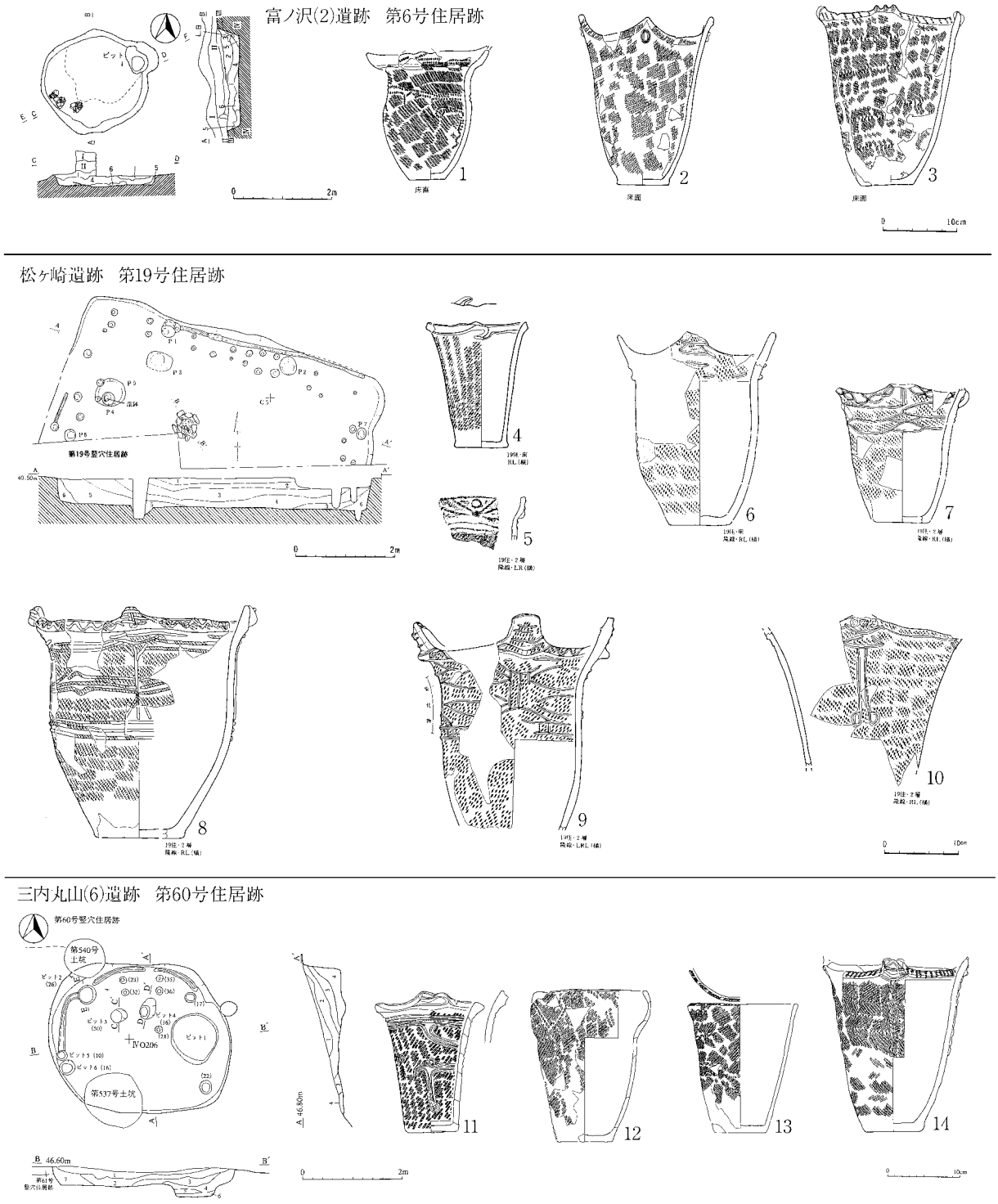


図１　共伴事例１

他堆積土９点である。住居跡の北西壁際にあるピット２内に計３個体、これらの土器の直上から１個体の計４個体が出土している。住居跡は出土遺物から円筒上層ｅ式期と報告されている。

冨ノ沢（２）遺跡（六ヶ所村）　**第276号住居跡**　（図２－15～21）

報告書には「住居跡中央部から多く出土した。」とあり、このうち復元図22点、破片図20点の計42点が掲載されている。出土層位別に見ると、床面６点、床直19点、３層１点、フク土16点である。住居

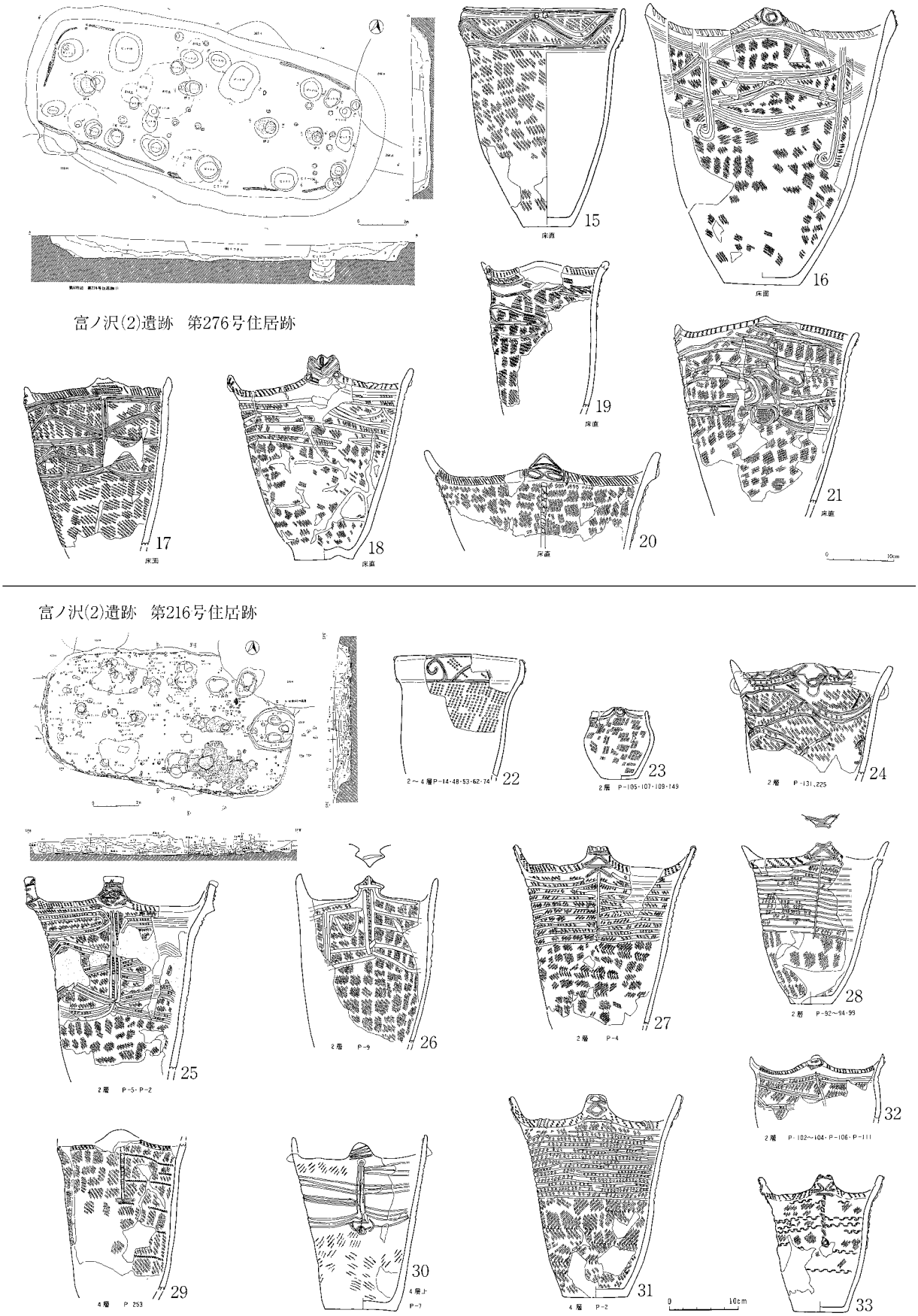

富ノ沢(2)遺跡　第276号住居跡
富ノ沢(2)遺跡　第216号住居跡
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
床直
床面
2～4層P-14-48-53-62-74
2層　P-105-107-109-149
2層　P-131,225
2層　P-5-P-2
2層　P-9
2層　P-4
2層　P-92～94-99
4層　P 253
4層上
P-7
4層　P-2
2層　P-102～104-P-106-P-111
0　10cm

図２　共伴事例２

内の堆積状況は「自然堆積と思われる。」と報告されており、ここでは床面・床直の復元図６点を扱う。住居跡は円筒上層ｅ式期と報告されている。

冨ノ沢（２）遺跡（六ヶ所村）　**第216号住居跡**　（図２－22～33）

報告書には「覆土中から多量の土器が出土した」とあり、このうち復元図24点、破片図39点の計63点が掲載されている。出土層位別にみると、床面１点、床直１点、１層１点、２層27点、３層２点、４層22点、５層１点、フク土４点、その他４点である。住居跡は円筒上層ｅ式期と報告されている。大木系土器は２～４層中で出土しており、この層位の遺物を10点選別したが、これらの資料を扱う際には次の点に留意した。本住居内からは床面直上で多量の炭化材が出土しており焼失家屋の可能性もあるため、この上下の遺物は同列に扱わないこととし、また、本住居跡が完全に埋まりきるまでの堆積状況を確認するのは困難なため、準事例として扱う。

泉山遺跡（三戸町）　**第22号住居跡**　（図３－34・35）

報告書では、復元図１点、破片図３点の計４点が掲載されている。出土層位別にみると、埋設土器１点、床直１点、フク土２点である。住居跡内の堆積状況は自然堆積と考えられ、埋設土器は住居跡南側中央周溝側で倒立状態で検出されている。出土遺物から円筒上層ｅ式期と報告されている。

泉山遺跡（三戸町）　**第１号フラスコ状ピット**　（図３－36～52）

報告書では復元図21点、破片図23点の計44点が掲載されている。このピットの堆積土中位から下位にかけて多量の土器とともに、石器類、土偶、骨角器、クリ・クルミの炭化物・獣骨などもみられ、廃棄場所や炉として機能していた可能性がある。遺物の接合状況から遺物の廃棄等が行われたと考えられる。

３　円筒土器と大木系土器の属性

これらの大木系土器の影響が具体的にどのような形で浸透していったのかを探るために円筒土器を個々の属性に分けて、その影響の度合いを測るために円筒土器38個体、大木系土器11個体、折衷土器１個体の計50個体の深鉢形土器を、次のように項目ごとに分類した。（浅鉢形・鉢形土器は含めていない。）

円筒土器（表１・表２）

器形－波状口縁と平口縁がある。波状口縁は突起のあるものを含み、形態から３つに分類した。

波状　１いわゆる「バケツ形」のもので、底部から口縁部にかけて緩やかに開くもの。
２胴部中央付近で緩やかに張るもの。土器の最大径は口縁部にくるものが多い。
３口縁部の傾きが直線的もしくは内湾気味になり、胴部からの連続したカーブを持たないもの。
４底部から口縁にかけて大きく開きラッパ状になるもの。

口縁部

突起　形態・突起直下の文様・突起部分の主文様構成・施文技法などから分類した。

形態　１三角形基調のもの　２方形基調のもの　３台形基調のもの　４円形基調のもの　５十字形のもの　６波状のもの

突起直下　１ボタン状の文様がつくもの　２横位の粘土紐がつくもの

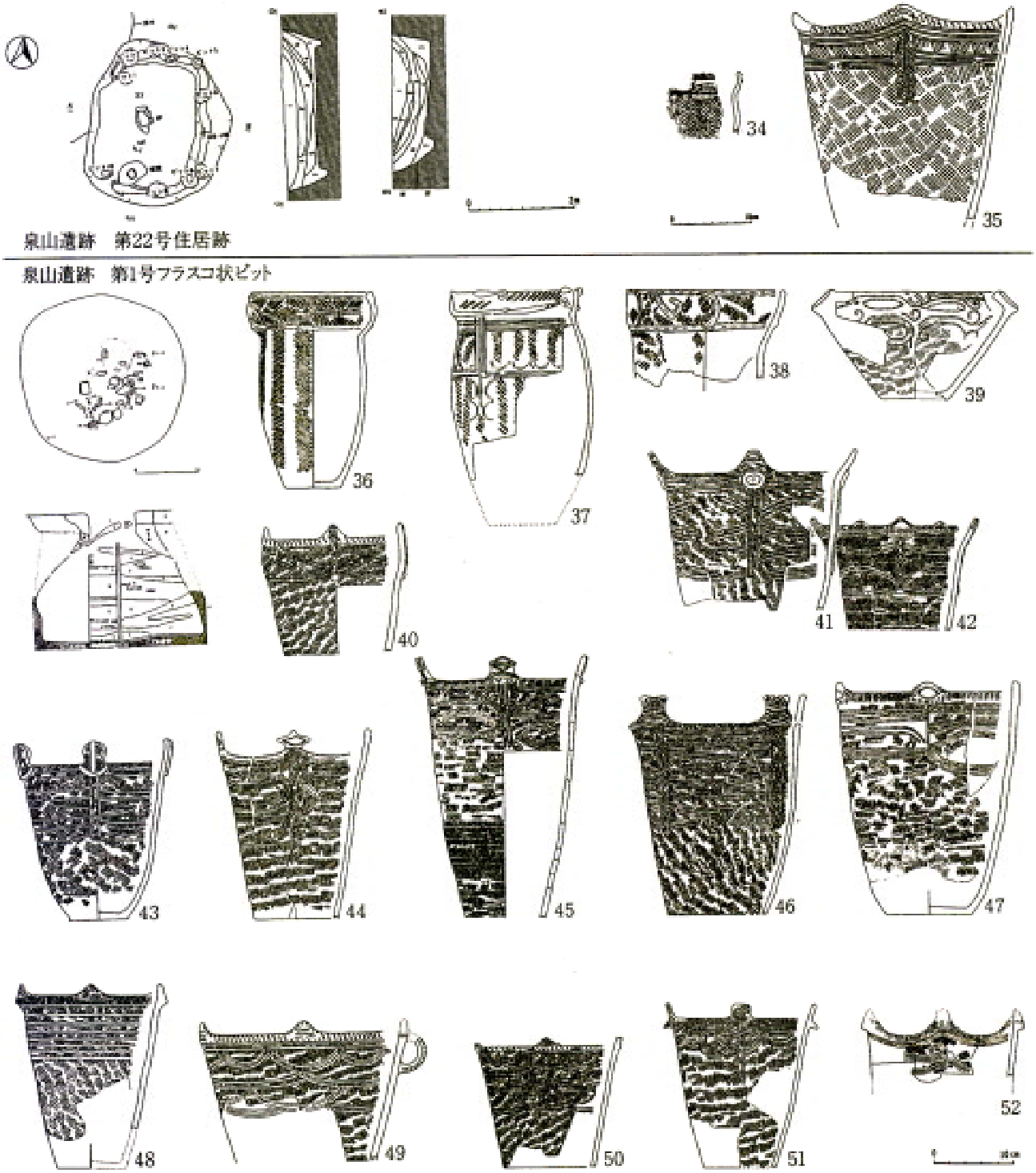
文様構成　１横位直線　２楕円形基調のもの　３三角形基調のもの　４菱形　５渦巻文基調のもの　６意匠系（動物・人面）７無文

施文技法　１粘土紐を貼付るもの　２粘土紐貼付後に別に施文するもの　３地文縄文を回転施文するもの　４沈線　５縄文を押圧するもの

口唇部　突起以外の口唇部施文技法から分類した。
１縄文を押圧するもの　２粘土紐を貼り付けるもの　３地文縄文を回転させるもの　４棒状工具による刺突・沈線のもの

胴部

地文縄文　回転方向と原体の種類で分類した。



泉山遺跡　第22号住居跡

泉山遺跡　第1号フラスコ状ピット

図３　共伴事例３

横位　１単節縄文　２結束縄文　３結節縄文　４無節縄文　５複節縄文
縦位（斜位含む）１単節縄文　２複節縄文　３合撚縄文
文様構成　胸骨文とこれ以外の文様、施文技法で分類した。
胸骨文　中心線　１中心線２本　２中心線１本　３中心線３本
中心線周辺　１中心線から延びる上下２つの曲線を１単位とするもの　２これ以外のもの
胸骨文以外のもの　１曲線を基調とするもの　２横位直線を基調とするもの　３渦巻文が含まれるもの
４横位と縦位の直線で構成されるもの
施文技法　１粘土紐貼付後に刺突を施文するもの　２粘土紐を貼り付けるもの
３粘土紐貼付後に地文縄文を回転施文するもの　４沈線

大木系土器（表３）

器形－１キャリパー形のもの　２口縁部が直線的か外側に開くもの

口縁部－文様構成と施文技法で分類した。
文様構成　１横位の直線と弧状文で構成されるもの　２円形文と横位の直線文で構成されるもの　３弧状文で構成されるもの　４山形文で構成されるもの　５渦巻状文で構成されるもの
施文技法　１隆線による施文　２縄文押圧による施文
胴部－文様構成と地文縄文で分類した。
文様構成　１縦位・横位の直線と波状文で構成されるもの。　２横位の直線と波状文で構成されるもの　３縦位・横位の直線と渦巻文で構成されるもの　４文様構成のないもの
地文縄文　縄文原体の回転施文方向で分類した。
縦位　１単節縄文　２無節縄文　　横位　１単節縄文　２無節縄文　３複節縄文

４　土器の各属性観察

円筒土器

器形　円筒土器は基本的に底部から緩やかに立ち上がる器形を維持している。住居跡事例では大木７ｂ式併行土器と共伴した図１－２・３と大木８ａ式併行土器と共伴した図１－13・14が大木系土器の共伴例があるにも関わらず、円筒土器の伝統を維持している。胴部が張る例は図１－６・８・９ですでに存在し、上層ｅ式期をとおしてみられる。口縁が直線的にもしくは内湾気味に立ち上がるもの（図２－17・25）、ラッパ状に開くもの（図１－10）も少数例存在する。

口縁部突起　主体を占めるのは三角形状と方形状で、文様構成は横位の直線を用いるものが各事例とも最も多く、楕円形基調・三角形基調のものがこれに続く。施文技法は圧倒的に粘土紐貼付が多く、これは円筒上層ｄ・ｅ式を問わず見られるものである。これ以外にも貼付後に縄文原体の押圧、縄文原体の回転施文、刺突施文など、貼付を基調にしたものが目立つ。

口唇部　縄文原体による押圧が多数を占める。縄文原体回転施文は、地文縄文を施文する際にそのまま口唇部付近を施文している。このほかに、粘土紐貼付や棒状工具による刺突・沈線文などが少数例みられる。

縄文原体の種類　単節縄文が主体を占める。結束縄文が少数例みられるが、複節縄文に比べれば頻度が高い。

回転施文方向　横方向の施文が半数以上であるが、円筒上層ｅ式期には縦方向のものもみられる。円筒上層ｄ式期には縦方向の施文はほとんどみられない。

文様構成　波頂部から垂下する中心線とここから上下に延びる曲線をもつものを胸骨文とし、これ以外の中心線から延びる曲線が崩れたもの、中心線のみ残存したもの、中心線のないものとの比較を行った。円筒上層ｅ式期に顕著にみられる胸骨文だが、割合では35例中８例と少なく、むしろ、胸骨文から派生したものや中心線のない文様構成が目立つ。

文様施文　円筒上層ｄ式とｅ式を分ける最も大きい要素である。中心線とこれ以外の文様技法をわけて各々分類している。当然ながら、松ヶ崎遺跡例のように円筒上層ｄ式としたものには、粘土紐貼付の技法が使用され、円筒上層ｅ式期とした共伴例には、ほとんどが沈線による技法が使われている。この中で特徴的なのは、円筒上層ｅ式期にも中心線には粘土紐と円形刺突の施文技法が使用される点である。これは、図３－42にみられるように、中心線の周囲が地文縄文施文のみでも残存するようである。

大木系土器

器形　大木７ｂ式併行期の一例は口縁部が外に向かって水平に広がったあとほぼ真っ直ぐに立ち上が

| 番号 | 胴部 | | |

番号	器形	押手	口縁部 形状	直下 三角形	直下 方形	直下 方形	直下 台形	直下 円形	直下 十字状	直下 波状	直下 ボタン状突起	直下 横位貼付	文様構成 横位直線	文様構成 楕円・円	文様構成 三角・菱形	文様構成 渦巻文	文様構成 意匠	文様構成 無文	施文 貼付	施文 貼付	施文 縄文	施文 沈線	施文 縄文	施文 押圧	口唇 縄文押圧	口唇 貼付	口唇 縄文回転	口唇 沈線
2	産部から口縁部にかけて緩やかに開くもの	産部中央付近で緩やかに張る器形だが、口縁部に最大径がくるもの。	口縁部の立ち上がりが胴部と異なる器形になる。	産部から口縁にかけて大きく開き、ラッパ状に開く																								
3																												
6																												
7																												
8																												
9																												
10																												
13	平口縁																											
14																												
16																												
17																												
18																												
19																												
20																												
21																												
24																												
25																												
26																												
27																												
28																												
29																												
30																												
31																												
32																												
33																												
35																												
41																												
42																												
43																												
44																												
45																												
46																												
47																												
48																												
49																												
50																												
51																												
52																												

表２　円筒土器属性表

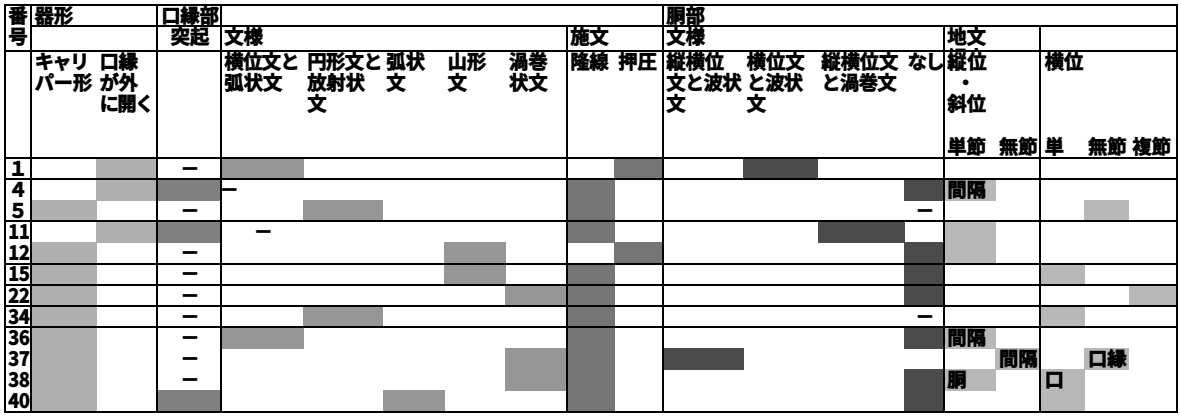


表３　大木系土器属性表

るものである。県内で確認される大木８ａ式併行期の土器はキャリパー形のものが最も多い。この他、底部から口縁部にかけて大きく開く図１－４・11も見られる。

口縁部の文様構成・施文技法・Ｓ字状突起　大きくわけて、山形文や弧状文に見られる緩やかな曲線を繰り返すものと端部が渦巻き状になるもの、横位の文様と弧状・円形文を組み合わせるものがある。施文技法には粘土紐を張り付けた後にその両側縁を丁寧に加工する隆線技法と縄文原体を押圧する技法がみられる。山形文は大木７ｂ式併行の口縁部直下に見られる文様であり、大木８ａ式併行土器の図１－12にみられる山形文に後続する可能性がある。この山形文は図２－15のように弧状文へと変化すると考えられる。また、図２－22、３－36～38に渦をまく手前で完結している渦巻状文がみられる。この渦巻き状文は大木８ｂ式併行のキャリパー形土器の口縁部文様に構成される渦巻文の前段階のものと思われ、横位・渦巻き状の文様構成（図３－36～38）から、全体的に曲線を描く渦巻状文（図２－22）に変化する可能性が考えられる。このほか、図１－４・11の口縁部にみられるＳ字状突起は大木８ａ式土器にみられるものである。

胴部の文様構成・地文縄文　胴部に構成される文様はほとんどなく、縦位文・横位文と波状文か渦巻き状文で構成される３例のみである。地文縄文は単節縄文が使用されるものが多く、回転施文方向は横方向のものと縦方向のものが半々である。口縁部は横方向、胴部は縦方向の回転を施すものも２例みられる。また、大木式土器に特徴的な縦方向に施文する際に原体と原体の間隔を規則的にあける帯状縦位文（稲野1991）の技法も見られる。

５　大木系土器の変遷と円筒土器の共伴関係

今回取り上げた大木系土器の変遷を属性の観察結果から３段階に分類した。大木式土器の変遷については、丹羽編年（丹羽1989）を参考にした。

第１段階　大木７ｂ式期

第２段階　大木８ａ式期　キャリパー形土器の口縁部が山形文・弧状文で構成されるもの

第３段階　大木８ａ式期　キャリパー形土器の口縁部に渦巻き状文がみられるもの

円筒土器の共伴関係　今回述べる円筒土器の特徴はあくまでも共伴関係事例からのまとめであり、地域差や時期差を考慮していない。

第１段階　富ノ沢（２）遺跡第６号住居跡例：共伴事例をみると、この段階の円筒土器は器形・地

文縄文とも前型式の属性を受け継いでいる。ただし、共伴例以外の円筒上層ｄ式土器には、胴部の張る器形が多く見られ、前型式から受け継いだものかどうかの判別は難しい。文様構成は不明である。

第２段階　松ヶ崎遺跡・三内丸山（６）遺跡・富ノ沢（２）遺跡第276号住居跡例：松ヶ崎遺跡の共伴事例の円筒土器はｄ式土器が主体だが、共伴した大木８ａ式併行の土器片（図１－５）と図１－４・11の器形からここに含めた。円筒土器の器形は図１－４・11に類似したラッパ状に口縁が大きく開く例が見られ、円筒上層ｄ式期には大木系土器の器形を受容していたと思われる。円筒土器の口縁部は、突起が三角形状で粘土紐貼付による横位沈線文構成のもの、口唇部には縦方向の縄文原体押圧施文が主体的である。この傾向は第３段階まで続く。突起の文様構成には、ほかに意匠系のものもみられる。胴部の文様構成は、上層ｄ・ｅ式期土器に特徴的ないわゆる「胸骨文」的な文様構成は少なく、これから変化した文様が多くみられる。これに比べて、施文技法は沈線が圧倒的に多く、上層ｅ式土器においての沈線文受容の変化は他要素の傾向と比較しても大きな違いがある。縄文原体は単節縄文が主体を占めるが、結束縄文も使用される。縦位の回転施文は松ヶ崎遺跡例の円筒上層ｄ式土器には見られず、円筒上層ｅ式土器には使用され始めている。

第３段階　冨ノ沢（２）遺跡第216号住居跡・泉山遺跡第22号住居跡・第１号フラスコ状ピット：泉山遺跡第22号住居跡例の大木８ａ式併行土器片（図３－34）は口縁部の文様構成が明確でないが、横方向の文様は後続の渦巻文と組み合わされて使用されることが多いため、ここに含めた。円筒土器の器形は第２段階に引き続き胴部の張る器形と底部から緩やかに立ち上がる器形がみられる。円筒土器口縁の突起は三角形状が主体的ではあるが、バリエーションが多くみられ、方形・台形・円形・十字形のものなどがある。突起の文様構成も同様の傾向で、横方向の直線文のほかに楕円形・三角形文・菱形文・渦巻文等がみられ、これらを組み合わせて使用する例もみられる。口唇部の施文技法は縄文原体押圧のほかに沈線・粘土紐貼付・地文縄文を回転施文させた手法もみられる。円筒土器胴部の施文技法･地文縄文等は第２段階と大きな変化がみられない。円筒土器の胴部文様構成は、富ノ沢（２）遺跡第216号住居跡例と泉山遺跡第１号フラスコ状ﾋﾟｯﾄ例での大木系土器の共伴事例から、円筒土器に当てはめてみると曲線的な胸骨文・弧状文の文様構成から直線的な胸骨文・横位文へと変化する可能性がある。ただし、この富ノ沢（２）遺跡例は、共伴事例としては準事例として扱うものであり、今後の検討が必要かと思われる。

６　まとめ

大木系土器要素の受容をまとめてみると、次のような傾向がみられる。

大木系土器で第１・２段階に表れていた縄文原体押圧技法は円筒土器での受容が第３段階にみられる。今回の事例でもこの施文技法が円筒土器にみられるのは１例のみで積極的な導入は行われなかったものと考えられる。大木系土器で第１・２段階に表れた文様構成が円筒土器では同じく第２段階で表れている。胴部の文様モチーフでは波状・渦巻状文は早い段階から取り入れられているが、胴部の縦横位直線は円筒土器では１例のみにみられ、前述の縄文原体押圧施文技法と同様に積極的な導入がみられない。

	大木系土器		円筒式土器
胴部の縄文原体押圧施文技法	第１・２段階	――――	第３段階
胴部の施文方向	第２段階	――――	第２段階
胴部の波状・渦巻状文	第１・２段階	――――	第２段階
胴部の縦横位の直線	第２段階	――――	第３段階

この他、器形については前型式から胴部の張る土器がみられ、円筒上層ｄ・ｅ式土器内だけでその変化を述べるのは難しい。地文縄文については、円筒土器のほうで結束縄文から単節縄文への変化を追わなければ、大木系土器にも多用される単節縄文との比較はできないと考える。胴部の文様構成において、一般的に円筒土器では胸骨文が主体となるが、今回の大木系土器と共伴関係にある円筒土器は胸骨文から変化したものの割合が多く、これが時期・地域差に起因するものなのかの検討が必要と考える。胴部の文様では円筒上層ｅ式の段階でも一部使用される粘土紐貼付の技法についての今後の検討が必要であると考えるが、これが大木系土器の影響によるものかどうかははっきりしなかった。

今回は、大木系土器と円筒土器の共伴事例のみを検討したが、円筒土器同士の共伴事例や遺構の重複関係を含めることができれば、円筒土器の変化と対応させることがより可能であったかもしれない。繰り返すが、少数の共伴関係事例からの傾向を述べており、他の共伴事例も含めれば違った結果が導き出される可能性もあるとみられる。また、県内の事例では八戸市石手洗遺跡があるが、時間の制約上掲載出来なかった。

註）大木式土器と大木系土器－ここでは、大木式土器はいわゆる東北南部を中心とした土器型式全般を指し、大木系土器は、県内で見られる大木○式併行期といわれる大木式土器の影響を受けたものの総称を指すこととし、円筒土器のなかに大木式土器の影響が若干みられるものは除外する。

引用・参考文献

市川金丸ほか1978『泉山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第31集青森県教育委員会

稲野彰子1991「大木式土器にみられる球胴形深鉢について－文様の多様性に注目して－」『北上市立博物館研究報告』第８号

酒井宗孝1998「岩手県北部における縄文時代中期の土器様相」『紀要ⅩⅧ』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

鈴木克彦1982「円筒土器に後続する土器の編年」『考古風土記』第７号　1996「泉山式土器」『日本土器事典』1998「東北地方北部の縄文中期後半の土器」『研究紀要』第３号　青森県埋蔵文化財調査センター　1999「東北地方　中期（円筒上層式）」『縄文時代』第10号　縄文時代研究会

成田滋彦2000「円筒上層式に於ける大木７ｂ・８ａ式について」『村越潔先生古希記念論文集』弘前大学教育学部考古学研究室ＯＢ会

成田滋彦ほか1992『冨ノ沢（２）遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第143集　青森県教育委員会　1995『泉山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第181集青森県教育委員会　2001『三内丸山（６）遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第307集　青森県教育委員会

丹羽　茂1989「中期大木土器様式」『縄文土器大観』第１巻　小学館

三宅徹也1989「円筒土器上層様式」『縄文土器大観』第１巻　小学館

村木　淳1994「松ヶ崎遺跡」『八戸市内遺跡発掘調査報告書６』八戸市埋蔵文化財調査報告書第60集　八戸市教育委員会

村越　潔1974『円筒土器文化』雄山閣

青森県内における縄文時代前期末～中期初頭の異系統土器群について
－県内出土資料の集成－

茅　野　嘉　雄

はじめに

縄文時代前期から中期における青森県内は、前期中葉に確立した円筒土器様式圏の中心的な地域にある。現在円筒土器様式については前期を下層式、中期を上層式に当てており、下層式は大きく４段階、上層式は大きく５段階の変遷が考えられている。各時期ともに他の土器様式との接触を持つが、特に前期末葉～中期初頭段階と中期中葉～末葉段階には隣接する大木式土器様式を中心とした他地域との接触が顕著である。南郷村畑内遺跡では多量の円筒下層式土器に混じって他地域の土器群がまとまって出土している。筆者はその報告において、円筒土器様式の範疇で捉えられるものを在地系土器群、他地域の土器もしくはその影響下に製作されたものを異系統土器群とし、両土器群についての検討を加えた（『畑内遺跡Ⅵ』県埋文報276集）。その際、県内の他遺跡から出土した資料については、言及することはできなかったが、その後調査を進めていくなかですでに発掘された資料中にも異系統土器群と捉えうるものが多数存在することを知った。ここでは縄文時代前期末～中期初頭の青森県内における異系統土器群について、その出土例を紹介し、今後の研究の基礎としたい。なお、出土土器の記述に際しては、以下の器形分類を採用しているため、各遺跡の報告とは若干異なる解釈もある。

［器形分類］（図７）

深鉢Ａ類・・・円筒形の器形を持つもの。

深鉢Ｂ類・・・円筒形の胴部を持ち、口縁部で外傾するもの。

　　１種・・胴部がほぼ直立するもの。

　　２種・・胴部がやや膨らむもの。

深鉢Ｃ類・・・円筒形の胴部を持ち、口縁部が内湾しながら外傾するもの。

深鉢Ｄ類・・・胴部がやや下膨れ気味に張り出し、口縁部が外反するもの。

深鉢Ｅ類・・・円筒形の胴部を持ち、頸部が外反し口縁付近で直立または内傾するもの。

深鉢Ｆ類・・・金魚鉢形の胴部上半に円筒形の底部が付くもの。３種に分類される。

　　１・・・全体形における金魚鉢の比率が高いもの。

　　２・・・全体形における円筒形部分の比率が高いもの。

　　３・・・１から円筒形の底部を除いたもの

深鉢Ｇ類・・・円筒土器の器形がＦ類の影響を受け変容したもの。

浅鉢Ａ類・・・底部から口縁部まで緩やかに内湾しながら立ち上がるもの。

広口壺

１　各遺跡出土資料の概観

図１～６には県内各遺跡から出土した異系統土器と、同じ遺構内のほぼ同時期と思われる在地系の土器の一部を示した。遺構外出土のものに関しては、筆者の主観により掲載土器を選択している。異系統土器を出土した遺跡は、管見に触れたもので、南郷村畑内遺跡、八戸市笹ノ沢（３）遺跡、牛ヶ

沢（４）遺跡、蟹沢遺跡、蟹沢（２）遺跡、福地村館野遺跡、川内町熊ヶ平遺跡、東通村石持納屋遺跡、青森市横内（２）遺跡、小牧野遺跡、三内丸山遺跡、稲山遺跡、桜峯（１）遺跡、鰺ヶ沢町鳴沢遺跡、平賀町太師森遺跡、黒石市板留（２）遺跡、碇ヶ関村四戸橋遺跡、大鰐町大平遺跡、鰺ヶ沢町餅ノ沢遺跡、深浦町津山遺跡、三厩村中の平遺跡、森田村石神遺跡の計22遺跡である。以下に各遺跡出土資料を紹介する。

畑内遺跡（南郷村）

第108号竪穴住居跡・・・炉体土器によって円筒上層ａ式の古段階の遺構と考えられる。異系統土器は覆土中から大木６式と思われる深鉢Ｆ類が出土している。口縁部は半裁竹管状工具を使用した文様、胴部は結節を縦回転している。

第92号竪穴住居跡・・・炉体土器によって円筒下層ｄ２式～上層ａ式の大型住居跡である。覆土中から深鉢Ｇ類が出土している（報告書では遺構外と報告している）。器形は球胴部分を器体中央よりやや上に持ち、底部は緩やかに張り出している。口縁部は縄文原体の側面を梯子状に押圧しており、胴部は結束第２種を縦回転している。

第95号竪穴住居跡・・・炉体土器から円筒下層ｄ２式～上層ａ式の大型住居跡である。覆土中から深鉢Ｆ類と深鉢Ａ類と考えられる異系統土器が出土した。双方ともに口縁部文様は半裁竹管の背を利用した太めの沈線であるが、６には三角形の印刻も見られる。

第107号竪穴住居跡・・・出土土器から円筒下層ｄ２式～上層ａ式の遺構と考えられる。覆土中より受け口状の口縁を持つ深鉢Ｅ類が出土している。

第53・71号土坑・・・深鉢Ｆ３類が出土している。両遺構より出土したものがＢ捨場出土のものと接合している。文様はすべて半裁竹管の腹を使用した沈線であり、それに三角形の印刻が附加されている。胴部下半では三角や「U」字状に区画した沈線内に横位の沈線を充填している。関東地方の五領ヶ台式に見られる手法である。

第42号土坑・・・在地色の濃い深鉢Ｇ類が円筒下層ｄ１式に伴って出土している。

第325号土坑・・・深鉢Ｂ１類が円筒下層ｄ１式と一緒に出土している。１の口縁部は半裁竹管の背部分を使用した沈線である。

第328号土坑・・・円筒下層ｄ１～ｄ２式と橋状把手を持つ深鉢Ｆ類？が出土している。

第340号土坑・・・円筒下層ｄ１式と大木６式の深鉢Ａ類が出土している。６の文様はすべて半裁竹管の腹部分による沈線である。口縁部には指頭押圧による円形の凹文があり、頸部区画には三角形の印刻が見られる。

Ａ捨場出土土器・・・Ａ捨場は遺跡北側の台地東側の平坦部に存在し、埋設土器群を伴う円筒下層ｄ１～ｄ２式の遺物捨場と考えられる。深鉢Ａ類（５）・Ｂ類（17）・深鉢Ｆ類（７～16・18）深鉢・Ｇ類（４・６）が出土している。深鉢Ｆ類は口縁部の文様施文技法から大きく沈線文主体のもの（５・７・11・15・16）と細粘土紐貼付のもの（８・９・14・18）の２種に分類される。時期的には５が大木７ａ式並行と見られる他は大木６式の範疇で捉えられるものである。

Ｂ捨場出土土器・・・Ｂ捨場は遺跡北側台地の北斜面に展開する。円筒下層ａ式～上層ａ式までの捨場である。３～７は異系統土器である。深鉢Ａ類（６）・Ｂ類（３）・Ｃ類（７）・Ｆ類（５）が出土している。３は時期のはっきりしないものであるが、大平遺跡出土例等から考えて、山形県吹浦遺跡

第Ⅳ群土器の仲間と捉えている。７の口縁部文様は断面の丸い棒状工具を使用し、梯子状に文様を展開している。３～６は大木６式並行、７は大木７ａ式並行であると考えられる。

Ｃ捨場出土土器・・・Ｃ捨場は遺跡北側台地南西斜面に展開する、円筒下層ｃ式～上層ａ式にかけての捨場である。深鉢Ａ類（３・５）・Ｂ類（４・６・７・８・10・24・25・28）・Ｄ類（２）・Ｅ類（11・14・30）・Ｆ類（９・12・13・15～19）・浅鉢（26・27・29）が出土している。在地系土器群は円筒下層ｃ・ｄ式主体であるが、最も出土量が多いのは下層ｄ１式である。下層ｄ２式・上層ａ式は少量である。異系統土器は大木６式～７式相当のものと朝日下層～新保式相当のものが出土している。３～９・13・15～19・24～29は大木６～７ａ式に、10～12・14は朝日下層式に、30は新保式に相当すると考えられる。30は半隆起線文による文様が横位に展開され、胴部には結節が縦位に回転されている。頸部の区画は半隆起線文による３本の沈線と円形竹管状工具による斜め下からの刺突による。

笹ノ沢（３）遺跡（八戸市）

第６号竪穴住居跡・・・炉体土器によって上層ａ式の遺構と考えられる。３は深鉢Ｇ類に分類される。やや膨らみを帯びた胴部をもち、底部付近がやや張り出している。口縁部区画帯から胴部上半部にかけては隆帯による三角形区画の内側を縄の側面圧痕により充填している。表現方法は異なるが、畑内遺跡53・71号土坑出土土器の文様構成に類似する。大木７ａ式もしくは五領ヶ台式の影響と考えられる。

第18号土坑・・・２はやや口縁部のすぼまる深鉢Ａに分類されるか。口縁部はすべて縄の側面圧痕により文様が構成されているが、一番下位にはＹ字状の垂下文様が連続して施文されている。第６号住居跡と同様大木７ａ式の影響下に製作されたものと思われる。

第134号土坑・・・覆土中より深鉢Ｂ類が出土している。１は口縁部区画隆帯からさらに下位に逆Ｖ字状に隆帯が垂下している。大木７ａ式の影響と考えられる。

第１号捨場・・・半裁竹管の腹を使用した沈線を連弧状に施文している。第18号土坑の２と類似する文様構成であると思われる。

牛ヶ沢（４）遺跡（八戸市）

第57号住居跡から浅鉢？形土器が出土している。口縁直下の連弧状隆線に沿って縄の側面圧痕が施される。大木７式に相当すると思われる。

蟹沢遺跡（八戸市）

Ｎｏ３トレンチから円筒下層ｄ１式土器と大木６式の浅鉢形土器が出土している。文様は細粘土紐の貼付と、俵状の貼付である。

蟹沢（２）遺跡（八戸市）

大木６式の影響を受けた深鉢Ｂ２類の土器埋設遺構、遺構外からは円筒下層ｄ１式土器・大木６～７ａ式土器が出土している。大木式は深鉢Ｆ類を主体とし、深鉢Ａ類・Ｄ類等も存在している。ここでも文様には半裁竹管の背・腹を使用した沈線を施文するものと細粘土紐を貼り付けるものの２種がある。また、沈線文を主体とするものには、３や17～26の様に三角形の印刻を伴うものがある。

館野遺跡（福地村）

第23号土坑・・・覆土中から円筒上層ａ式土器の破片と異系統土器が出土している。１は深鉢Ｂ類であり、隆帯断面形状等から製作技法は円筒上層ａ式の範疇で捉えられるが、半裁竹管状工具による

刺突文・蛇行しながら垂下する隆帯など大木７ａ式の影響を思わせる個体である。

第51号土坑・・・覆土中から円筒上層ａ式（深鉢Ｂ類）と一緒に異系統土器が出土している。３は深鉢Ａ類である。口縁部から蛇行しながら垂下する隆帯が貼り付けられており、第23号土坑出土の１と同様大木７ａ式の影響下に製作されたものと考えられる。

熊ヶ平遺跡（川内町）

第11号竪穴住居跡・・・円筒下層ｄ式土器に混じて深鉢Ｇ類が出土している。器形こそ大木６式の影響下にあるが、文様構成・製作技術等は円筒下層ｄ式の範疇である。

石持納屋遺跡（東通村）

遺構内からの異系統土器の出土はないが、出土土器は概ね円筒下層ｄ１～ｄ２式に相当する。遺構外から大木６式の影響を受けた深鉢Ａ類が出土している。口縁部は渦巻き文を中心とし、円圏文と鋸歯状文によって文様が構成されている。工具は半裁竹管状工具の背である。胴部には結束第２種羽状縄文が縦方向に施文されている。

横内（２）遺跡（青森市）

第８号土坑・・・円筒下層ｄ２式土器と大木式土器の影響を受けた深鉢Ｆ類が出土している。

小牧野遺跡（青森市）

遺構外から真脇式（十三菩提式）と考えられる土器片が出土している。地文縄文上に結節浮線文が施文されている。

三内丸山遺跡（青森市）

第６鉄塔地区第Ⅲ層からは円筒下層ａ式土器と異系統土器が出土している。２～４・６～11がそれにあたるが、半裁竹管状工具の腹部を使用した沈線と刺突を主文様としており、一部に隆帯も見られる。おそらく大木６～７式の影響を受けたと思われる。同様の土器は福地村館野遺跡第23号土坑に見られる。

その他・・・出土地は未発表であるが、朝日下層式に類似する破片が出土している。結節浮線文と鋸歯状印刻文がみられ、器形は深鉢Ｅ類と考えられる。

稲山遺跡（青森市）

遺構外から出土した土器の主体は円筒下層ｄ１～ｄ２式土器であり、それらと一緒に異系統土器（４～９）が出土している。４・５は半裁竹管の腹による沈線文により文様が展開している。畑内遺跡Ｃ捨場出土土器８に類例が見られる。その他は細粘土紐貼付・結節浮線文を主文様としている。７～９は深鉢Ａ類？と見られる。写真を見る限りでは、胎土に繊維が混入していると思われる。文様構成は朝日下層式的であるが、器形・胎土は円筒下層式の影響を受けていると思われる。

桜峯（１）遺跡（青森市）

Ｃ区第６号竪穴住居跡・・・円筒下層ｄ２式土器と、器形に大木６式の影響を受けた異系統土器（深鉢Ｆ類）が出土している（３）。

Ｃ区遺物集中地点・・・出土土器の主体は円筒下層ｄ２式土器である。異系統土器は朝日下層式に類似する土器（９～11）、深鉢Ｆ２類（12）が出土している。９～11は結節浮線文・細粘土紐貼付・半隆起線文など北陸地方の影響が見られる。12は畑内遺跡Ｃ捨場出土土器14と同様のものと考えられる。

鳴沢遺跡（鰺ヶ沢町）

遺構外から円筒下層ｄ１～ｄ２式土器とともに深鉢Ｆ１類とＧ類が出土している。双方ともに器形は大木６式の影響を受けるが、文様は円筒下層ｄ式のものである。

太師森遺跡（平賀町）

遺構外出土の土器は円筒下層ｄ２式～上層ａ式土器を主体とする。異系統土器は深鉢Ｅ類が出土している。口縁部には円形のボタン状貼り付けを中心に半裁竹管による沈線が縦位に連続して施文されている。口縁部の屈曲部から下位には地文の横位結束第１種羽状縄文の上に半裁竹管の腹を使用した沈線が、２本１単位で間隔をあけて縦位に施される。沈線の下位には区画として横位に３本の沈線が施される。五領ヶ台式の影響を受けた土器と考えられる。

板留（２）遺跡（黒石市）

Ａ区遺構外・・・円筒下層ｄ式土器と深鉢Ｃ類・深鉢Ｅ類？が出土している。４は深鉢Ｃ類である。口唇部には１箇所に装飾突起を持ち、口縁部には細粘土紐貼付による梯子状の文様が施文されている。胴部は両端巻止めのＲＬを縦位に帯状施文している。大木６式に比定される。

Ｃ区遺構外・・・円筒下層ｄ式土器と深鉢Ｆ類？（２）が出土している。２は深鉢Ｆ類？である。口縁部は波状を呈し、波頂部には断面半円状の突起が施される。文様は細粘土紐貼付によるものであり、梯子状の文様を構成している。胴部は結束第１種羽状縄文が縦位に施文されている。

四戸橋遺跡（碇ヶ関村）

遺構外から出土した土器は円筒下層ｄ１～ｄ２式土器を主体としている。その中に朝日下層式（３～５）･大木７ａ式（６）に類似する土器が出土している。３～５は深鉢Ｅ類であり、半裁竹管による集合沈線が施文されている。６の器形ははっきりしないが、⊃⊂状に貼り付けられた隆帯上に棒状工具による刻みが施されている。畑内遺跡Ｂ捨場出土土器７に類例が求められ、大木７ａ式の影響と考えられる。

大平遺跡（大鰐町）

遺構外から円筒下層ｄ１～ｄ２式土器、大木６～７ａ式土器が出土している。４は深鉢Ｆ３類である。鋸歯状印刻文・縄文地に結節浮線文を施文するなど、大木式・十三菩提式の影響が見られる。５は深鉢Ｂ２類である。一見して円筒下層ｂ式等に見えるが、報告にもあるとおり、吹浦遺跡第Ⅳ群土器に類似するものである。県内では畑内遺跡Ｂ捨場から類似した資料が１点出土している。６・７は半裁竹管による沈線文を口縁部に施文しているものである。６は集合沈線と交互刺突文が見られ、波状突起に合わせて口縁部文様帯を縦位に区画していることから円筒上層式と大木７式の折衷土器と考えられる。７は円筒下層ｄ１式の文様構成を沈線を用いて表現したものである。

餅ノ沢遺跡（鰺ヶ沢町）

第２号捨場・・・円筒下層ｄ１～ｄ２式を主体とし上層ａ式まで出土している。異系統土器は深鉢Ｃ・Ｇ類が出土している。３は深鉢Ｆ１類である。文様施文に関しては円筒下層ｄ２式土器と同様である。４は深鉢Ｃ類である。口縁部には沈線による交叉状の文様が施文されている。大木７ａ式の影響と見られる。５は深鉢Ｇ類である。器形と口縁部の装飾突起に大木式の影響が見られる。胴部は多軸絡条体と結束第２種の縦位回転である。

津山遺跡（深浦町）

第39号土坑・・・円筒上層ａ式土器と大木７式土器が出土している。２は浅鉢である。４単位の波

状口縁を持ち、波頂部には二股の突起を持つ。波頂部直下には俵状の貼付を持ち、そこからハの字状に半裁竹管による沈線が施文されている。口縁直下には縄の側面圧痕が施される。３は広口壺である。全体に無文であり、頸部には２本の隆帯と４単位の橋状把手を持つ。底部には４箇所に脚が付く。２・３は器形等から大木７ａ式に相当する。

中の平遺跡（三厩村）

遺構外から深鉢Ｆ類が出土している。口縁部は隆帯により横位に区画され、さらに４単位？に縦位区画もされている。胴部には木目状撚糸文が縦位に施文されている。

石神遺跡（森田村）

遺構外から深鉢Ａ・Ｆ・Ｇ類が出土している。１～３は大木式の影響を器形に受けた円筒下層ｄ２式に相当すると思われる。４は円筒上層ａ式に相当する。口縁部区画隆帯からさらに下位に隆帯が垂下している。５は深鉢Ｆ１類である。口縁部には半裁竹管による沈線が施文され、橋状把手も見られる。胴部には木目状撚糸文が縦位に施文されている。６は実測図では詳細不明であるが、口縁部に半裁竹管による沈線文が鋸歯状に施文されていると思われる。胴部はＬＲの縦回転か。県内では畑内遺跡Ａ捨場出土の５に類例がある。

まとめと若干の問題提起

以上に見てきたように、県内では大木６～７ａ式に相当する、またはその影響を受けた土器と朝日下層式・新保式土器に相当する土器、またはその影響を受けた土器が出土していることがわかった。最も多く見られるのは大木６式に相当する深鉢Ｆ類であり、円筒下層式との折衷土器も多数見られる。器形の面では、深鉢Ａ・Ｂ類が円筒土器系統、深鉢Ｃ・Ｄ・Ｆ類・浅鉢Ａ類が大木式系統、深鉢Ｅ類が北陸系統というように大きく分類できそうである。しかし、各器形においては深鉢Ｃ・Ｆ類にみられるように文様の施文技法を他の土器様式のものに置き換えているもの等もあり、一概には言えない。また、時期による器形のセット関係も重要になるが、今後大木６～７式にかけての変遷を再度検討した上で論じてみたい。分布の面では南部・下北地域には大木式系の異系統土器群が多く、津軽地域には朝日下層式系を中心とする北陸系の異系統土器群が多い。特に結節浮線文が施文される土器は今のところ南部・下北地方には見られない。しかし北陸地方の影響が南部・下北地域に皆無であるかといわれればそうではなく、畑内遺跡53・71号土坑出土土器やＣ捨場出土土器10・11・30等のように器形・文様のどれかに北陸地方の影響が見られるものも存在する。

このように、縄文時代前期～中期初頭の青森県下には他地域の影響を受けた遺物が少なからず存在することがわかったが、今後問題になるのは以下の点である。

１．円筒土器様式と他地域の土器様式との時間的な並行関係の問題

まずは円筒土器様式の編年の確立が急務である。現行の編年は山内清男の示したものを基に、江坂輝彌・村越潔・鈴木克彦・三宅徹也らが主に津軽地方の資料を使ってそれぞれに作ったものである。各編年に若干の相違が見られるのは研究史に明らかなところである。しかし近年、青森県南部や秋田・岩手両県の北部地方の資料が増加するにつれて従来の編年枠では捉えきれない資料が増えてきている。すなわち報告書で円筒下層ｄ１式という同じ名前が付いている土器であっても、南郷村で出土したものと青森市で出土したものでは明らかに様相が異なるのである。これは、同じ土器様式圏内での地域差で捉えられるのか、土器型式の誤認であるのか、今後の研究で明らかにしなければならない。同じ

ことは大木式土器様式にも言えることである。特に各土器様式同士が接する地域については双方の形質を持ち合わせたいわゆる折衷土器が多数存在している可能性がある。今後はそのような土器群を俎上に挙げ、まず時間的な並行関係を探り、次には土器様式間の影響の及ぼし方を探ることで具体的な交流のあり方や地域間の関係等にも迫っていく必要がある。

２．各土器様式における製作技法の追究

上記の問題を検討するためには、まず土器そのものについてさらに研究を重ねる必要がある。そのためには、遺跡から出土した土器の型式を明らかにするのではなく、遺跡ごとの土器の製作技術を明らかにするることが重要である。特に円筒下層式土器では下層ｃ式～上層ｂ式までの変遷過程がはっきりしない部分が多い。従来の編年がメルクマールとなる文様の種類に頼ってきたためと考えられる。したがって今後は以下のような項目で土器を観察し、報告書に反映していくべきと考える。

①土器胎土に含まれる混入物の状態。（繊維が入るのか・砂粒が多少・特徴的な鉱物の有無など）
②素材粘土の成形技術（素材粘土の積み上げ・整形方法）
③内面調整の工具の種類と動かし方。
④口唇部の断面形状
⑤土器表面に施文される文様の原体とその動かし方
　・縄文原体であれば山内清男の分類にしたがって記述。
　・器表面に現れている縄文の条と節の寸法。
　・刻み・刺突などに使用される工具の先端形状・断面形状・太さとその動かし方。
　・貼り付け粘土紐の太さや断面形状。
⑥文様区画帯等に使用される隆線（帯）の断面形状や貼り付け方。
⑦土器の器形
⑧口縁部の形状（波状か平縁かなど）

以上の項目で各属性を調査した後、その組み合わせがどのようなものなのかを算出することで、その遺跡の土器群がどのような特徴を持っているのかある程度把握することが可能と考えられる。また、他の遺跡についても同様な手法を繰り返すことで、共通点や相違点を客観的に指摘することが可能になると考えられる。あとは遺構内一括出土遺物などを援用し、同時期性等を検証することで、各遺跡の土器群の編年的な位置づけが定まっていくと考えられる。

ただし、ここで重要になるのは各遺跡ごとに調査を担当する人間が同様な視点で遺物を見れるかどうかである。それを可能にするには用語の問題、形状認識等、クリアしなければならない問題が多数ある。それらについては次回に譲ることにしたい。

以上、先学からはそんなの基本中の基本だとお叱りを受けるようなことを書いてしまったが、その基本が報告書に反映されていないことがままあるのが現状であると思う。今後の反省材料とし、研究を重ねていきたい。

『引用・参考文献』

青森県教育委員会	1975	中の平遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
青森県教育委員会	1980	板留（２）遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第59集
青森県教育委員会	1980	大平遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第52集
青森県教育委員会	1992	鳴沢遺跡・鶴喰遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第142集
青森県教育委員会	1994	畑内遺跡Ⅰ	青森県埋蔵文化財調査報告書第161集
青森県教育委員会	1995	畑内遺跡Ⅱ	青森県埋蔵文化財調査報告書第178集
青森県教育委員会	1995	熊ヶ平遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第180集
青森県教育委員会	1996	畑内遺跡Ⅲ	青森県埋蔵文化財調査報告書第187集
青森県教育委員会	1996	三内丸山遺跡Ⅵ	青森県埋蔵文化財調査報告書第205集
青森県教育委員会	1997	畑内遺跡Ⅳ	青森県埋蔵文化財調査報告書第211集
青森県教育委員会	1997	津山遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第221集
青森県教育委員会	1997	三内丸山遺跡Ⅷ	青森県埋蔵文化財調査報告書第230集
青森県教育委員会	1999	畑内遺跡Ⅴ	青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
青森県教育委員会	2000	畑内遺跡Ⅵ	青森県埋蔵文化財調査報告書第276集
青森県教育委員会	2000	餅ノ沢遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第278集
青森県教育委員会	2001	蟹沢（２）遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第292集
青森県教育委員会	2001	畑内遺跡Ⅶ	青森県埋蔵文化財調査報告書第308集
青森県教育委員会	2001	笹ノ沢（２）・（３）遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第305集
青森市教育委員会	1995	横内遺跡・横内（２）遺跡	青森市埋蔵文化財調査報告書第24集
青森市教育委員会	1998	桜峯（１）遺跡	青森市埋蔵文化財調査報告書第36集
青森市教育委員会	1998	小牧野遺跡Ⅲ	青森市埋蔵文化財調査報告書第40集
青森市教育委員会	2001	稲山遺跡Ⅰ	青森市埋蔵文化財調査報告書第56集
碇ヶ関村教育委員会	1998	四戸橋遺跡Ⅱ	碇ヶ関村文化財調査報告書第２集
能都町教委区委員会	1986	真脇遺跡	
八戸市教育委員会	1999	八戸市内遺跡発掘調査報告書11（蟹沢遺跡）	八戸市埋蔵文化財調査報告書第77集
八戸市教育委員会	2001	牛ヶ沢（４）遺跡Ⅱ	八戸市埋蔵文化財調査報告書第89集
平賀町教育委員会	1983	太師森遺跡	平賀町文化財調査報告書第14集
東通村教育委員会	1985	石持納屋遺跡発掘調査報告書	
石岡憲男	1999	円筒下層式	縄文時代10号
江坂輝彌編	1970	石神遺跡	
角張淳一	1999	石器研究の感想	東京考古　16
金子直行	1999	縄文前期末土器群の関係性－十三菩提式土器と集合沈線文土器群の関係を中心として－　縄文土器論集	
白鳥良一	1989	前期大木式土器様式	縄文土器大観１
鈴木克彦	1999	円筒上層式	縄文時代10号
丹羽茂	1989	中期大木式土器様式	縄文土器大観１
東通村教育委員会	2001	東通村史－通史編－	
三宅徹也	1989	円筒下層式土器様式	縄文土器大観１
三宅徹也	1989	円筒上層式土器様式	縄文土器大観１

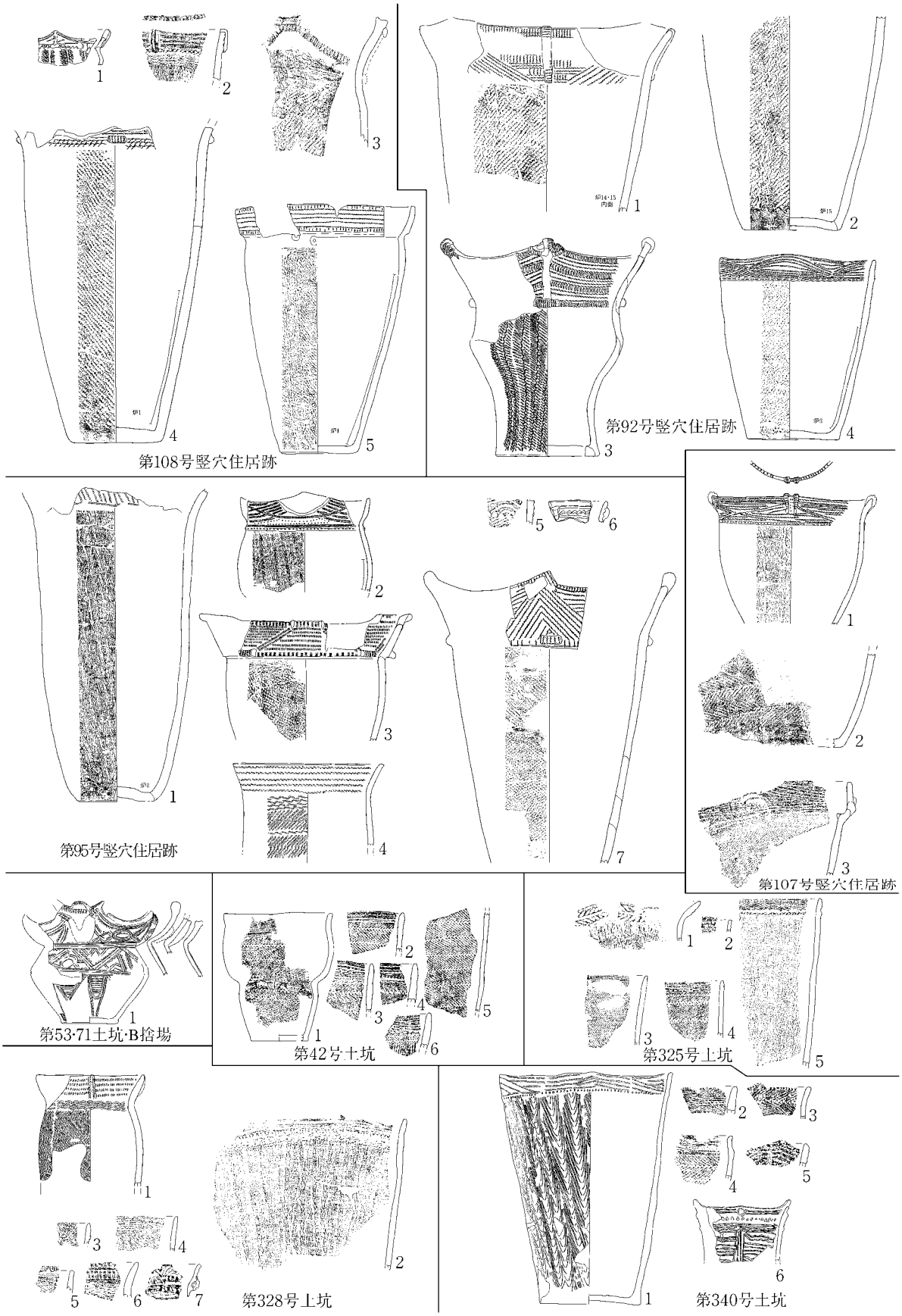


図１　畑内遺跡出土土器①

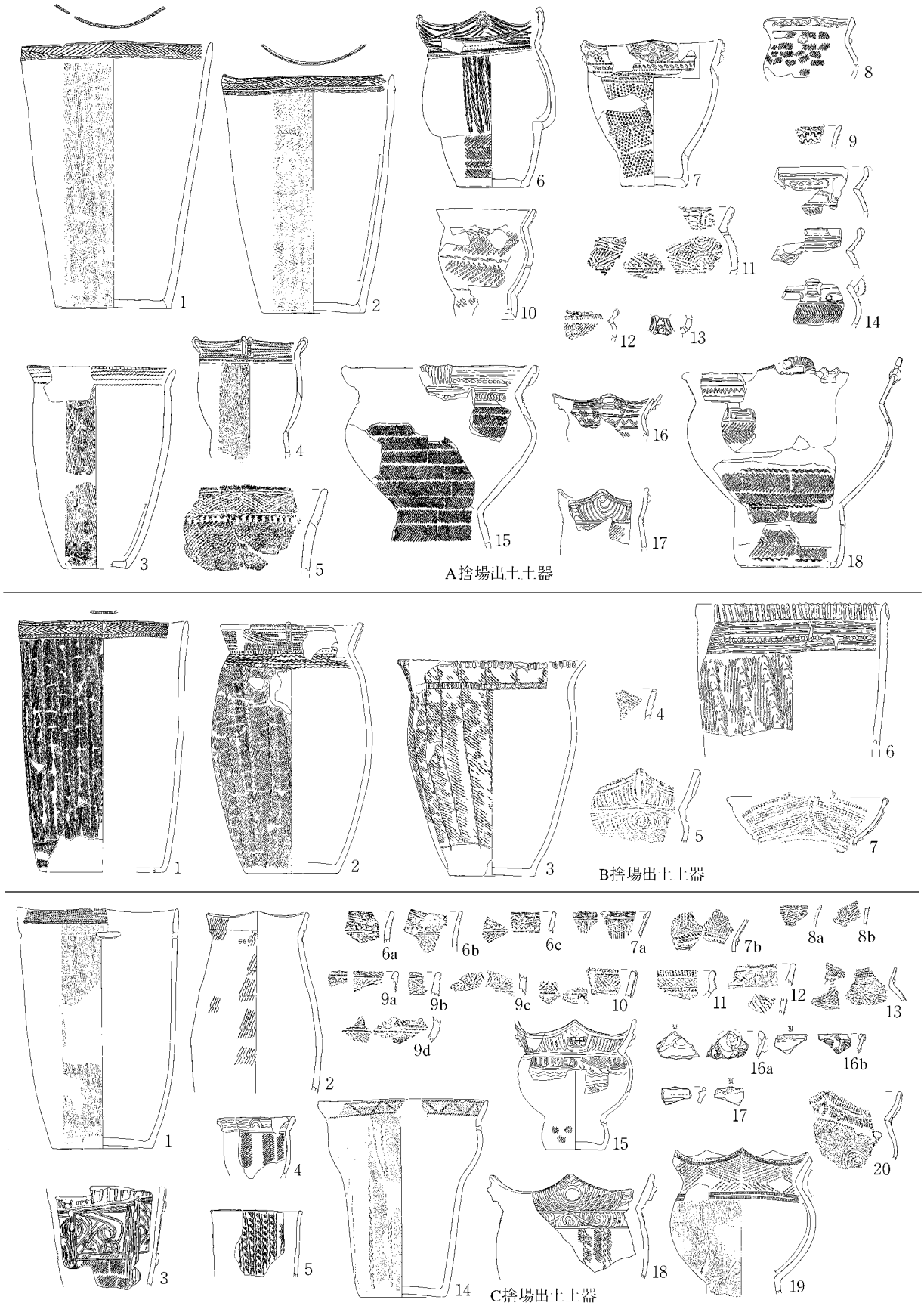


図２　畑内遺跡出土土器②

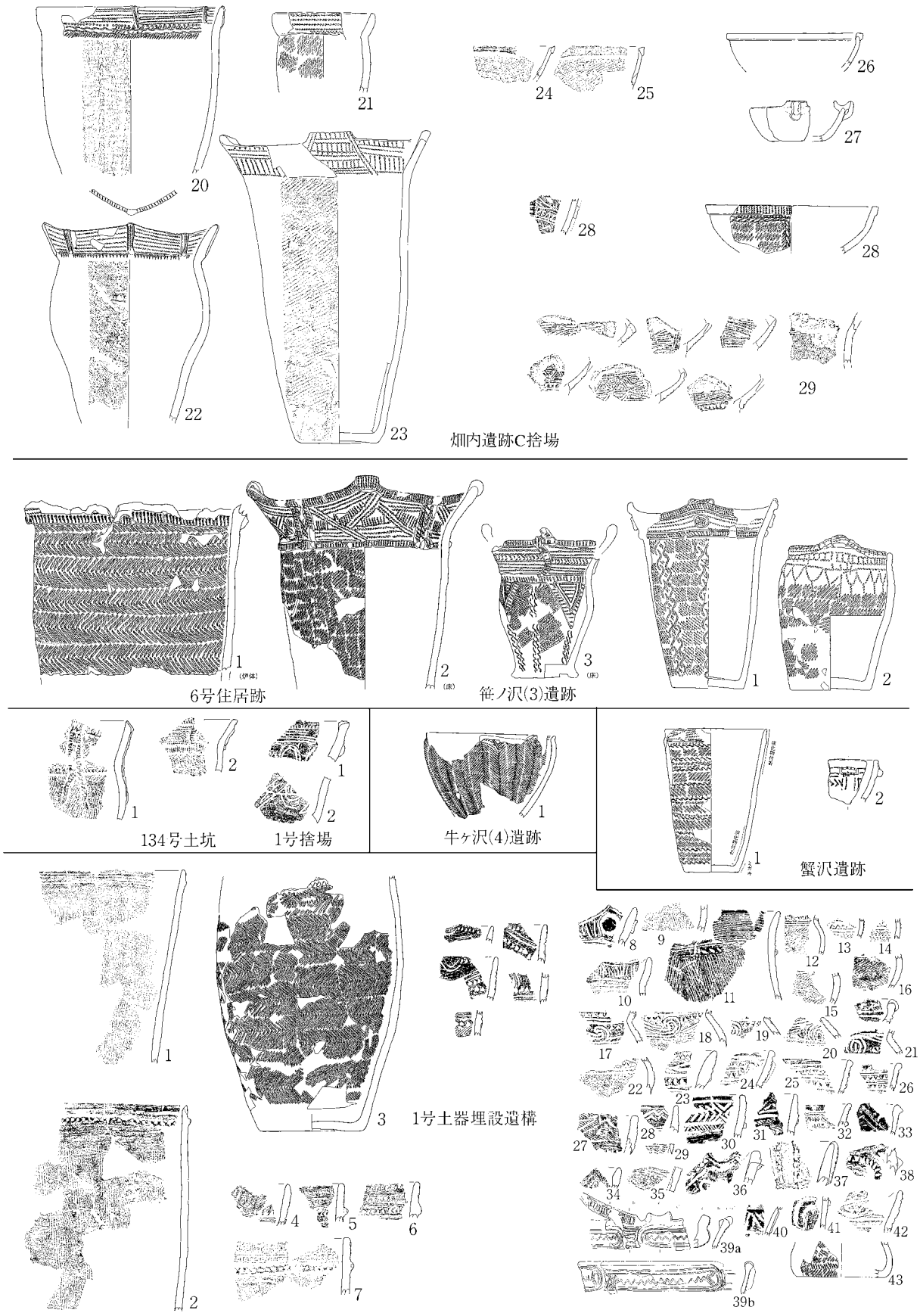


図３　畑内遺跡出土土器③・その他の遺跡出土土器①

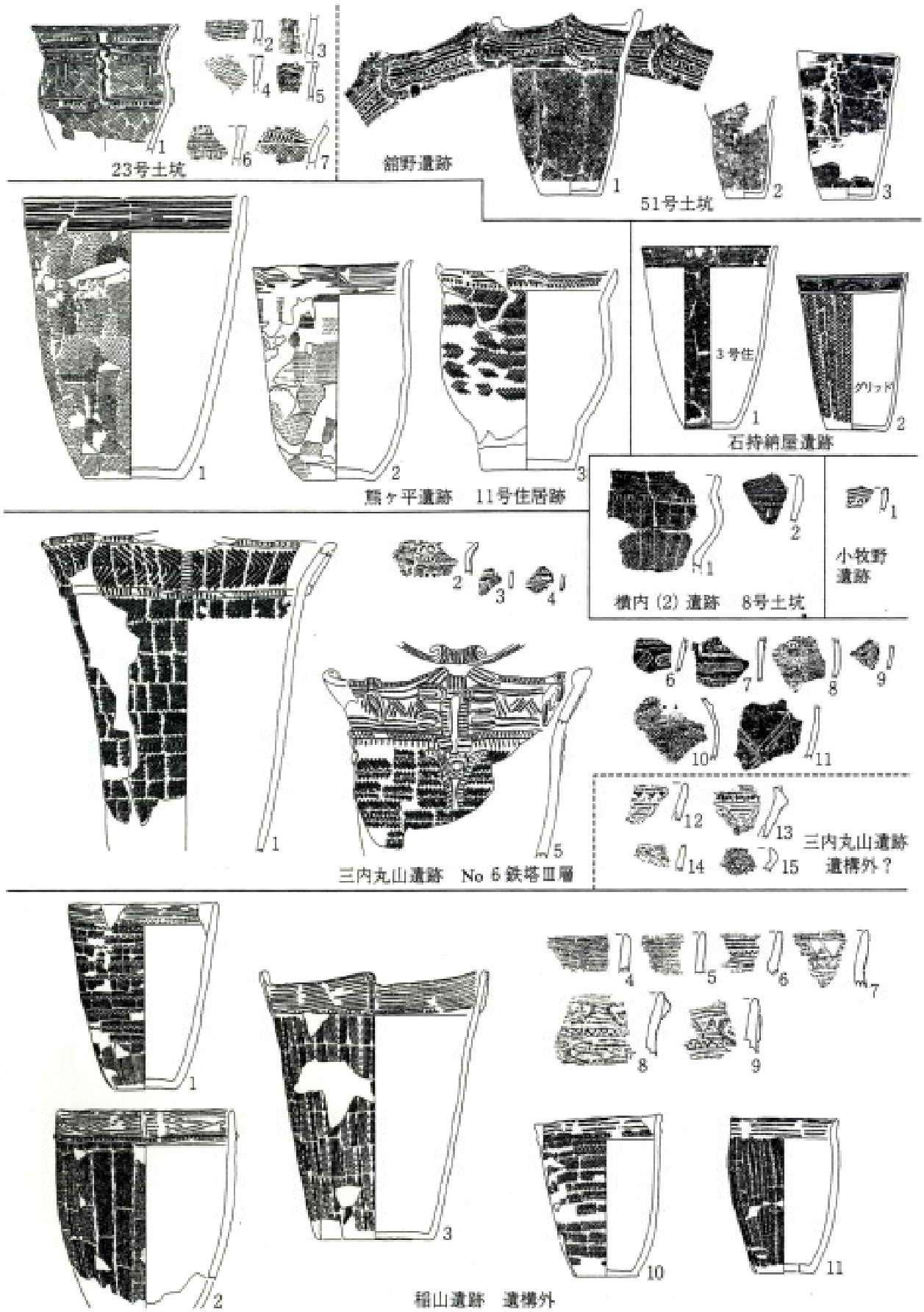


図４　その他の遺跡出土土器②

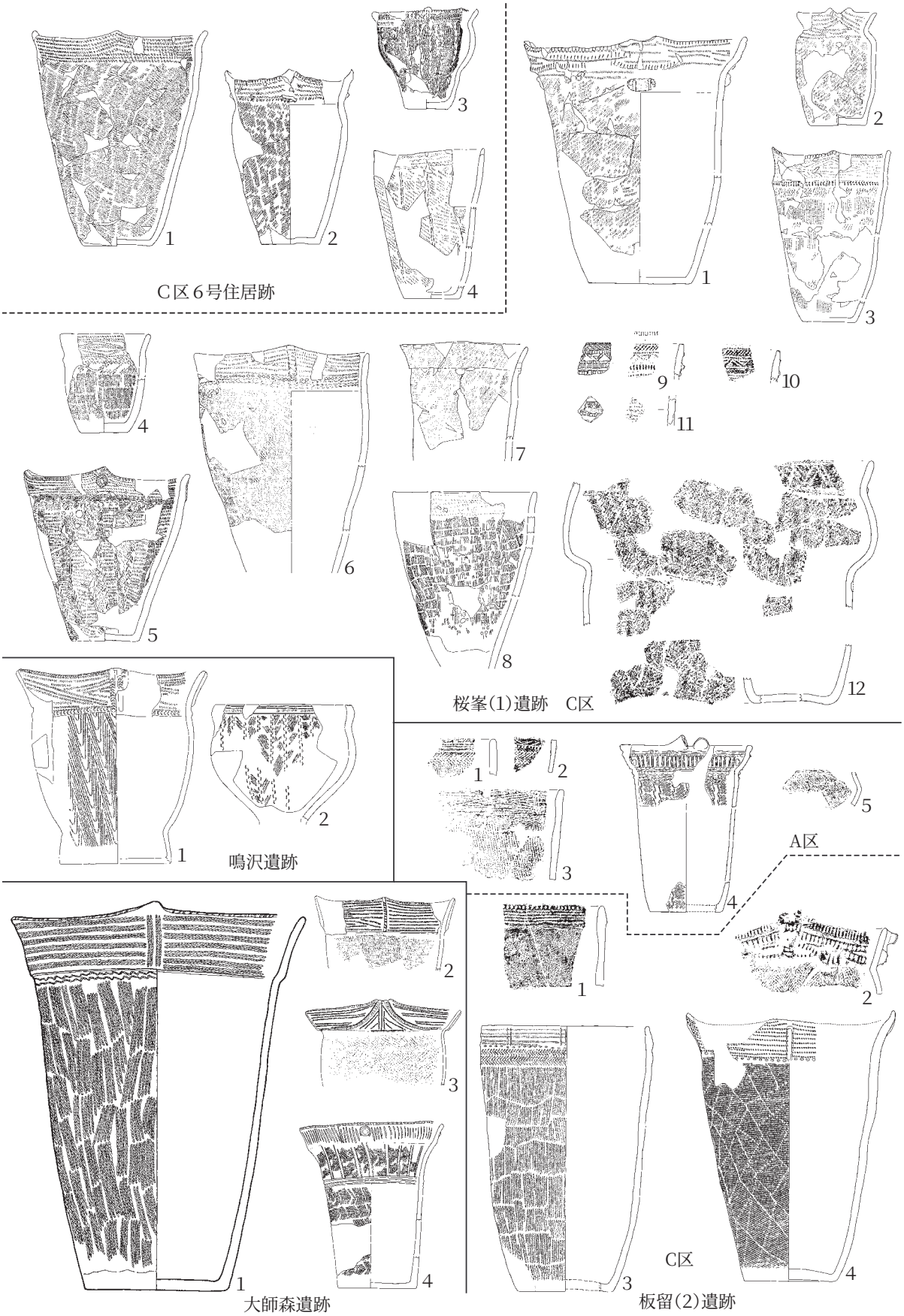


図５　その他の遺跡出土土器③

図６　その他の遺跡出土土器④

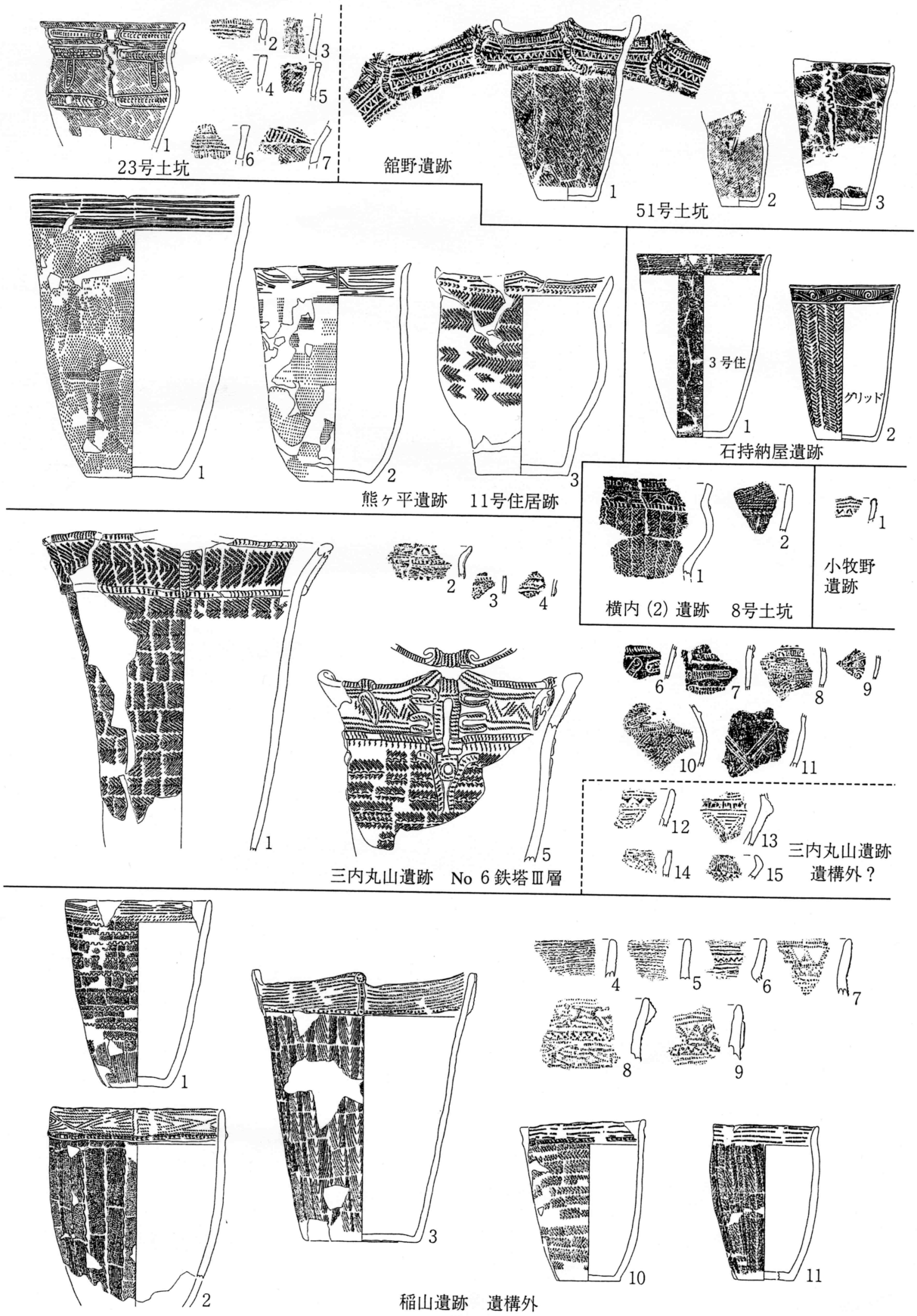
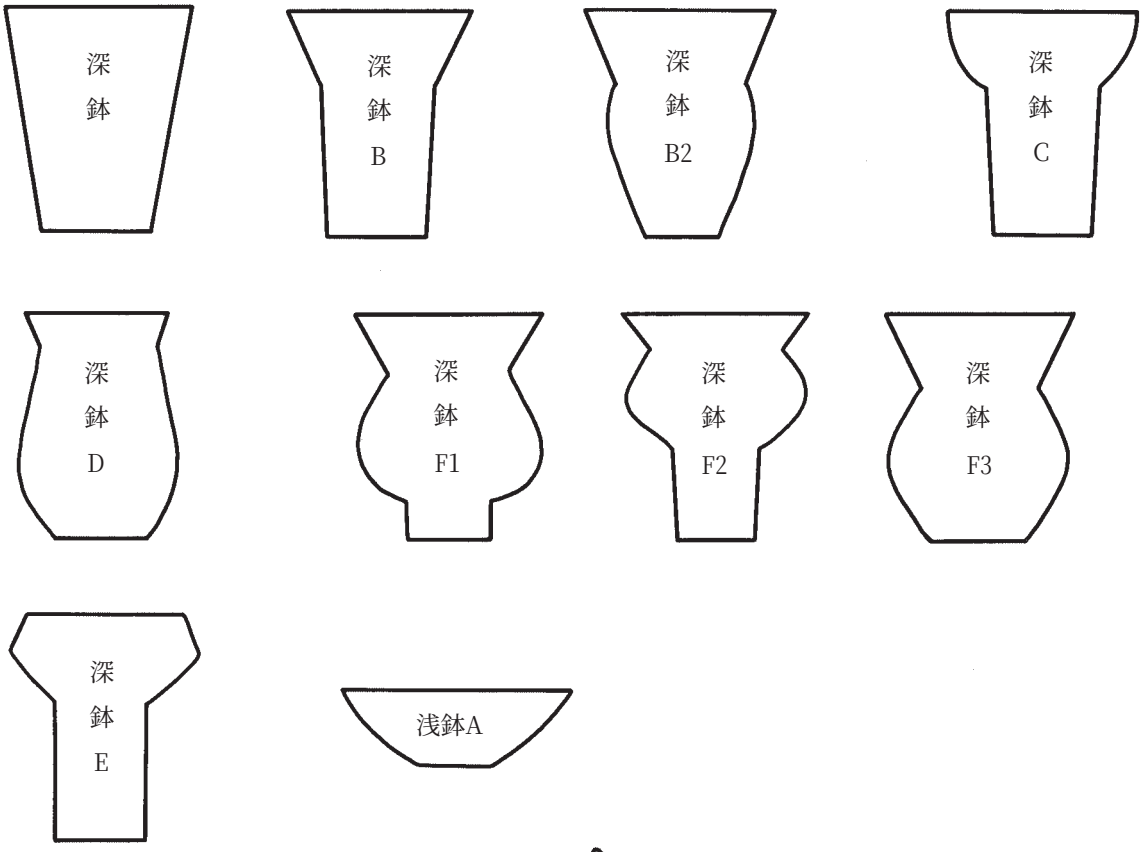


図４　その他の遺跡出土土器②



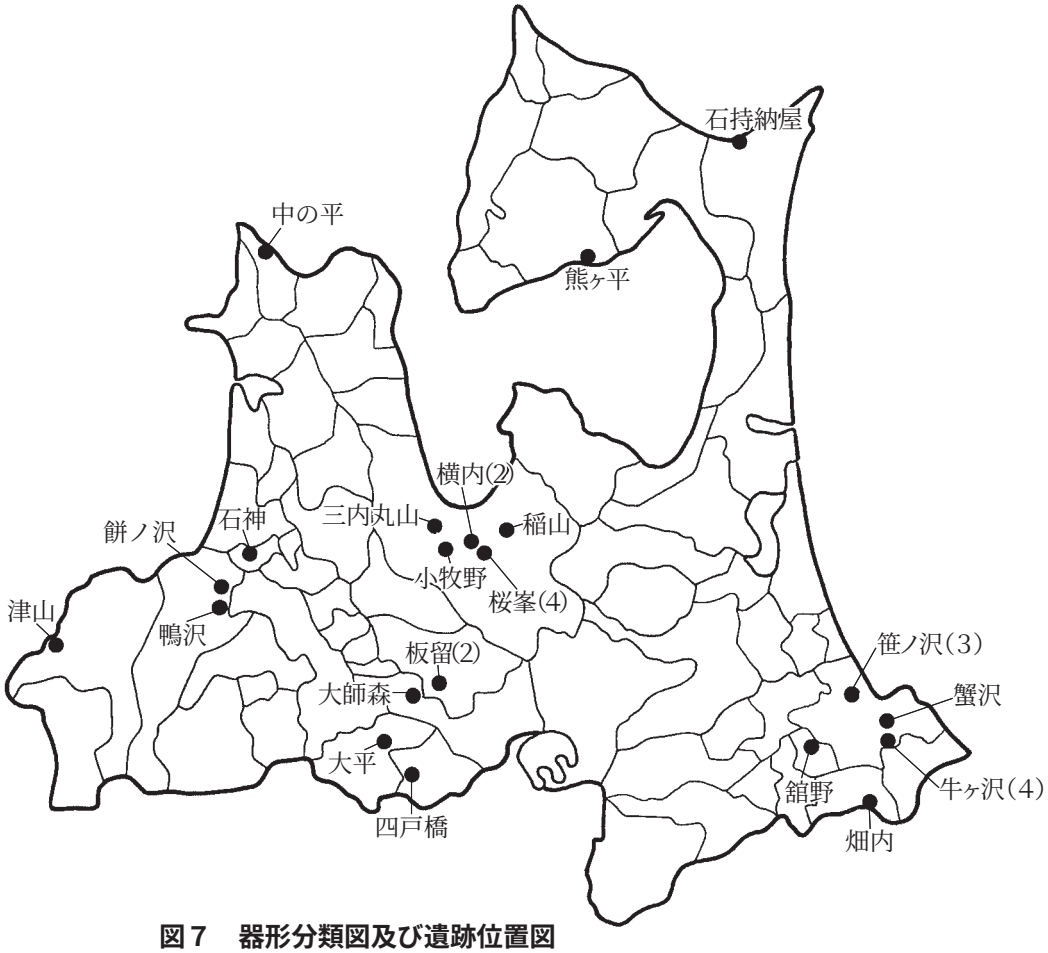


図７　器形分類図及び遺跡位置図

「最花式土器」雑感

小笠原　雅　行

１　はじめに

「最花式」土器は、実体が不明な型式だと言われながら使用され続けてきた名称である（後述）。出土例が比較的多いと思われるのに、「中ノ平Ⅲ式」とともに併記される編年表の中でも数少ない型式である（青森県教委1990）。そこで、研究史や近年の調査から、これまで成果や各人のとらえ方をまとめ、この型式を簡単に振り返ってみることにする。

２　研究史

最花式土器は江坂輝弥氏によって初めてその内容が公表された。氏は『歴史評論』において編年表の形で最花式を挙げ（江坂1951）、さらに『日本考古学講座』で設定の根拠を示した（江坂1956）。これはむつ市最花貝塚の出土資料を基にしたものであるらしいが、公表されることはなく、実際に例示されたのは森田村石神遺跡の資料が最初である（江坂1970）。それによると、最花式（円筒上層ｆ式とも呼称）は３類に分類され、大木９式に併行するものとされた。また、江坂氏の当該型式の設定に先立つ1939年に発表された天間林村二ツ森貝塚の資料を用いて、角田文衛氏は「榎林式」を設定した（角田1939）が、江坂氏は最花式がこれと併行するものとした。その後、村越潔氏は円筒土器を整理・再分類し、江坂氏が設定した最花式１類を円筒上層ｅ式とし、３類を標準的な最花式土器とした（村越1974）。また、この中で試案としながら、榎林式が大木８ｂ式に、最花式が９式に併行するとの考えを示した。

それ以降、該土器型式について積極的に発言してきたのは鈴木克彦氏である。氏は三厩村中の平遺跡の調査の後、型式学的な観点から榎林式と最花式をそれぞれ２細分した（鈴木1976）。この中で良好な資料と見られる川内町野家遺跡出土例を組み入れた上で設定された中の平Ⅲ式は、それまで不充分だった最花式の資料を充足させるとともに、具体的に知る資料となった。その一方で、問題となるのが榎林Ⅱ式と中の平Ⅱ式の型式としての独立性である。鈴木氏も述べているとおり両者は「近似する」ため、細分が可能か否か不明確な状況にあった。それを解消するため、出土例が増加した近年「層位事例」を基に当センター『研究紀要』第３号において、細々分を示唆しつつ３分類している（鈴木1998）。この中で中の平２式は前後型式の間を埋めるものとされているが、内容的には榎林式に近いものと考えられる。氏はさらに、中の平２式及び３式は大木９式と併行するものとされている。なお、この論考の中で大きな比重を占めている遺跡の一つに八戸市西長根遺跡がある。第４号竪穴住居跡からは床面から少なくとも第４層までは人為的に埋め戻されているとされ、それと共に多量の土器が出土し、大木９式の良好な資料である。蛇足であるが、報告書の中で小笠原善範氏は住居跡出土土器の層位差から、鈴木氏の中の平Ⅱ式を大木８ｂ式から９式にかけてのものとしているが、鈴木氏が細分の可能性を指摘した榎林式については細分できなかったとしている（小笠原1994）。鈴木氏の中の平Ⅱ式も含め榎林式の細分が妥当なものであるか、資料の蓄積を待つ必要があるとみられる。

また、柳沢清一氏は榎林式から最花式の変遷について触れ、江坂氏が３類とした口縁部に幅広の無

文帯をもつ広口壺形土器を榎林式としてとらえた（柳沢1991）が、多分に主観的な判断によるものと言わざるを得ない。

しかし全体的に見ると、永らく実体が不明とされた（鈴木前掲、小笠原前掲）最花式土器は、石神遺跡での江坂氏の資料提示や鈴木氏の中の平Ⅲ式の提唱によってほぼ共通認識が得られているといってよいだろう。最花式は大木９式と併行関係にあることは、すでに多くの先学によって指摘されてきた。当然のことながら大木式の影響は南の地域ほど色濃く反映し、出土比率も高くなる。時間差か地域差かという点も十分考慮する必要があり、類例が増加している現在、各地域での時間軸の設定作業が必要であろう。

３　土器の供伴関係について

共伴関係が明確なものとして、青森市三内沢部遺跡第22号床面出土土器、今別町山崎遺跡第８号住居跡床面出土土器、階上町野場（５）遺跡第12号住居跡炉・床面出土土器、同第15号住居跡炉・床直出土土器、六ヶ所村富ノ沢（２）遺跡第70号住居跡床面出土土器、同第102号住居跡床面出土土器、同第212号住居跡床面・床直出土土器、同第223号住居跡床面・床直出土土器、西長根遺跡第４号住居跡床面・堆積土出土土器などがある（第１・２図）。

青森県内において、最花式土器と榎林式との層位的な出土例はほとんどない。強いて挙げれば、八戸市西長根遺跡第10号住居跡第１～３層（最花式）、同第４層以下（榎林式）がある程度である。これも下位の榎林式土器の出土量に比べれば、最花式土器の出土は少なく、安定した資料点数が望まれるところである。

４　土器の属性について

あらためて記すまでもないのかもしれないが、最花式土器の個々の属性をごく簡単にではあるが触れておく。

（１）器種：深鉢が圧倒的に多い。中・小型では頸部付近で内傾する広口壺形も目立つ。器種組成はこの両者で大半を占める。ごくわずかに鉢形や浅鉢形、注口土器が加わる。県内では未検出であるが、秋田県鹿角市天戸森遺跡では台付深鉢形土器があり、県内でも今後検出される可能性があるとみられる。

（２）器形：深鉢では、最大径が頸部から胴部中央付近までにあり底部が小さくすぼまったような器形がほとんどである。平縁と２～４個の突起からなる波状口縁があり、突起は先端が三角形状のものと丸みを帯びたものがある。また、折り返し口縁も少数ある。口縁部に幅広の無文帯をもつものでは、最大径部から内湾した後、垂直気味ないしは外反して立ち上がるものが多い。また、無文帯をもたないものでは、頸部付近で内湾するだけのものが多い。折り返し口縁をもつものは、頸部の屈曲の度合いが少ない傾向にある。広口壺形土器は、口唇部の形状は深鉢形土器と同様であるが、折り返し口縁は無い。原則として口縁部には幅広の無文帯がある。口縁部は「く」の字状に屈曲するものと、直線的に内傾するものがある。前者では、胴部文様帯が屈曲部の最もすぼまった部分までくる場合と、「く」の字状の下縁から施文される場合がある。そのため、最大径は頸部から胴部上半までのいずれかとなる。中には口縁部の外反度が強く、口唇部に最大径がくるものもある。浅鉢形や注口土器は点数が少ないため、参考程度に記すが、底部から口唇部に直線的に外傾したり、口唇部で内湾したりするよう

である。

（３）文様:口縁部文様は、幅広の無文帯をもつものと縄文が施文されたものがあり、前者は胴下半部まで沈線文が施文されたものに顕著に見られ、後者は縄文のみが施文されたものに圧倒的に多い。器形との関連で言えば、広口壺形土器は前者が圧倒的で、深鉢形土器（折り返し口縁のものも含む）には両者がある。また、前者では鈴木氏（鈴木1998）のいうように、地文施文後に沈線を加えるものと、磨消縄文が施文されるものがあり、磨消縄文が施文されるものは、大木９式土器の影響が強く感じられる(詳細は別項)。馬淵川流域以南とそれ以北では採用される比率によって様相が異なるようである。

まず、無文帯をもつものであるが、無文帯の直下は刺突が巡るものとないものがある。また半円状やリング状の突起がつくものもある。沈線文のモチーフは、縦方向の沈線での区画を基本とし、上部で連結すれば逆U字状となる。これは八戸市西長根遺跡の調査成果の中で小笠原氏が述べているように、最花式土器に層位的に先行する土器群の縦方向のモチーフを踏襲するものと見られるためである。この逆U字状が密になれば逆Ｊ字状が横に連結した文様となり、さらにそれが離れて施文されれば、「ステッキ」状となる。また、縦方向のバリエーションとしては、逆U字状（あるいは縦位）の沈線の上にU字状を合わせたものや、U字状の両上端が渦巻き状となるもの、U字状が連結し波状となったもの、上も閉じて楕円形状になったものなどがある。波状や楕円形状の沈線の内部には、刺突が加わるものもある。地文は単節縄文の縦位回転が圧倒的である。

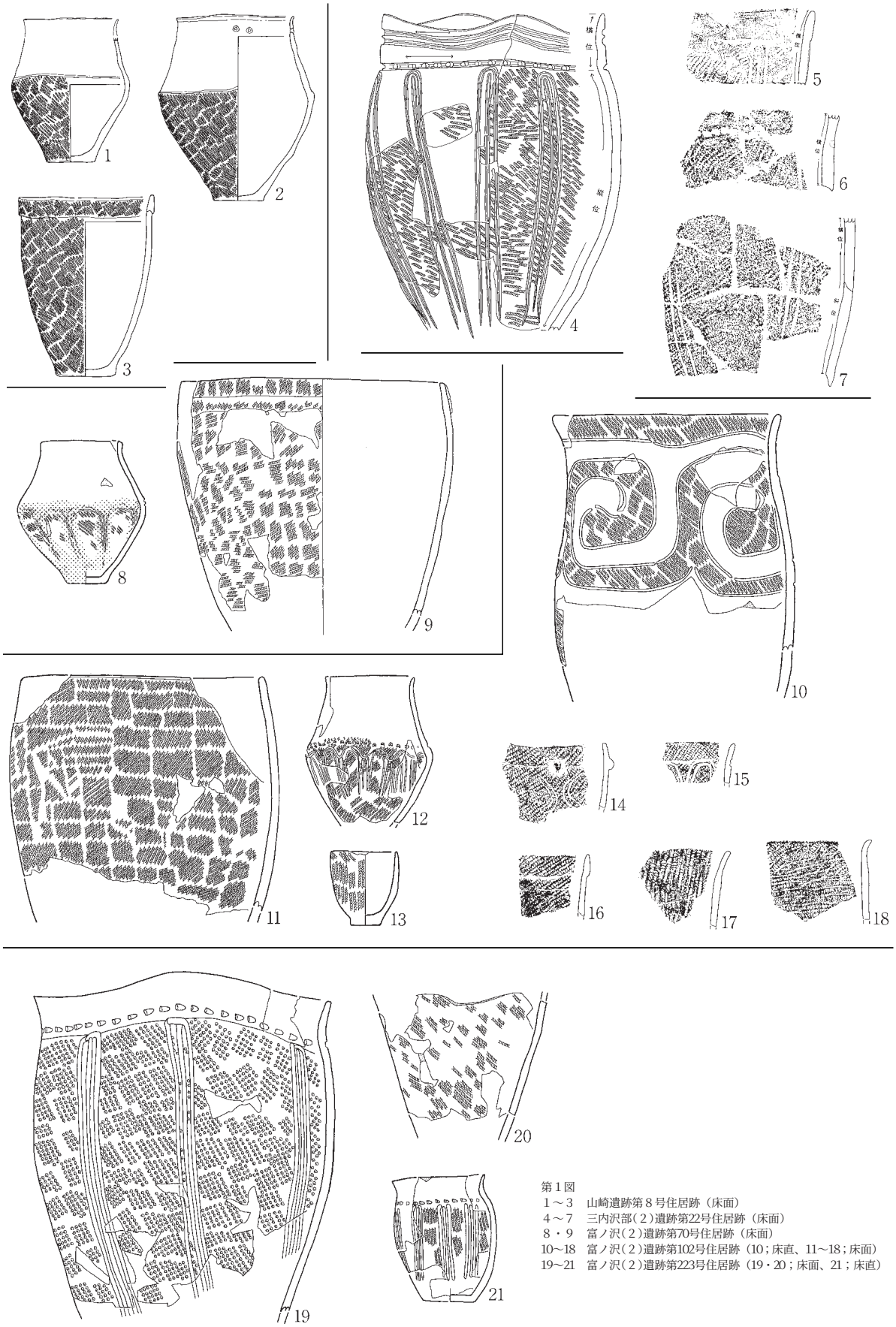
無文帯をもたないものでは、折返口縁をもつものの中に顕著と言ってよいかと思われるが、無文帯をもつものと同様の沈線文をもつものがある。しかし、それほど多いものではなく、地文のみが施文されたものが圧倒的に多い。地文はやはり単節縄文の縦位回転が多い。

５　まとめ

最花式土器は、他の型式に比べて、文様のバリエーションは少ないように感じられる。本型式の継続期間の問題もあるが、逆に言えば画一的な文様で構成されていたことを示すものであろう。型式の呼称の問題もあるが、中の平遺跡において「最花式土器」の代表的な器種である口縁部に幅広の無文をもつ広口壺形が出土していないことも誤認（柳沢前掲）の要因になっているものと思われる。中の平遺跡出土土器でこの型式内容が充足されるとも言い切れず、標識遺跡となっているむつ市最花貝塚でも層位的な裏付けは難しい(むつ市教委1983)。型式内容を網羅できるだけの資料数や層位的な裏付けと供伴関係の判断があれば別であるが、ほぼ同じ内容の土器群に異なる型式名を付与した結果といえる。「最花式土器」と「中ノ平Ⅲ式土器」のどちらが正しい呼称かという問題は紙数の都合もあり深入りしないが、先にも述べたとおり、前後型式に比べれば共通認識が得られており、型式として理解しやすいものと思われる。

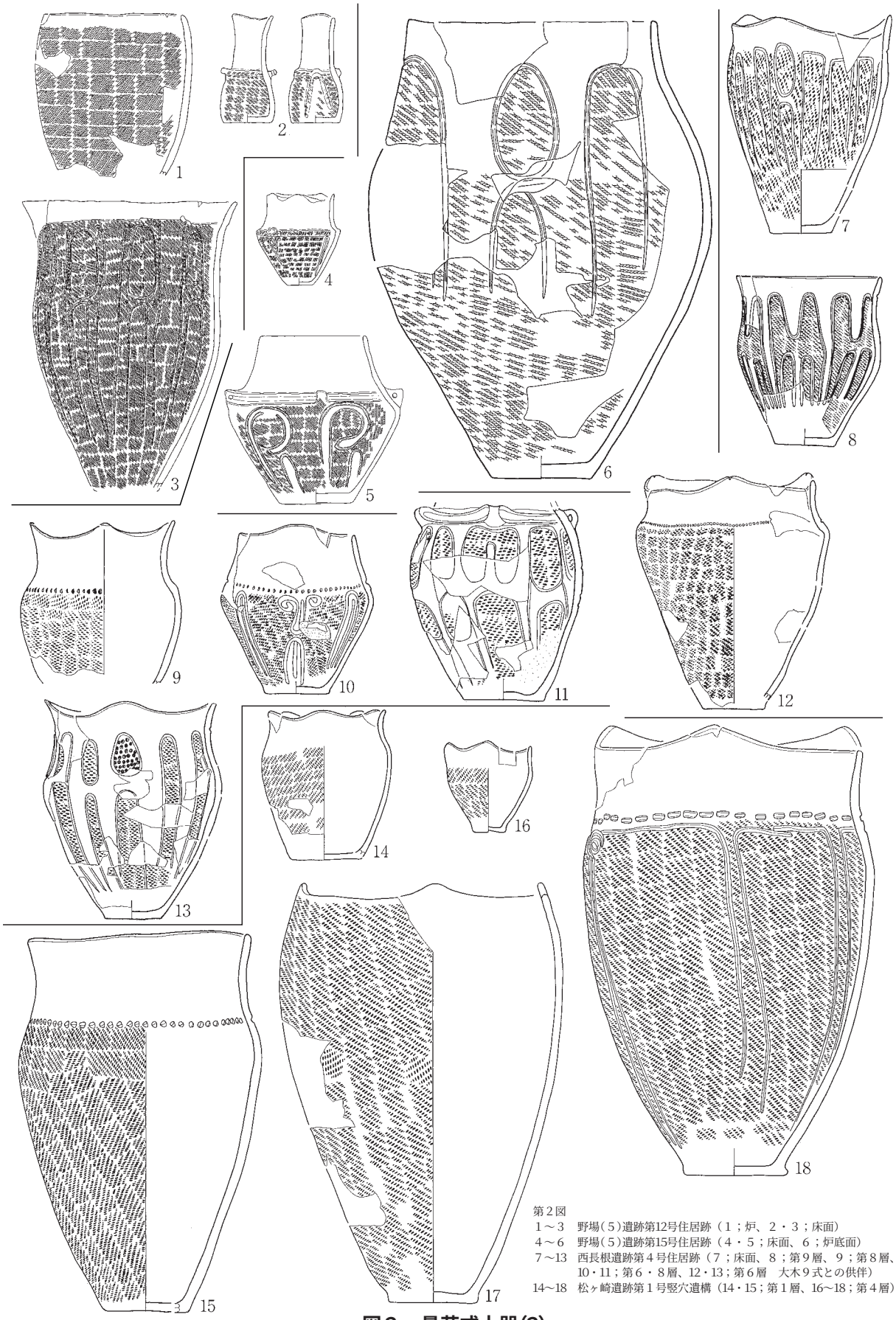
引用・参考文献

青森県教育委員会　1990 『図説　ふるさと青森の歴史』 など
江坂輝弥　1951 「縄文式文化について（その十一）」『歴史評論』33
江坂輝弥　1956 「各地の縄文式土器－東北」『日本考古学講座』第三巻　縄文文化
江坂輝弥　1970 『石神遺跡』
角田文衛　1939 「陸奥榎林遺跡の研究」『考古学論叢』10
村越　潔　1974 『円筒土器文化』
鈴木克彦　1976 「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」
『北奥古代文化』第８号
鈴木克彦　1998 「東北地方北部の縄文中期後半の土器」『研究紀要』第３号
小笠原善範　1995 「西長根遺跡発掘調査」『八戸市内遺跡発掘調査報告書』７？
柳沢清一　1991 「「榎林式」から「最花式」（中の平Ⅲ式）へ－陸奥中期後半編年の再検討－」
『古代』第91号
青森県教育委員会　1982　山崎遺跡発掘調査報告書　青森県埋蔵文化財調査報告書第68集
青森県教育委員会　1978　三内沢部遺跡発掘調査報告書　青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
青森県教育委員会　1992　富ノ沢（２）遺跡発掘調査報告書
青森県埋蔵文化財調査報告書第143集
青森県教育委員会　1993　野場（５）遺跡発掘調査報告書　青森県埋蔵文化財調査報告書第150集
八戸市教育委員会　1995 「西長根遺跡」『八戸市内遺跡発掘調査報告書７』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集
八戸市教育委員会　1994 「松ヶ崎遺跡」『八戸市内遺跡発掘調査報告書６』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第60集
むつ市教育委員会　1983 「最花貝塚第３次調査報告」 むつ市文化財調査報告書第９集



第１図
１～３　山崎遺跡第８号住居跡（床面）
４～７　三内沢部（２）遺跡第22号住居跡（床面）
８・９　富ノ沢（２）遺跡第70号住居跡（床面）
10～18　富ノ沢（２）遺跡第102号住居跡（10；床直、11～18；床面）
19～21　富ノ沢（２）遺跡第223号住居跡（19・20；床面、21；床直）

図１　最花式土器(1)



第２図
１～３　野場（５）遺跡第12号住居跡（１；炉、２・３；床面）
４～６　野場（５）遺跡第15号住居跡（４・５；床面、６；炉底面）
７～13　西長根遺跡第４号住居跡（７；床面、８；第９層、９；第８層、10・11；第６・８層、12・13；第６層　大木９式との供伴）
14～18　松ヶ崎遺跡第１号竪穴遺構（14・15；第１層、16～18；第４層）

図２　最花式土器(2)

青森県における余市式土器について

上　野　茂　樹

1　はじめに

青森県における縄文時代中期後葉の土器編年については、現在でも様々な議論があり、それは円筒土器が大木式土器の影響をどのように受け入れたかという観点から検討が進められてきたといえる。

土器様式の変化は、土器の変化にとどまらず、当時の文化の変化もうかがわせるものであるが、なぜ南の土器文化の影響ばかりが目立ち、北からの土器文化の流れは目立ったものを見せていないのであろうか。

ここでは、縄文時代中期後葉における、南の土器文化からの影響ではなく、北の土器文化からの流れをかいま見る材料のひとつとして、青森県出土の余市式土器を概観してみたい。

2　余市式土器について

余市式土器は1935年（昭和10年）に北海道余市町大谷地貝塚から発掘された資料に基づき形式設定された。大沼忠春（大沼　1996）によると、器形は円筒形を基本とし、体部にくびれがあるものや底径に比べて口径の大きい深鉢型を呈するものもある。口縁は平縁で、底部は平底をなす。口縁にそり折り返し状の貼付をめぐらす。体部にも数段の箍状に貼付をめぐらすのが特徴とされる。文様は、全面に縄文を施すものがほとんどで、縄文には羽状縄文と斜状縄文のものがある。ほかに、刺突文、縄線文、沈線文などが加えられているものもある。胎土は少量の繊維を含むものがあるが、多くは含まれていないとされている。

編年的位置については、型式設定以降、中期後半に位置づけられていたが、津軽の山田野Ｂ式が共伴することによって後期初頭とされるようになり、またそこから変更されてきているといえよう。大沼（大沼　1989）では、それまで余市式土器群に含められていた（高橋　1981）ノダップⅡ式、レンガ台式を余市式から分離し、それらの位置づけを中期末葉とした。そして、余市式は後期に属し、６型式（余市式→小野幌式→伊達山式→タプコプ式・古→タプコプ式・新→手稲砂山式）に分かれるものとされた。余市式に山田野Ｂ式が共伴することによって後期初頭とするもの（大塚・戸沢編　1996）もあるが、山田野Ｂ式を大曲Ｉ式とし、その位置づけを中期末とする（鈴木　1994・1996・2000）近年の見解によれば、余市式は中期末に位置づけられることになる。以上のように、余市式の編年上の位置については、見解が統一されていないというのが現状であろう。

したがって、ここでは、本県の報告書のなかで余市式及び余市系並びに余市式の影響を受けたと報告された土器を紹介することとする。

3　本県の状況

これまでに余市系土器及び余市系土器の影響を受けた土器の出土が報告されているのは、今別町山崎遺跡（青森県教委　1982）、青森市長森遺跡（青森市教委　1985）、平舘村尻高（４）遺跡（青

森県教委　1985)、六ヶ所村沖附（２）遺跡（青森県教委　1986)、青森市小三内遺跡（青森市教委 1994）である（図１）。

山崎遺跡からは、胴部半ばにふくらみをもつ深鉢型の土器が出土しており、中期末葉から後期初頭に比定されている。文様帯を刺突文や沈線、０段多条の圧痕文で区画し、口縁部は無文、胴部には０段多条の斜縄文を施している。

長森遺跡からは、口縁部がゆるやかに外反する平縁深鉢形土器が出土している。条線文（縄線文のことか？）と粘付文（貼付文のことか？）で文様を構成し、口縁部文様帯は２条１組の縄線文により形成されている。ボタン状の貼付を配し、その間を縄線文で結ぶ。胴部はＲＬの原体による単節斜縄文が施され、底部にはスダレ状の痕跡が残る。胎土には砂粒を含んでいる。中期のものとされている。

尻高（４）遺跡では、第２号特殊竪穴遺構の覆土と遺構外から円筒型深鉢形土器が出土している。表面には粘土紐がバンド状に数段巡らされており、胴部下半と口縁直下に多くみられる。全面にＬＲの原体による縄文が施されているが、表面は縦位回転、バンド上は横位回転されている。胎土には小礫・砂粒を含んでいる。中期の土器として分類、記述されているが、明確な時代決定については、共伴土器がないことから明言を避けている。

沖附（２）遺跡からは壺型土器が出土している。口頸部がやや内反し、体部下半が張り出している。ＲＬの原体を縦位回転させ施文した後、胴部の張り出し部の下位に粘土帯を１条巡らせている。粘土帯は指でなでて調整している。

小三内遺跡からは、第８号住居跡内の堆積土から深鉢形土器が出土している。口縁部がやや外反し、胴部半ばがややふくらみをもつ。口頸部とふくらんだ胴部にバンド状の貼付を施したのちにＬＲの原体を横位回転させ、さらにバンド上に連続刺突が施されている。レンガ台式に比定されており、共伴土器については堆積土からの出土のため特定していないが、最花式、大木10式併行と見られる土器が同じ堆積土内から出土している。

以上が筆者の目に触れた、県内から出土した余市系土器群である。大沼に従えば、山崎遺跡・沖附（２）遺跡・小三内遺跡はレンガ台、長森遺跡はノダップⅡ式、尻高（４）遺跡が余市式土器に比定できると思われる。

4　おわりに

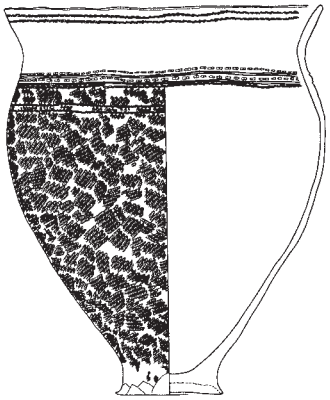
本稿は余市式土器の編年を検討するのが目的ではないが、明確な共伴例がないことから、余市式に対応する土器形式は明らかでない。また、出土例は５遺跡にとどまることから、中期後半における北海道の土器文化からの影響は、大木式土器の影響に比べるとかなり小さなものだったのではないかと考えられる。

気候の温暖化が終焉し、寒冷化が徐々に進行していく中で、なぜ北の土器文化より南の土器文化がより多く受け入れられたのだろうか。南の土器文化にとって、寒冷化は誤差の範囲内だったのだろうか。あるいは、自然環境の変化など問題にならない適応性の高い土器文化を確立していたのだろうか。これらについては、今後の資料の増加を待ちながら、検討を進めていきたい。

最後になるが、資料については成田滋彦氏から御教示賜った。記して感謝申し上げたい。

参考文献

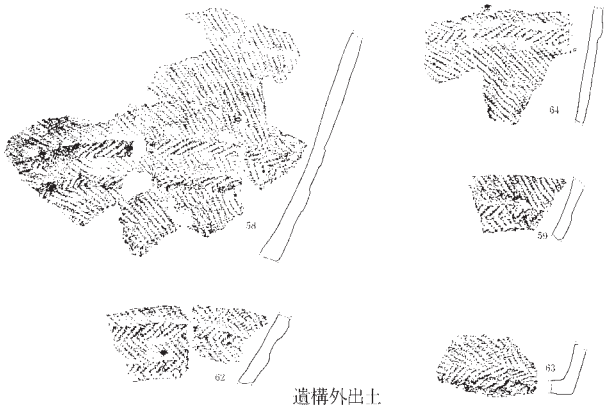
青森県教育委員会	1982	山崎遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第68集
青森県教育委員会	1985	尻高（２）・（３）・（４）遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第89集
青森県教育委員会	1986	沖附（２）遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
青森市教育委員会	1985	長森遺跡	青森市の文化財
青森市教育委員会	1994	小三内遺跡	青森市埋蔵文化財調査報告書第22集
大塚初重・戸沢充則編	1996	余市式土器	最新　日本考古学用語辞典　柏書房
大沼忠春	1981	北海道中央部の縄文中期から後期初頭の編年について	考古学雑誌66－４
大沼忠春	1989	北筒式土器様式	縄文土器大観　第１巻　小学館
大沼忠春	1996	余市式土器	日本土器事典　雄山閣出版
鈴木克彦	1994	大曲１式土器	縄文時代研究事典　東京堂出版
鈴木克彦	1996	大曲１式土器	日本土器事典　雄山閣出版
鈴木克彦	2000	東北地方北半部の中期・後期区分に関する編年学的研究（上）－大曲１式などの中期末葉の土器群－	縄文時代11　縄文時代文化研究会
高橋正勝	1981	北海道南部の土器	縄文文化の研究４　雄山閣出版



山崎遺跡

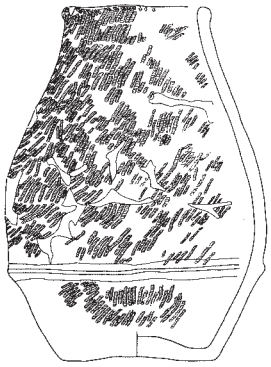
長森遺跡

第2号特殊竪穴遺構出土

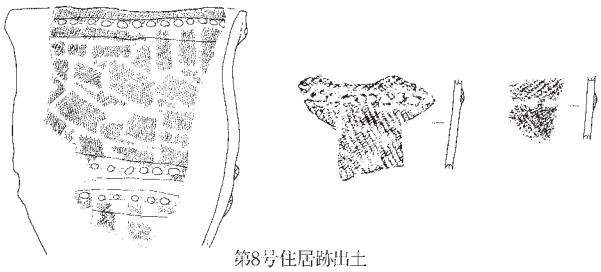


遺構外出土

尻高(4)遺跡



沖附(2)遺跡



第8号住居跡出土

0　10cm

小三内遺跡

図１　青森県出土の余市式土器

執筆者一覧

成田　滋彦（なりたしげひこ）　青森県埋蔵文化財調査センター
総括主幹、資料課長

中嶋　友文（なかじまともふみ）　青森県埋蔵文化財調査センター
文化財保護主幹

上野　茂樹（うわのしげき）　青森県埋蔵文化財調査センター
文化財保護総括主査

小笠原雅行（おがさわらただゆき）　青森県埋蔵文化財調査センター
文化財保護主事

坂本　真弓（さかもとまゆみ）　青森県埋蔵文化財調査センター
文化財保護主事

茅野　嘉雄（ちのよしお）　青森県埋蔵文化財調査センター
文化財保護主事

研　究　紀　要　第　7　号

発行年月日　2002年１月31日
編集・発行　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038－0042　青森市新城字天田内152－15
電　話　017－788－5701
ＦＡＸ　017－788－5702
印　　刷　長尾印刷株式会社
〒030－0931　青森市平新田字森越17－１
電　話　017－726－7121

BULLETIN

OF
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL ARTIFACTS RESEARCH CENTER

No.7

CONTENTS

Report on the pit dwellings excavated from NOGI site in Aomori City — *NAKAJIMA* Tomofumi

Making of Dogu (Clay figurines)
-Study of artifacts preserved in Aomori Prefectural Archaeological Artifacts Research Center - — *NARITA* Shigehiko

Receptivity of DAIGI type pottery
-A case study of the accompaniment of ENTO type pottery and DAIGI type pottery- — *SAKAMOTO* Mayumi

Report on potteries of heterogeneous lineage excavated in Aomori Prefecture belonging to the period between the end part early Jomon and dawning time middle Jomon
-From findings in Aomori prefecture- — *CHINO* Yosio

Notes on SAIBANA type pottery — *OGASAWARA* Tadayuki

YOICHI type pottery in Aomori Prefecture — *UWANO* Sigeki

January 2002
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL
ARTIFACTS RESEARCH CENTER